

平成24年度
新潟県立大学

公開講座

阿賀野川 流域から 世界へ

記録集

第1回 阿賀野川流域を 知る……………01

| 日時 | 平成24年10月7日(日)開催

| コース | 阿賀野川・松浜～鹿瀬ダム

第2回 新潟で水俣学を 継承する……………21

| 日時 | 平成24年10月27日(土)開催

| 会場 | 新潟県立大学 1313講義室

第3回 阿賀野川流域と 『阿賀に生きる』を語る…41

| 日時 | 平成24年12月1日(土)開催

| 会場 | 新潟県立大学 新学生ホール2階

第4回 阿賀野川流域から 発信する……………59

| 日時 | 平成24年12月15日(土)開催

| 会場 | 新潟県立大学 新学生ホール2階

主催／公立大学法人新潟県立大学 後援／新潟県 新潟市 新潟日報社 NHK新潟放送局 NPO法人新潟水辺の会

平成24年度新潟水俣病関連情報発信事業 環境省補助事業

はじめに

水俣病の確認から半世紀がたちました。患者さんたちの苦しみは「解決」できませんが、公害病を風化させるのではなく、そこに学び、地域を見直す取り組みが若者たちにも広がっています。

本年度の連続公開講座では、「阿賀野川流域から世界へ」というタイトルのもと、阿賀野川のほとりにある新潟県立大学から、これまでの道のりを学び、他地域の動きや若い世代の活動を伝えることで、地域の方々に阿賀野川流域の魅力を再発見する機会を提供したいと願った次第です。

第1回は、行政学・政治学・新領域法学が専門の国際地域学部・田口一博運営委員の企画案内により、「阿賀野川流域を知る」と題し、阿賀野川を河口から遡り、その周辺を見学しながら上流の鹿瀬までを訪ね、阿賀野川と地域の関係を再確認しました。

第2回は、アメリカ文学・環境文学が専門の国際地域学部・小谷一明運営委員の企画進行により、「新潟で水俣学を継承する」と題し、水俣病とは何だったのか、この経験をどう伝え活かすべきなのかを主に、新潟県立大学学生が熊本の水俣学を取材し報告しました。

第3回は、山中知彦センター長の企画により、「阿賀野川流域と『阿賀に生きる』を語る」と題し、長年阿賀野川を見守ってきた3名の方々をお招きし、ドキュメンタリー映画「阿賀に生きる」を軸に、阿賀野川と流域の新たな展望を語って頂きました。

第4回は、再び田口一博運営委員の企画進行により、「阿賀野川流域から発信する」と題し、阿賀野川流域からの発信のため、四日市からゲストをお招きし、基礎となる新潟学：阿賀野川学を構想しました。

本冊子は、これら4回の講座の記録を本学学生をはじめ会場に来ることのできなかった方々へも伝えられるように編みました。阿賀野川流域に新たな視点を加えた記録と自負しております。本誌を手にした方が、ご自身の教材として、また時代の証言として活用されることを望みます。

本公開講座は平成24年度新潟水俣病関連情報発信事業（環境省補助事業）を受けて実施いたしました。

最後に、この場を借りて各回登壇者・参加者の皆様はもとより、本企画の契機となる補助事業を紹介頂き、事務手続き等でご尽力下さった、小林傑氏（地域連携センター初代事務局）をはじめとする新潟県生活衛生課の皆様、後援者の皆様に感謝を表したいと思います。

なお、掲載文章の文責は当センターに帰します。

平成25年3月

新潟県立大学地域連携センター
運営委員・事務局一同

平成24年度 新潟県立大学公開講座「阿賀野川流域から世界へ」

第1回 阿賀野川流域を知る

阿賀野川を河口から遡り、その周辺を見学しながら上流の鹿瀬に至り、川と地域との関係を再確認しました。

開催日時：10月7日（日）9：00～16：30

記録編集担当：地域環境コース4年 相川美穂

今回のバスツアーは、現在の阿賀野川流域がどうなっているのか、そして、どのような資源と環境に恵まれているのかを再発見し、流域に住む人達が阿賀野川を誇りに思っているという田口先生の願いから企画されました。一日かけてコースをまわりましたが、そうした田口先生の強い想いを感じ取ってか、参加された方々みなさんが大変興味深そうに話を聞き、時には意見を交わしている様子が印象的でした。



新潟県立大学発▶ 海老ヶ瀬保全会の水田看板▶

松浜市



はじめに向かった先は毎月2と7がつく日に開催されている松浜市。地元産を中心とする農産物やすぐ近くの松浜漁港の魚、そしてニット製品などが賑やかに売られています。十分に観光資源となるこの市を、地元の方だけでなく多くの人に知って欲しいという思いからコースに選ばれました。しかし、阿賀野川産の魚は地元でもまだ売っていないそうです。



新潟市でここまで大規模な市が行われていることに驚きました。実際に生産者の方と触れ合うことも出来、ただ買い物をするだけではない別の楽しさがあることを感じました。

松浜市 ■場所 新潟県新潟市北区松浜本町4（新屋敷通り） ■時間 7:30~14:30

阿賀野川右岸緑地▶



県道17 阿賀野川西岸



旧若松街道県道586▶

泰平橋・灰塚屈曲部

次に向かった先は、阿賀野川の下流から4番目に架かる橋梁である泰平橋と灰塚地区の屈曲部付近。右岸の浸水危険地帯では、堤防の耐震工事を車中から見学しました。そして、川が屈曲する灰塚地区には洪水に備え、土手にテトラポットが準備されているなど、普段からの備えがしっかりとされていることを実感しました。



なぜここにテトラポットが…、と感じていた方もいらっしゃったと思います。参加された方々、みなさんがとても興味深そうに田口先生の話聞いていました。

環境と人間のふれあい館



そして施設見学で訪れたガラス張りのきれいな外観が特徴的な環境と人間のふれあい館。新潟水俣病と水環境をテーマにした施設で総合学習の場としても人気があります。館長さんには、1階では水辺にすむ生き物たちとその宝庫となっている阿賀野川の風景や歴史を、2階では新潟水俣病のパネル資料を見ながら、貴重なお話を聞かせて頂きました。



新潟県立環境と人間のふれあい館（新潟水俣病資料館）ホームページより引用



かつての阿賀野川での漁の様子を感じることが出来るように、と考えられた空間はとても幻想的でした。参加者の方達は熱心に館長さんとの質疑応答を行っていました。

環境と人間のふれあい館 ■場所 新潟県新潟市北区前新田字新々囲乙 364-7 ■時間 9:30~16:30 ■休館日 毎週月曜

県道 264 ▶ 月岡温泉 ▶ 国道 290 五頭温泉 ▶



安田瓦ロード・太陽光発電所・阿賀の里

昼食に向かった先は、阿賀の里。この日も沢山のお客さんで賑わっていたのですが、残念ながらメニューには地元のものがほとんどありませんでした。まずは地元で阿賀野川の魚を食べない限り外への流通はない、と田口先生。また、太陽光発電所や安田瓦ロードを見学しました。この地域の特産品である瓦を伝えていくには、もう少し工夫が必要なようです。



新潟県公式観光情報サイト にいがた観光ナビ ホームページより引用



ライン角下りの「阿賀の里へようこそ」：道の駅阿賀の里 ホームページより引用

ここまで阿賀野川での魚が置かれていないということにも正直驚きました。また、阿賀の里の近くには、現在休館中の阿賀野川文化資料館も併設されています。

阿賀の里 ■場所 新潟県東蒲原郡阿賀町石間 4301 ■時間 9:00～17:00

国道 49▶

揚川ダム



上流に向かい、発電に使用する水量が日本一という揚川ダムを見学。ダムの建設後は設備投資など少なく、燃料も使いません。また、設備も極めて長寿命であることから、常に点検や燃料を運び込む必要がある火力や原子力と比べると地元へ落ちるお金は少ないそうです。ダム設置による地元への大きな負担に対し、どうやって還元していくかという問題について考えました。



旧道に入りずっと上から眺めたダムのスケールはとても大きく、圧倒されました。こうしたダム施工の費用など、どのように徴収するべきなのか考えました。

昭和電工鹿瀬工場

現在では広大な土地の一部だけを使って食品の吸水用シートなどを製造している工場を上から眺めました。かつては鹿瀬駅から工場の正門までは、従業員の列でぎっしり埋まっていたそうですが、今はその面影を見ることは出来ませんでした。再び鹿瀬の地に賑わいを作るためにこの敷地をどうするか、という方向に議論が始まっていました。



バスの車内で参加者の方達は、田口先生の講義に興味深く聞き入っていました。昭和電工が姿を現した時には、座席から立ち、その姿を写真に収めていました。

鹿瀬ダムとその周辺



最後に訪れた鹿瀬ダム付近には周辺の振興という施策もあつてか、遊覧船や温泉などの観光施設が作られていました。しかしどうも、あまりうまくいっているようには見えないと田口先生。やはり活気がないのが一番の原因といいます。全国で人口が減っているなか、阿賀野川流域でも人口は減る、という前提で考えなければならないようです。



今回のツアーで分かったことは、阿賀野川流域には豊富な資源が存在するという事。それらをいかに結びつけ全体のイメージを作るかが重要となりそうです。

第1回公開講座

バスツアー 阿賀野川流域を知る

日時：平成24年10月7日（日）

コース：阿賀野川・松浜（新潟市北区）～鹿瀬ダム（東蒲原郡阿賀町）

コーディネーター：田口一博（新潟県立大学国際地域学部准教授）

阿賀野川をどう学ぶか。第1回のバスツアーは単に現状を観察する巡視ではなく、直接観察することのできない背景をどう見るかについての視座を提供することを目的としました。

第一の視座は生活です。人間生活学部を置き、人文学系の科目をも擁する新潟県立大学です。阿賀野川がその流域で生活する人や社会とどのように関わっているのかを考えるのが最初に必要です。

河川は、現在では固定された場所を流れているかのように思われますが、それは近代以降になってからの話。阿賀野川は、もともと現在の蒲原平野全体を信濃川とともに氾濫原としていたものが、徐々に流路が固定され、そして人工的に信濃川と河口が分離され、日本海に直接注ぐようになった歴史を持ちます。県立大学のすぐ北にある通船川は、海岸沿いの砂丘に行く手を阻まれていた阿賀野川を信濃川と接続していた名残りですし、福島潟や瓢湖は阿賀野川の遊水池が取り残されたもの。16世紀末、加賀・大聖寺から新発田へ移された溝口秀勝公は6万石でした。幕末まで続く12代のうちに実質40万石とまで言われるようにした大規模な水田の開拓はまた、阿賀野川の治水と利水によってもたらされた訳です。

まず、このことを感じるきっかけにしてほしいのが、現在の新潟市北区＝旧豊栄市における阿賀野川と人々・社会との関係です。

●松浜市

阿賀野川左岸にある県立大学から右岸に渡り、福島潟の放水路・新井郷川に沿って最初に向かった訪問地は、松浜本町地内で行われている「松浜市」。そもそもツアーをこの日に開いたのも、毎月2と7が付く日に行われている市の開催が土日にあたる日を選んででした。松浜市は明治初年には行われていたといいます。露店のテントで日用品や食料品が売られているのですが、そこにはどんなものがあるのかが一つのポイントです。

露店らしからぬ新品のニットをはじめとした繊維製品があるのは、産地である五泉市がすぐ上流だから。野菜や果物の中には、阿賀野川と信濃川の間の平野で栽培されているもの多数。市の500メートルほど北に松浜漁港はあるけれど、魚介類の数は塩乾物・鮮魚ともさほど多くなく、必ずしも地元産という訳ではありません。ここで気付いてほしいのは、川魚は売られていない、ということです。



蒲原大平野碑



松浜市ニット店



松浜市塩乾物店

市が固定した店舗である商店街へと進化し、今ではそれがスーパー・マーケットやショッピング・モールになっていることが普通でしょう。場合によっては日常的な買い物はすべてコンビニエンス・ストアということも。だから並べてある商品を黙ってかごに入れてレジに運ぶという日常から、お店の人にこれください、といってお話をしながら包んでいただく、ということ自体、今となってはなかなかない、非日常的な体験でもあるのです。有名な輪島朝市（石川県輪島市本町）にも露店は並びますが、その後ろは普通の観光商店街。松浜市の露店の後ろは民家であったり。地元の人にとってはあまりに当たり前だけれど、味わったことのない者にとってその純粹な雰囲気は遠くからでも来てみたくなること、必定です。食料品を買って帰るといのは、主婦の旅行にとってはまさにマスト。朝市で仕入れたものを上手に持ち歩ける工夫や、バスや自家用車で運べるようにして、外からの誘客ができる仕組みを



輪島朝市

作りたい。そんな雰囲気を持っているのが松浜市なのです。

●阿賀野川堤防の耐震化工事

阿賀野川周辺は海拔ほとんどゼロメートル地帯が広がっています。新潟市北区の中心、葛塚付近も一旦浸水すると、なかなか水が引かないところ。だから暴れ川でもある阿賀野川が大人しくしてくれるようにという治水の努力は、決して目立ちはしませんが、粛々と進められています。

東日本大震災では地震による液状化現象で河川の堤防や海岸の護岸が大きな損傷を受け、そこを津波が襲ったことはまだ記憶に新しいこと。この阿賀野川でも事情は同じ。1964年新潟地震では、砂礫層の上にあるこの一帯で液状化現象が起きたことが広く知られています。阿賀野川でも治水上重要な部分について、堤防を液状化から守るための工事が行われています。松浜市からすぐ南側では、日本海の風波と阿賀野川が運んで堆積した砂礫層の下にある岩盤層まで堤防の基礎をつなぐ工事が行われています。その深さは地表から15、6メートル、地下5階以上に相当するとのこと。工事現場をバス車中から眺めるだけでしたが、よほど気をつけていないと目には見えず、また、その効果が発揮できる日はいつになるか、本当にその日がくるかどうかは、実はわからない工事。しかし、阿賀野川の堤防が決壊すると、蒲原平野全体が水没してしまう訳です。一旦そのような事態が起きてしまったらどうなるか。そうならないための投資や安全性はどこまで担保すべきなのか。考えなければならないことは、実は沢山あるのです。



堤防耐震工事

旧国道7号、現県道3号の泰平橋では晴れ間があったため、バスを降りて右岸に経つ記念碑を読みました。この風景が翌10月8日の新潟日報で紹介されました。



新潟日報切り抜き

●灰塚付近

阿賀野川上流では蛇行している阿賀野川ですが、平地を流れる下流でも、屈曲している箇所がいくつかあります。灰塚付近はその際下流。ここで堤防が切れてしまうと、上流からの水はまっすぐ福島潟に向かい、葛塚の市街地を水に沈めることとなります。だからこの付近、堤防の厚さが違います。また、周辺部には堤防に異常があったときに備えるように、水防用の資材が備え付けてあります。正面の川の中にも水流を弱めるための石積み（ベーン工法）が見えます。



灰塚看板

このすぐ上流には水原から笹神を潤している安野川の水門があります。この水門、屈曲部の手前上流部にありますから、洪水時に開けばここから安野川に阿賀野川の水を逆流させることで、堤防への負担を軽減させる信玄堤（霞堤）の役割を果たすのかも。安野川は周辺の他の川よりも水位が高く、付近の用水路等の上を立体交差して流れているからです。頑丈な水門を車中からちらりと見つつ、阿賀野川の堤防から周辺の地形を読んでみます。



安野川水門

●若松街道・京ヶ瀬付近

阿賀野川の堤防道路を離れるのは横雲橋で。横雲橋は新潟水俣病の歴史を振り返るとき、重要なポイントでした。新潟水俣病が認知されて当時、この横雲橋よりも下流の区間だけに、魚の漁獲制限がかかったからです。もちろん、原因がわかった今からすればもっと上流から規制をすればよかったと言うのは簡単かもしれませんが。しかしなぜそうなったのかを考えると、川で漁をする川漁師がいて、だれもが釣をして阿賀野川で遊んでいたということを思い出さなければならないでしょう。ただ、どうして横雲橋からだったのかな、というのまでを調べていません。

このあたり、石油やガスが出ます。ひょっとしたらそういうことが原因と考えていたのか？ また、阿賀野川の流域そのものが、さまざまな地下資源が採掘されていたところ。色々考える出発点として、横雲橋を見た上で、帝国石油のプラントの脇を通る遠回りをした上で、福島潟に戻るルートを選択しました。

なお、時間があれば水原市街地の越後府跡（旧新潟県庁＝元市島邸）や阿賀野川氾濫原の一つ、瓢湖

にもと思いましたが、割愛いたしました。



越後府櫓（復元）

●新潟県立環境と人間のふれあい館（新潟水俣病資料館）

阿賀野川から直線距離で8キロ。福島潟のほとりに1995年開館したのがこの資料館。四大公害病関係の資料館としては、2012年4月、富山市に県立イタイイタイ病資料館が開館し、名称・内容・陣容はそれぞれながら、4か所それぞれに揃いました。

当日は館長以下、職員の方に館内を案内いただきながら見学いただきました。到着が遅れたため、用意いただいた映画を見ることができなかったのが残念でしたが、これまでに訪問したことがある、という方はほとんどおらず、貴重な経験になったのではと思います。「深刻な紛争の発生している地域において、研究の学問的独立性を維持しつつ、調査遂行を可能にするようなテーマ設定をいかに行うかということについての困難さ」飯島伸子ほか編『新潟水俣病問題 加害と被害の社会学』1999年、あとがきの一節（282頁）です。

新潟水俣病とも当然向かい合うことになる、阿賀野川の問題を考えるために、企画に先立って水俣、四日市、富山の各資料館をはじめ、災害史として北海道の奥尻島津波館、長崎県がまだすドーム（雲仙岳災害記念館）、また、重い後遺障害が今でも癒えることのない広島・長崎の原爆資料館や祈念館等を訪ね、また地域の方にインタビューしました。それぞれに語り継ぐことの大切さは当然ですが、一方で経験者から次の世代にどのように引き継ぐべきか、

また、いまもって苦しんでいる多くの人たちに私たちはどう接すべきなのかは、どこも大きな悩みのようです。例えば水俣で工場排水が原因であることを確定させたのは、猫に排水を与えることで神経症状が発生することを証明したことが決め手ですが、



新潟県立環境と人間のふれあい館



富山県立イタイイタイ病資料館



三重県環境学習センター



四日市市環境学習センター

現代の見学者からは「猫400号はかわいそうではないか」という反応があることに苦慮しているといえます。患者の人権を考えて、多くの病状写真等が撤去された結果、現実には起きたこととして水俣病を感じることができない、という訳です。簡単に答を出せる訳がありませんが、やはり一人でも多くの人に、このようなことがあったのだ。そしてそれは今でも続いている、ということを知ってもらい、そしてそれぞれに考える。今できることはと考え、行ったのが環境と人間のふれあい館訪問です。

●新潟東部太陽光発電所・安田瓦ロード

天気は時折土砂降りに。月岡温泉から出湯、五頭、今板、村杉の温泉郷前を経て陸上自衛隊大日原演習場前からまず新潟東部太陽光発電所へ。工業団地の一角に作られた、積雪地でも太陽光発電が可能であることを実証する県立のプラントです。太陽光パネルそのものはもう珍しくないでしょうが、合計

5ヘクタール超の敷地に2メガワット（2000kW）のパネルが並ぶのは圧巻です。自治体立として初めての施設でしたが、2年間の運用が高成績であったため、さらに現在地の周辺に15メガワット分の増設計画が進められています。水の豊かさから多数の水力発電所が作られた阿賀野川ですが、もう一つ。阿賀野川がつくった平地を利用した再生可能エネルギー利用ということも実用化されている訳です。休止中の柏崎刈羽原子力発電所の出力は、1機あたり1,100～1,356メガワット。1機あたりは太陽光パネルの敷地にすると現在の550倍、2750ヘクタール、つまり27.5平方キロですから、阿賀野市の面積の8分の1、新潟市東区なら7割が必要になります。柏崎刈羽原発の敷地4.2平方キロの6.5倍ですね。

隣接する安田瓦ロードも車窓からの見学。阿賀野川が運んだ粘土で焼かれるのが安田瓦。日本に瓦の



安田瓦シンボルモニュメント



太陽光発電所



横断地下道入口

産地は40ほどと言いますが、瓦ロードではバス停も瓦、塀も瓦、シンボルモニュメントも鉛色の瓦です。安田の瓦工場は現在では集約が進んでいるようですが、よく見ると瓦ロード以外でも、町のあちこちで瓦が使われています。国道49号を横断する地下道入口などがその代表ですね。地域で材料が取れ、それを使った技術が伝承されるのが典型的な地場産業。だから大切なのは、製品よりもそれを産む技術なのでしょう。2011年の会津若松・鶴ヶ城の葺き替えで使われた赤瓦はこの安田産。伝統的な製品だけでなく、培われた技術で挑戦するというのが地場産業の真骨頂です。

●咲花温泉を見つつ、道の駅阿賀の里へ

阿賀野川に沿って国道49号を南東に。このあたりから阿賀野川は新潟県管理区域となり、一級河川ではなかなかない、自然状態の流れに変わります。対



咲花温泉の名残雪

岸は咲花温泉。五頭温泉郷は開湯1200年と言われ、弘法大師伝説もあるほどですが、咲花は戦後すこし経ってから発見された温泉。阿賀野川の岸辺に温泉が湧いている絶好のロケーション。どこの宿の湯も川の前に遮るものなく、みんな地元の経営で家庭的な雰囲気が売りです。しかし宿はほとんどが岸辺に。それ故、阿賀野川が増水すると、すぐに施設も浸水してしまう悩みを持っています。ここから上流は両岸に平野はなく、切り立った山が連なります。一旦増水すると、極端に水位が上がってしまうのです。

現在、増水に備えて堤防を整備する話が進められていますが、一方で景観を確保するために、京都の



阿賀野川文化資料館

鴨川にあるような「川床」の整備も行われようとしています。ときに増水・氾濫を起こす阿賀野川をどのようにつきあって行くか。いま、その知恵が試されているところです。

昼食場所とした道の駅阿賀の里は、阿賀町旧三川村に入ってすぐの川岸にあります。敷地内に阿賀野川文化資料館があるのですが、現在休館中。上流の三川駅前からここに向かう阿賀野川ライン下りは2011年新潟福島豪雨で土砂が堆積し、こちらも運休中です。道の駅には駐車場・レストラン・みやげものの売店のほか、魚市場も併設されています。どんなものが売られているのかを見て考えてもらうのが、本来の目的です。

結論を言ってしまうと、道の駅には日本海直送の魚はあっても阿賀野川の魚はない。また、山菜やきのこの宝庫であるのですが、それらもほとんど売られてはおらず、レストランのメニューにもないのが現状です。ここも松浜市同様、阿賀野川の隣にある



くまモンの左側マイクに注目！

のですが、やはり阿賀野川産・流域産は、ほかならぬその流域では商品になっていないのです。なんとももったいないことですが、これはどうしていけばよいのでしょうか？

水俣市の特産品デコポン（柑橘類の一種）は、水俣を名乗らずに「不知火」というブランドで売られています。地域のブランドとしては、別の名を名乗ることも一つの方法でしょう。では、阿賀（野）は使わずに、蒲原（郡名。下越のうち、村上を除く大部分。静岡県庵原郡の蒲原町は静岡市に編入されて消滅。）や会津（藩名）ですか？ より大きくは交通で、磐城国と越後国をとって磐越という太平洋まで横断する名称も使われていますが、さて。

●揚川ダム

阿賀の里から上流の阿賀野川は、いよいよ山が急峻となり、その間を縫って走る蛇行がずっと続きます。それにしただって勾配も急になってきま



阿賀野川頭首工



揚川ダム

す。そこで現れるのがダムと発電所です。もっとも下流にあるダムは、咲花温泉の下流にある阿賀野川頭首工（農業用水路の取入口）ですが、おそらく「橋？」のようにしか見えなかったことでしょう。しかし受益面積は163平方キロもある新潟県一の頭首工です。なぜそうか、というと、阿賀野川が並外れた流量を持つからに他なりません。

揚川ダムもそう。発電用ダムとしては日本最大の流量なのですが、堰のようにしか見えません。発電機のタービンを回すのは、高校の物理でいう仕事。だから質量と重力加速度に高さを掛けたもの。質量にあたる流量が小さい場合は高さ、つまり落差を大きくすれば同じ仕事ができますし、阿賀野川のように流量があれば落差は小さくてよい。機械的には高压で高速運転するよりは、低压で高トルクの運転をした方が安定している筈。揚川ダムの高さは19メートル。最大出力は5万3,600kW。よく知られた黒部川第4ダムは180メートル。しかし10倍の高さの構造物を作るのはどれだけ大変か、ということです。阿賀野川は川幅の狭さと流量の多さから、ダムを造るにはもってこいの川なのでしょう。阿賀野川からはるかに遡った最上流の只見川には田子倉や奥只見には高さが140メートルにもなる巨大ダムもあります。



奥只見ダム（魚沼市）

さて、この揚川ダムは東北電力、つまりこの周囲で使われる電力になるのですが、ここから上流にあるダムは地域に電力需要があって作られたものではなく、ダムの好適地だったから作られたもの。鹿瀬に立地した昭和「電」工も石灰岩と電力があったからだった訳ですが、一方、阿賀野川と並行している

磐越西線は喜多方より東しか、電化されていません。阿賀町旧鹿瀬町では、古くから水力発電所があったにもかかわらず、昭和40年代まで電力が供給されていなかった地区もあったのです（現在でも幹線からでなく、発電所の自家用電力の余剰分が供給されているそうです）。

ダム、というよりは川がせき止められることで、新潟から津川までの水運は不可能になりました。また、上流福島県側から行われていた木材の筏流しももちろん出来なくなりました。一部魚道が作られるにしても、サケやアユといった海から遡上する魚はもちろん、阿賀野川を行き来していた魚にも大きな影響を与えたことは当然です。揚川ダムは昭和30年代の建設ですが、源流只見川にいたる電源開発と地域の関係を考えるために、国道49号から逸れて上から巨大な堤体を眺めていただきました。

この付近は1967年の羽越大水害をはじめ、何度も洪水に見舞われた箇所です。磐越自動車道の橋脚に残る増水の跡を見、三川中学校が歌い継いでいる合唱組曲「阿賀野川」を車中で聞いていただきました。

●津川駅・津川河港

戊辰戦争の北越戦争（1868・慶応4年5～8月）、阿賀野川に並行する若松街道は戦場となります。阿賀野川の舟を押さえられてしまった官軍の山縣有朋は新発田から陸路、阿賀町津川に至りますがここで麒麟橋は当時、もちろん存在していません。会津藩が舟を引き上げたため、どうしても阿賀野川を渡ることができなかったのです。そのときの遺跡があるわけではありませんが、ところどころに旧街道の石畳が残るところもある津川付近は歴史を知ること面白さが何倍にもなる町です。今回は麒麟橋は渡らず、津川駅前から右岸＝北岸を磐越西線と阿賀野川の間を走る県道で鹿瀬に向かうこととしました。

磐越西線は鉄道史としても面白い路線です。新津から五泉・馬下までは1910年に、津川までは1913年に信越線の支線として開業しています。そして翌1914年に福島県の野沢まで開通し、郡山・若松からの岩越線と直通。上越線の開通までは信越本線と並ぶ上野＝新潟連絡ルートでした。信越線や上越線と比べて急勾配や長大トンネルもなく、2007年まで貨物輸送も行われていました。阿賀野川にかかる橋梁は産業遺構としても興味深いものがあります。もっとも現在では津川以西が1日11往復、福島方向へは



ばんえつ物語号



津川駅・7トン給水



津川河港

8往復とかなり淋しい状況ではあります。津川駅には蒸気機関車用の給水施設が現存しています。休日に運行されるSLばんえつ物語号はここで7トンの真水を補給するため、16分の停車があります。転車台はありませんが、蒸気機関車の給水施設の方が珍

しいのではと思います。

津川駅前から対岸を見ると、津川河港の跡が見えます。河港と言っても灯台やクレーンがあるわけではありません。今では岸から川に降りる階段が付いているだけですから、一見わからないことでしょう。狐の嫁入り屋敷に展示されている写真や古図を見ると、麒麟山の南側の常浪川の入江全体が河港だったようです。

対岸に麒麟山の北側、麒麟山温泉を見て、程なく鹿瀬駅前に至ります。

●鹿瀬駅・昭和電工工場

かつて、鹿瀬駅から昭和電工の工場まで、歩く人の行列がずっと続いていたといえます。往事の磐越西線では、五泉のニット産業は女性の職場、鹿瀬の昭和電工は男性の職場となっており、五泉と東蒲原



鹿瀬駅



鹿瀬駅踏切



新潟昭和社宅跡

とでは行き来が盛んだったそうです。今ではその面影は感じられませんが、かつては地域間の人の往来は鉄道で行われ、多数の近距離客が利用していたようです。そのころを語る昭和電工社宅のハーモニカ長屋は一部まだあるのですが、阿賀野川を挟んで駅の対岸で、バスは入らないため省略。そのまま昭和電工（現：新潟昭和）工場を上から望める場所まで移動しました。

電力は今のようにならなくても簡単に手に入る訳ではなかった時代、まず、水力発電が行われて、そしてそれを利用する需要者が求められました。そして電力を使う工場は付近で何か原材料となるものを求めた、という順番です。そこで働く労働力は後から付いてくる。おそらくは山稼ぎをする集落が点在していたところに、突如ダムと工場ができて、磐越西線を使って通ってくる人たちを輸送して、ということだったのでしょう。明治20年の現鹿瀬地区（日出谷村）の人口は3,352人と記録にあります。

工場は現在でも一部が操業を続けています。しかし鹿瀬駅前から工場の門まで人の列が切れなかった、という賑わいはありません。ある意味、企業城下町どこでもある栄枯盛衰が個々でも繰り返された、ということでしょうか。しかし、近世・近代から続く鉱山・工場の立地と、現代になってから置かれた立地とはいくつかの点で異なりますし、鉱山だけで比べても、それぞれに特徴があるのではないかと感じます。

阿賀野川の流域では下流は石油・ガス、阿賀野市では粘土、阿賀町三川に入ってベントナイトから始まり、草倉銅山など、種々の鉱物資源が採掘されてきました。鉱山にもいくつかタイプがあります。採

掘り出して持ち出すだけ、ということであれば、そこでは掘り尽くした後は何も残りません。佐渡金山、島根県の大田銀山などはそれでしょう。多くの人がそこで働いたのであっても、慰安や娯楽の場だけで、そこに産物を利用する他の産業が立地しなければ文化は育まれません。厳しい労働で払われた賃金は「稼ぎ仕事」なのであって、さらに何かに再投資される、というわけではないのです。わかりやすいのは学校にどれだけの投資がなされているかでしょう。

昭和電工の鹿瀬工場は水力発電という「再生可能エネルギー」と石灰という掘り尽くしてしまう資源を利用し、磐越西線で得られる労働力を利用し、肥料を生産、それを磐越西線で移出することから始まりました。工場が一旦できると、石灰がなくなっても次の製品を作らなければなりません。そこでインフラを適宜更新しながら新しい製品を作っていくことになりました。

歴史を辿っていくと、後の新潟水俣病を起こさないためのいくつものチャンスがあったにもかかわらず、活かすことができなかったのはなぜか、ということに行き着きます。草倉銅山が操業していた時代、鉱山の残滓が阿賀野川に流出するたびに魚の斃死事件を起こしています。しかしどうにも、その場限りの対応しか採られたようすがありません。原因は（何が原因物質であるかはともかくとして）はつきりしている訳ですが、十分な再発防止策が採られないのです。これは工場という立場を離れて、現地に立脚して地域の研究を行うという組織も研究者もいなかった、ということに尽きるのではないのでしょうか。先に挙げた飯島伸子氏の述懐をやはり噛みしめなければならないのです。

この鹿瀬工場は現在、見学用には公開していません。しかし広大な敷地の大部分は使われていないように見えます。新潟水俣病という負の歴史ばかりが強調される工場ですが、他方、昭和電工は全国一律の給与で多くの人を雇い、地域を潤したこともまた事実なのです。工場内の原因施設は残されていないにせよ、むしろ他の「四大公害病」地域のどこでも行われていない現存する工場の見学を通して正確な理解を得られるような方策を採った方がよいのではないのでしょうか。なぜならば、この鹿瀬、いや、かつての日本で起こったことが、世界の各地で再び行われてしまっているからです。工場の遊休化してい

る部分が残されているからこそ、現物資料を使っての教育・研修ということが可能のはずです。また、それこそが企業が持つ、社会に対する責任であります。

そのような見方をすると、鹿瀬工場が操業していた時代、接待に用いられた麒麟山温泉をはじめ、福島県境を超えて会津若松方面に向かう磐越西線の車窓からの風景も、なかなか見ることができなくなってしまった日本の原風景として国内外に強く訴えることができる資源であると思うのです。もう、にらみ合っている時代は終わりにしようではありませんか。

●奥阿賀ふるさと館前（終点）

昭和電工工場を眺望した後、国道459号の峠を降りるとすぐ、鹿瀬ダム・鹿瀬発電所が右手の谷に見えてきます。反対車線には何箇所か駐車スペース様



阿賀町鹿瀬水力発電所

の箇所もありますが、木が茂っていて見通しはあまり効かず、ダムの眺望点というほど整備されている訳ではありません。車高の高いバスから見るのが一番かもしれません。

鹿瀬ダムは阿賀野川水系で最初に建設されたダムで、1928年に竣工しています。この区間の国道459号が改修されたのはまだ新しく、この先、福島県方向へは未整備区間が続く「酷道」です（陸月、如月、弥生、…と名付けられた素掘りのトンネルは、それはそれで面白いですが）。地元の人に聞いても、車で県境を越えようという、いや、汽車で行くとごく最近まで言っていたといいます。したがって鹿瀬ダムの建設にも、1914年に全通していた磐越西線が



水無月トンネル

活躍した筈です。

揚川ダムより35年先輩の鹿瀬ダムは高さは1.7倍高い32.6メートル。揚川ダムには一般向きの施設はありませんが、鹿瀬ダムでは国道459号からそれて遊覧船の発着場や奥阿賀ふるさと館といった施設や駐車場、かつて使っていたタービンの展示などがあります。国道の反対側を上ると、肌がすべすべになる、かのせ温泉赤湯です。鹿瀬ダムには発電所が2つあり、最大出力は4万9,500kWと5万5,000kW。合わせた104.5メガワットは現在の新潟東部太陽光発電所の52倍です。

阿賀野川水系のダムは2011年7月の新潟・福島豪雨で被害を受けています。鹿瀬は同年9月に、第二鹿瀬は同12月に復旧していますが、周辺にも土砂崩れや流木の堆積などがあり、本体以外は現在も復旧工事が続いています。確かに記録的な大雨でしたが、豪雨直後に訪れた際には、山中に放置されていた「切り捨て間伐」が大雨で流出したのではないかと、思えるもの、また、手入れされない山から根こそぎ流出してきた若い杉の木なども目に付きました。豪雨災害ですが、しかしそのおおもとは山の管理ができなくなっていることにもあると感じます。

山の管理は人々の生活にも深刻な問題となっています。奥阿賀遊覧船発着場先には、観光目的で造園されたりんご園があります。当初の経営者が撤退後、放置されていた期間もありましたが、地元の有志によって再開されたものです。しかし放置期間に野生のサルが侵入。追い払うことが出来ずにいるうちに、サルがリンゴの味を覚えてしまったのです。リンゴ狩りができるようになる前に、サルに荒らされてしまうことが続いており、このツアーの際も立



奥阿賀遊覧船発着所

ち寄ることが出来ませんでした。リンゴ園で売っているのは、よその産地から仕入れたものだそうです。

サルによる食害を防いだ成功例として聞くのは、人が集団で追い払う意思を見せる、ということだけのようです。地元の高齢者が立ち上がって再開したリンゴ園ですが、柵や網ではサルを防げないし、サルを防ぐと今度は上空からカラスの食害に合うといえます。麓までサルを下ろさないためには、周辺の山林に人が入り、サルの生活域との間で緩衝地帯が形成されなければならないのですが、このあたりでは既に集落にもサルが出没するようになっているそうです。

イノシシやシカは銃猟やワナで捕獲し、ジビエ料理として利用する方法も始まっています。もちろんサルを銃猟によることも可能ではあります。しかし撃つ側にとっても非常にいたたまれないことだそうですし、仮に撃つにしても、集団として妨害や仕返しで危険を伴うともいいます。しかもサルは食肉として利用することもないため、処分困るので手を付けられないとも。山間地の農林業ばかりでなく、家に入り込むなど生活そのものに支障を来すようになっている猿害には、まだこれといった対応策がありません。

●帰路

往路は国道49号を主に阿賀野川沿いのコースをとって流域のさまざまな景観や資源等を見てきましたが、帰路はまとめとして磐越自動車道で上から観察することとしました。

国道459号鹿瀬大橋を南に渡り阿賀野川左岸へ。鹿瀬市街地をバイパスして麒麟山温泉へ。新潟県花・ユキツバキの原産地が麒麟山反対側の左手に見えます。トンネルを抜けると津川の市街地へ。現在も使われている雪よけのトンボは、雁木として知られた高田などよりも古く、17世紀初めに遡る日本最古だと言われています。津川には、往時を偲ばせる建物なども残っています。

バスは津川インターから磐越自動車道に入り一路西へ。車中からは揚川ダムなども見えます。阿賀野川サービスエリアを通過すると、今度は北に渡り阿賀野川の右岸のかなり高い場所を走ります。安田インターの先で三度阿賀野川を渡るころから周辺は広大な蒲原平野に。早出川を渡ると、磐越道は阿賀野川を離れて西へ。バスは新津インターで降りて、阿賀野川の左岸（ほぼ西）を北上するルートを探ります。

満願寺では小阿賀野川が分流。11キロ先の酒屋で信濃川に合流します。小阿賀野川は信濃川への運河。分流地点にはパナマ運河と同じ、水位の差を調整する閘門（こうもん）が聳えています。阿賀野川本流はこのすぐ下流に堰がありますから、船はすべてこの閘門から小阿賀野川に向かわなければなりません。小阿賀野川のすぐ北、沢海には、千三百町歩の大地主伊藤家の跡、北方文化博物館が。戦後改革で米軍に接収されようとしていた広大な屋敷を訪れた米士官ライト中尉が、たまたま伊藤家当主の文吉の留学先ペンシルバニア大学の先輩だったという話は奇跡のようなもの。農地改革と財産税で大地主や商家をはじめ、皇籍離脱者や旧貴族などの邸宅までもが失われようとしていた中、財団法人の博物館として残す道を開いたのは、この伊藤家の奇跡によります。藤の季節ばかりではなく、そんな歴史もこの阿賀野川に由来するのだ、ということを感じてほしいものです。

左岸堤防上の県道17号は信号もなく、大型車も行き交う眺望のよい道路。午前中の灰塚の向かい側、小杉集落にも、やはり堤防の補強資材などが置かれているのを通過しながら見ていきます。堤防の内側は畑や樹林地ですが、この先からは整備された河川公園に。日本海東北自動車道、JR白新線とくぐって泰平橋に戻ります。ここから県立大学までは直線で1.2キロあまり。しかし沿革的にはその先300メートルくらいまでは阿賀野川の旧河川敷内。JAのあ

る不思議な5差路は、阿賀野川の旧堤防が道路になったものと新しい道路との交差。地元では「土手」と呼んでいる、周りから一段高くなった道路がそれです。

第2回公開講座

新潟で水俣学を継承する

日時：平成24年10月27日（土）

会場：新潟県立大学 1313講義室

報告：丸山誠也（新潟県立大学国際地域学部4年）

渡邊千里（新潟県立大学国際地域学部3年）

河田翔太郎（新潟県立大学国際地域学部3年）

講演：後藤岩奈（新潟県立大学国際地域学部教授）

司会：小谷一明（新潟県立大学国際地域学部准教授）

司会 これより平成24年度新潟県立大学公開講座「阿賀野川流域から世界へ」、第2回「新潟で水俣学を継承する」の公開講座を始めさせていただきます。最初に学生発表者、特別講師を紹介させていただきます。

第1部では熊本県水俣市周辺における調査報告として、新潟県立大学国際地域学部の地域環境コースに所属する3名の学生より発表を行っていただきます。最初の発表者が4年生の丸山誠也さんです。丸山さんは現在、私のもとで水俣病をテーマとする卒業研究に取り組んでおりますが「接続—水俣病と新潟水俣病」という題目で発表をしていただきます。次の発表者が3年生の渡邊千里さんです。「水俣市周辺を歩く—記憶の風化をどのように防ぐのか」という題目で発表していただきます。第1部の最後に同じく3年生の河田翔太郎さんから「対岸の水俣病—御所浦の経験を学び直す」という題目で発表をしていただきます。

第2部では特別講演として、中国文学をご専門にしておられます本学教員、後藤岩奈先生に「新潟水俣病の患者さんのお話を聞いて」という題目でご講演していただきます。

それでは第1部を始めていききたいと思います。丸山誠也さん、お願いいたします。

<第1部> 水俣市周辺における調査の報告 接続—水俣病と新潟水俣病

丸山 私は「接続—水俣病と新潟水俣病」ということで発表をさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

それでは、私が新潟水俣病、水俣病の研究や勉強をしたいと思ったきっかけから話していこうと思

います。新潟県立大学の講義の中に、「環境科学概論」という授業がありました。そこで初めて新潟水俣病というものについて学び、そのあとに「新潟県の実然環境」という授業でも水俣病のことについて勉強し、さらに興味を深め、昨年夏、本学に立教大学関礼子教授に来ていただき集中講義をしてくださったときに「環境社会学」を受講し、さらに勉強していきたいな、ということで今は卒業研究のテーマとしても新潟水俣病を取り上げて日々勉強しているところです。ということで、熊本を先日訪問したことも含めて本日は発表していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、「今なぜ、水俣病なのか」ということですが、「最後の救済策」といわれる水俣病特別措置訴訟による申請期限が今年の7月に終了しました。しかし、申請できなかった潜在患者が多数存在しているというお話を聞きました。はたして水俣病問題をこれで終わらせていいのかどうかという疑問があり、これでいいのかな、というところから入っていききたいと思います。この写真は、エコパーク水俣から見た風景で、右側は未来に希望を願うモニュ



エコパーク水俣から臨む恋路島とモニュメント
(一部を除き写真は筆者撮影、以下同じ)

メントだそうです。

「水俣病を辿る」ということで、私たちは9月2日から5日まで水俣を訪問してきました。訪問した場所は、水俣病資料館と水俣病歴史考証館、国立水俣病総合研究センター、水俣市、鹿児島の一部、そして、御所浦という島に行ってまいりました。写真は国立水俣病総合研究センターの前で撮影しました。



国立水俣病総合研究センターにて

水俣病を考えるということで、水俣病の公式確認から12年もの月日が経ってから、政府は公害病と認めました。これは1968年の出来事です。この遅れがなければ、1965年に発生してしまった新潟水俣病を防ぐこともできたのではないのでしょうか。

次に、「伝わらなかった情報」ということで、国、県には一早く正確な情報を伝える責任がありました。しかし、被害者は水俣病が不治の病であることすら知らされずに近海の魚を食べ続けていたという事



水俣病歴史考証館にて説明を受ける

実を水俣病歴史考証館で説明してもらいました。この写真がその説明をしてもらっている際の風景です。

更に、「新潟と水俣の接続」ということで、これはお地藏様なのですが、上の写真左側の小さいお地藏さまですね。これが水俣の石を使って作られたお地藏様で阿賀野市の千唐仁という地域に置いてあります。その右側のお地藏様は虫地藏といって、ツツガムシの被害が抑えられるように祈念して置かれた地藏で、水俣の石で作られたお地藏様より前から置かれており、その隣に水俣の石で作られた地藏が置かれたそうです。そして下の写真が水俣市の百間港という地域にある阿賀の石を使って作られたお地藏様です。この二つのお地藏様はお互い方角的に向かい合っているそうです。



阿賀野川流域の千唐仁に置かれたお地藏様（「新潟県HP—新潟水俣病教師用指導資料集」<http://www.pref.niigata.lg.jp/seikatueisei/1270249212822.html>より引用）



水俣市百間港付近に置かれたお地藏様

次に水俣病と新潟水俣病の歴史を確認していきたいと思います。

1956年に熊本で水俣病が公式発見され、1959年に熊本大学研究班の「水俣病は魚介類摂取で発生する神経系疾患であり、汚染毒物は水銀に注目」という公式発表がありました。そして、1964年に新潟市の住民が原因不明の神経系疾患で入院。1965年に新潟水俣病発生の公式確認。1968年には政府が水俣病についての統一見解を発表しました。この統一見解ですが、新潟水俣病は、昭和電工鹿瀬工場のアセトアルデヒド製造工程中に副生されたメチル水銀化合物を含む排水が大きく関与して中毒発生の基盤となっているということと、熊本水俣病は、チッソ水俣工場のアセトアルデヒド・酢酸製造工程中で副生されたメチル水銀化合物が原因であるということが政府によって公式に発表されたものです。

1971年頃に、今回、河田君が発表してくれる、御所浦という離島でも水俣病に似た症状の病気があるということが分かってきたそうです。そして、1972年に阿賀野川の中上流域で初めての認定患者が現れました。そして、1978年に阿賀野川の水銀汚染の安全宣言。4月17日には阿賀野川の大型魚の食用規制を全面的に解除。このように時代が流れてきています。

そこで、「新潟水俣病とは」ということで、熊本で水俣病が公式発見されてから9年、新潟でも熊本と似た症状の患者が発見されました。初期段階では、患者の居住地はいずれも阿賀野川下流の沿岸に限定されていたそうです。この写真は、原因企業となった昭和電工鹿瀬工場で、撮影したのは公開講座第1回目のバスツアーのときです。



昭和電工鹿瀬工場

さて、「新潟水俣病の横顔」ということですが、新潟水俣病は、水俣病公式発表の10年後に発生しました。水俣病同様、差別問題によって多くの地域コミュニティの絆が奪われました。そこで、第1の差別、第2の差別という2つの側面があることについて少し説明していこうと思います。

第1の差別というのは、正しい情報がないことによって、奇病にかかったから発病した人や家には近寄らないほうがよいという偏見を生み出して、地域コミュニティが崩壊してしまうという問題です。この表ですが（パワーポイントで示す）、これは週刊誌などが特集した記事の一覧で、謎の病気が阿賀野川流域で発生しているということで、過激な報道や書き方をしているというものを、飯島伸子・船橋晴俊編『新潟水俣病問題—加害と被害の社会学』（東信堂、1999）にある関礼子氏の論文から一部抜粋させていただきます。例えば、「死をはこぶ阿賀野川“新潟の水俣病”のナゾと恐怖」や「水俣病の犯人を追って」、また、かなり過激な「犯された阿賀野川」なども目立ちます。

それに対して、第2の差別というものがあります。第1の差別は「奇病になる」という点で差別されるものだったのですが、第2の差別は地域から家族が差別されることを恐れて申請を行わなかった患者があとになって認定されて、「症状が軽いのに認定されて補償を受けている」と言われる差別です。これによって、患者は再び潜在化してしまいます。症状のひどい劇症型と症状はあるけれども、分かりにくい患者がいるということの理解が進まなかったことによって、この第2の差別が、生まれてしまったようです。「なまけもの、欲張り、金目当て、偽患者、水俣病なのになんであんなに元気なのか？」など、ひどい悪口を言われていた。「大きな農家なのにまだ金が欲しいのか。金は死んでは持っていられない」などというように、かなりひどいことを言われていることが分かります。こちら先ほどの文献から引用させていただいたものなのですが、周囲の理解が進まないために、第2の差別というものが起こってしまっています。

ここで、熊本訪問に話題を戻したいと思います。「私は新潟病と言いたい」というタイトルなのですが、新潟は水俣病の地名をもらって新潟水俣病という病名になっております。もしこれがなければ新潟病や阿賀病という名前になっていたかもしれませ

ん。この「私は新潟病と言いたい」というのは、熊本を訪問したときに農家の方に会って案内してもらっているときにふとポロッとその方が口に出した一言なのですが、もし新潟水俣病が新潟病だったとしたら、新潟と名前の付くものが売れなくなったりするような風評被害が、かつての熊本同様に起こり、そのことに拍車がかかってしまっていたかもしれないし、その情報だけが拡がっていったとしたら、差別なども起こっていたのではないかなというように感じます。

「水俣の地名をもらった新潟」ということで、水俣病発生当時、水俣出身というだけで差別され、結婚もできなければ、水俣の名で野菜は売れないという状況もあったと言います。つまり、新潟水俣病の被害が発生した地域に当たるような病名であれば、その住民というだけで差別が起こっていたかもしれないということを感じています。この写真は特に関係ないのですが、水俣市の中心にある、ショッピングセンターのM's CITY、エムズというのは多分MINAMATAの頭文字のMのことだと思うのですが、水俣市の中心にドンとありました。



M's CITY

そして、ここからは、『地元学をはじめよう』という文献をもとに、水俣病や新潟水俣病について考えていきたいと思えます。こちらは、吉本哲郎さんという方が書かれた書籍です。そちら（会場最前列の机上）にも、水俣病についての関連書籍、資料などがたくさん置いてあるのですが、講座が終わりましたら、目を通していただければ幸いです。

それでその内容なのですが、水俣市は2004年、

2005年と、日本の環境首都コンテストで総合1位という成績を残しています。しかし、以前の水俣の地域社会は先程も言ったように水俣病の差別などで困難の極みにありました。

「ないものねだりよりも、あるもの探しを」ということで、水俣市は水俣病の犠牲を無駄にしないよう、環境都市「水俣」を住民協働で作り上げることで、再び立ち上がりました。市民は、胸を張って「私は水俣出身だ」と言えるようになったと言います。これは、市民が行政と一体となって、ないものをねだるのではなく、今そこにあるものを自らが探し、磨いた結果であると言えるのではないのでしょうか。

さて、「地元学を通して見つけた宝物」ということで、水俣市で地域住民が地元を調べていた中で、和ろうそくの原料となるハゼの生産量が日本国内における30%を占めていることが分かり、和ろうそく作りが始まったそうです。ところで、ハゼってなんだったという方もいるかもしれないので、そのハゼについての説明をしていきたいと思えます。ハゼの木から取れるハゼろうは、和ろうそくの原料となります。どうしてこの水俣にハゼの木がたくさん植えられているのかというと、水俣は温暖湿潤で水はけの良い土壌を持っていて、根腐れせず、ハゼの木栽培に適しているそうです。江戸時代からこの月浦地区はお殿様の直轄地としてハゼの木が栽培されていたそうです。ハゼの和ろうそくというものはとても高級品だったらしく、一般の市民は使わなかったそうです。一般の市民は菜種油みたいなものに、火をつけて明かりにしていたそうです。つまり一般の市民の生活必需品だったわけではないそうなのですが、この周辺がお殿様の直轄地域だったからこそ、ハゼ



樹齢300年を超える大ハゼの木

の木が切られずにたくさん残ってきたそうです。

このような地元にあるものを探して、見つけて、磨いていくというプロセス。これが、地元学の考え方だそうです。「実践を通して進化」ということで、まずプロセスが、行政主導型から、住民参加、そして協働、行政参加、住民自治を基本とする住民主体の取組というふうに矢印で結んであります。行政主導型というのは、このあと紹介する村丸ごと生活博物館というものがあるのですが、そのことに関連して自治的組織、「寄ろ会水俣」というものが設立されたそうです。それで、その行政主導というのは、行政が「自分たちで足元の環境を調べよう」と呼びかけることから始まり、住民参加というところで昔遊んだ思い出の川や海、山のことを話し合い、「今どうなっているのか、どうしたらいいのか」ということを語り合ったそうです。そして、次に協働ですね。ここでは、足元にあるものを探し、ものづくりや生活づくりに役立てていくために、地域資源マップづくりを呼びかけるというもののなのですが、具体的環境として水に着目し、飲んだり使ったりしている水がどこから来て、どこに行っているのかということ調べたそうです。そして、行政参加ということで、水俣病患者の話を聞く、水俣市民の講座の開催であったり、市民の理解促進のために、対話集会を行ったりというものです。行政が参加してそのような講座をすることで、もっとその地域にある問題を知ってもらおうというような活動です。そして、最終的に住民自治を基本とする住民主体の取組ということで、もう行政が何もしなくても、自分たちだけで、「もうやっていけるよ」というところまで持っていくということです。調べた人しか詳しくならないというのは、どんなことを勉強していてもそうだと思うのですが、やはりその研究者や学者さんが外からきて調べただけでは問題は解決できないですね。その人たちが詳しくなるだけで、そこに住んでいる人たちは何も変わりません。だから自分で調べて気付きも共有することが重要だそうです。

さて、「モデルケースとして」ということで「村丸ごと生活博物館」。これは、村が1つの博物館として外から来た観光客の人たちにその村の良いものやことを知ってもらおうというような取り組みなのですが、村巡りでは、生活学芸員が集落を案内して、昔ながらの知恵や技について実際の農村を歩きながら経験します。食巡りでは、食材から料理まで作

る、食の生活職人がおもてなしします。技巡りでは、竹細工や、村遊びの中で長く養われてきた技術を習得します。ということで、ここに出てきた生活学芸員や生活職人というものがあって、生活学芸員というのは、本当に普通のその村に住んでいる住民です。ただ、水俣市の頭石地区というところの生活学芸員は、村に住む人々が自分たちの住む村の良いものを発見、磨き上げ、外から来た人たちに自分たちの暮らしを案内しますが、生活学芸員になるための資格は「ここには何もない」と言わないことだそうです。この取り組みなのですが、親戚しか来なかった村が、なんと1,600人もの観光客を呼べるまでになったそうです。料金ですが、5人までであれば5,000円で、その村の食材を使って食べ物を食べさせてあげたり、村の案内をしたり、そのようなことを行っているそうです。

次に、「再生の四原則—もやい直しの考え方」ということですが、もやい直しというのは、水俣によって壊れてしまった人々の絆を回復しようと始まった動きで、もやいとは、船の元綱をしっかりと結び合って、それを共用してことに当たることを示唆する言葉です。その4つのプロセスは、1つ目が人それぞれの違いを認め合う。そして2つ目は人と人との距離を近づける。3つ目は話し合う。4つ目は対立のエネルギーを創造するエネルギーに変換する、ということです。

そして、水俣に生きる希望を作った地元学はということで、ボールを前に投げるためにはいったん後ろに振りかぶって投げます。前を未来に後ろを過去と見ると、人は夢を描き希望の持てる未来のために過去を振り返ります。水俣という地域で起きてしまった水俣病事件に目をそむけず、未来に夢を描いて共有し、環境都市水俣を作ることが水俣の取る道だったのです。これが『地元学をはじめよう』の9ページに書いてありました。本当に自分もその言葉に共感しました。新潟水俣病というものを、忘れないためにということで、新潟でも「環境と人間のふれあい館」の建設や書籍の発行などの取り組みが行われてきたということを勉強したんですけれども、水俣では、過去の悲しい出来事に目をそむけずに、環境で1番になろうというところから、本当に世界に誇れる環境都市を作り上げることに成功しています。つまり、先程話した地元学をもっと活かして、さまざまな取り組みをしていければ良いのではない

かな、というふうに考えました。私の発表はここまですが、残りの2人がさらに詳しく水俣や御所浦を訪問したことについて、そして、水俣病について考えていきますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。では、続きまして地域環境コース3年の渡邊千里さんの発表に移りたいと思います。今ほど丸山さんからは「接続」というキーワードを用いて発表していただきましたが、渡邊さんからは「記憶」というキーワードを用いて発表していただきます。

水俣市周辺を歩く—記憶の風化をどのように防ぐのか

渡邊 私はこの9月に行われた4日間の水俣病現地調査に参加させてもらいました。

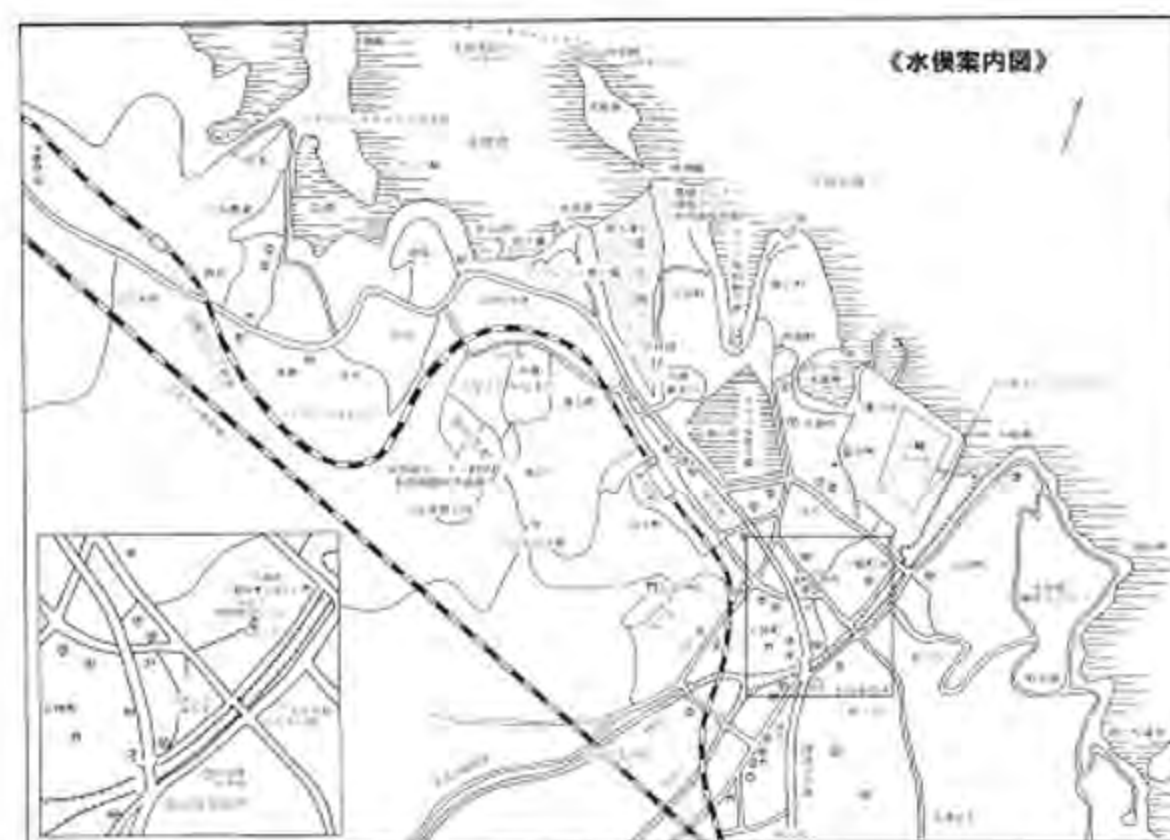
私がこの水俣病に興味を持ち始めたきっかけは、小中学校の総合教育の時間に水俣病と新潟水俣病についてのお話を聞いたことです。そこから、環境と人の健康の関係に興味を持ち、大学で詳しく学びたいと思い現在の地域環境コースに入りました。そして、2年の秋に小谷先生と映画館で佐藤真監督の映画『阿賀に生きる』を初めて観て、感銘を受けました。DVDで何度もこの映画を観ていくうちに、自分がこの大学に来るきっかけになったとも言える水俣病と新潟水俣病についてもっと知る必要があると感じ、この調査に参加させてもらいました。

私の発表のテーマは「水俣市周辺を歩く—記憶の風化をどのように防ぐのか」です。どんな大きな問題にも関心の強弱があります。そのなかで、人々の関心をつなぎ続けるというのはとても難しいことだと思います。水俣市では水俣病の記憶を次の世代に継承するため、記憶の風化を防ぐためにどのような試みを行っているのか。実際に私たちが訪れた水俣市の写真とともに紹介したいと思います。

まず、私たちは水俣駅に到着しました。駅を出てすぐに見えてきたのが、「チッソ」（ここでは社名をこの呼称で統一する）水俣工場の正門です。水俣病の原因となったメチル水銀を含む排水を流し続けたチッソの工場は今でも稼働しています。私は水俣市に来るまでこのことを知らなかったのですが、この工場は現在テレビなどの液晶部門で活躍しており、世界の3分の1のシェアを誇っています。

この工場は1908年からこの場所にあったのですが、その約20年後の1927年に水俣駅が工場の真向かいにつくられたそうです。当時各地から汽車に乗って工場に働きにくる人々がそれだけ多かったこと、水俣市が工場の城下町であったことが、駅と工場の位置関係からわかりました。

次に水俣市の地図で汚染の経路を説明します。



水俣芦北公害研究サークル編『水俣病・授業実践のために』（学習材・資料編、2007）より

先ほど説明した水俣駅の真正面にあるのが、チッソの水俣工場です。そのすぐ隣にあるのが、水俣病の原因物質であるメチル水銀を含む工場排水を1932年から1968年まで流し続けた百間排水口です。ここから排水が流されて、それにより汚染された魚は潮の流れにのって月浦、湯堂、茂道という3つの地域にたどりつきました。魚が汚染されていることを知らずに魚を獲って暮らしていたこの地域の人々は、劇症型の水俣病になりました。汚染された水俣湾は、現在では埋め立てられています。

ここにあるのが八幡プールです。水俣病が初めて公式確認された1956年の2年後の1958年、百間港付近の汚染を止めるための方策として、チッソは排水を水俣川の河口から流して不知火海で「希釈」することにしました。ここはその排水を一時的にためる場所として使われました。しかし、チッソの思い通りにはいかず、汚染はここから不知火海全域に拡がることになりました。

チッソが32年間にわたって排水を流し続けた、水俣病の原点と言われる百間排水口に話を戻しますが、この排水口の脇に立っている案内板には、排出された水銀の量が70～150トン以上であったと書か

れています。当時は、水面が排水で七色に輝いていたそうです。そしてこれが、私たちが見た、現在の百間排水口です。



百間排水口（写真は筆者撮影以下同じ）

現在の水は七色に光ることもなく、とてもきれいでした。もちろん工場から水銀を含む排水は流されていません。今は工場排水よりも家庭から出る生活排水が水路を汚しているとの説明が案内板にありました。先ほどの丸山さんの発表で出てきた阿賀のお地蔵さんは、この案内板のすぐ隣に座っています。

この百間排水口から排水が流されたことによって、水俣病の多発地帯となったのが月浦、湯堂、茂道の3つの地域です。月浦は1956年に第一患者が発見された場所で、湯堂では胎児性の患者さんが多く発見されました。そして茂道ですが、2007年の段階で一番認定患者の多い地域になっています。

この3つの地域にはとにかく船がたくさんあって、今でも漁業と地域住民の密接な結びつきがある



茂道の漁師たち

ことがわかりました。写真のように船から降りてきた漁師さんたちが、夕暮れの時間を並んで座って、おしゃべりして過ごしていたのがとても楽しそうで印象的でした。

夕方になり、私たちは鹿児島県まで足をのばし、出水市の米ノ津という場所を訪れました。ここには水力発電所があり、もともとチッソはここに工場を建てようとしていました。しかし、水俣市の熱烈な誘致によって工場が水俣にできることになったそうです。工場は水俣にできたのですが、米ノ津でも水俣病患者が発見されます。これを機に水俣病は、水俣市だけの病気ではないということを人々が知るようになりました。

以上が水俣病をたどって私たちが一日目に訪れたところです。排水口や工場、そして人々の暮らす地域は今も変わらず存在し続けています。しかし変わってしまった場所もありました。それがここ、エコパーク水俣です。



エコパーク水俣

汚染のひどかった水俣湾を埋め立てて造られた公園です。ここは、水銀を含むヘドロや汚染された魚をドラム缶に詰め込んで埋め立てられたため、魚の墓場とも言われています。このエコパーク内には様々なモニュメントがありました。

例えば、ここには「水俣病慰霊の碑」と「魂石」と呼ばれるものがあります。慰霊の碑は、水俣病の認定患者さんたちの一部の名簿が刻まれています。一方、その周辺に散らばるように置かれている魂石は、水俣病の患者さんや水俣病で家族を亡くされた方たちの手によって作ら

れた石仏です。これは全部で50体あるのですが、すべてが不知火海を見つめるようにして置かれています。国が建てた石碑には患者さんたちにたいする謝罪の念が込められているのにたいし、市民が作った石仏には不知火海にたいする汚染への謝罪の意味も込められている印象を受けました。



不知火海を見つめる魂石

この2つのモニュメントも同じ公園内にあるもので（パワーポイントで示す）、左が飛龍、右が母なる星です。母なる星は地球の形をしています。水俣病が新潟やカナダ、北欧などでも見つかったことから、地球規模での環境意識を生み出すことの重要性を訴えていることがわかります。そしてこれがエコパーク内で一番大きいモニュメント、水俣メモリアルです。これはイタリア人のジュセッペ・パローネ氏が設計したもので、この無数にある銀の玉が患者さんたちの命のようでもあり、不知火海の漁火のようでもあり、水銀の滴が海に滴り落ちていく様子に



水俣メモリアル

も見えます。

先ほどの2つのモニュメントとこの水俣メモリアルは、すべて国がつくったものです。この3つに共通するのは、水俣病がこの土地、水俣だけでの問題ではないというメッセージだと思います。このように、エコパークのなかには記憶を伝える試みとして市民の作った石仏や国が造ったモニュメントがあり、そこには市民と公的機関の見つめる先の違いが見受けられたように感じました。

この違いはモニュメントだけではなく、他の面からもわかることがあります。ここは埋め立て地内にある水俣病資料館と水俣病情報センターです（パワーポイントで示す）。県と国の情報、そして記憶を伝承していくための場所としてつくられました。水俣病資料館には語り部制度というものがあり、前もって予約をすれば、患者および患者家族の方からお話を直接聞くこともできます。次の施設が環境省管轄の国立水俣病総合研究センター（以下、国水研）です。ここでは水俣病を社会科学や自然科学、臨床学や疫学など様々な分野で研究しており、記録を継承する場所となっています。わたしたちは社会科学室長の蜂谷先生に2時間ほど講義をしてもらいました。ここでは、水俣病患者の診断に使われた毛髪の水銀値の測定もしてもらいました。

国水研は主に記録を保存、継承するための施設でしたが、記憶を継承するための施設として水俣病歴史考証館があります。

水俣病センター相思社という市民団体が中心となって管理運営を行っていますが、元は胎児性の水



水俣病歴史考証館

俣病患者さんたちが働くためのキノコ工場であったと、現地で手に入れた資料に記されていました。この考証館には水俣病資料館とは違い、抗議運動で使われたゼッケンや、水俣病の原因である物質を探すために猫を使って実験した際の檻などが展示してありました。このような展示や資料収集を、患者さんや市民の方々、県外の活動家の人たちが今でも関わって続けているそうです。

「水俣病歴史考証館」という名前は、水俣病患者の患者連盟の委員長で、水俣市議会議員でもあった川本輝夫氏がつけました。どうして資料館や博物館という名前ではないのか。職員の説明によれば「博物館や資料館と名づけるということは、水俣病を終わったこと、過去のことにしてしまう。水俣病を終わらせるのではなく、この先もずっと考えて証明していく場所をつくる」という思いを込めて、「歴史考証館」と名づけたそうです。先ほどの市立の水俣病資料館もこの市民が作った水俣病歴史考証館も、同じ水俣病の記憶を継承するための場所ですが、運営する母体の違いによって展示方法が違うことを知り驚きました。

この違いを乗り越える試みの場が、歴史考証館の近くにある「もやい直しセンター」です。「もやい直し」という言葉は、人々のバラバラになってしまった絆をつなぎあわせる、気持ちをつなぎ直すという意味で、水俣再生の合言葉として使われています。もやい直しの一環として行われているワークショップやイベント、学習会などによって、今まで対立していた行政や市民、患者さんなどが顔をあわせて話し合う機会が増えているそうです。

また、もやい直しというのは人々の間だけではなく、人と環境との間でも行われています。今、水俣市は人と環境のもやい直しとして、エコにこだわったまちづくりを行っています。その結果、環境首都の賞を獲得したり、環境モデル都市の認定を受けることになりました。もやい直しセンター周辺のエコタウンでは、環境共生のモデル型住宅の建設が進んでいます。太陽光発電システムの導入推進といった事業を展開しているそうです。環境を破壊された町だからこそ、環境の再生が地域の立てなおしに直結することになります。

以上が、私たちが水俣周辺を歩いて見てきたものです。水俣市内ではこのように国や県、市、そして患者さん、市民の方々や活動家など、さまざまな団

体や人々が水俣病という記憶を継承していくための試みを行っていることがわかりました。記憶を継承するための形態や方法にはいろいろなものがありましたが、すべてに共通するのは「水俣病を繰り返さないために記憶、記録を風化させずに残そう」という想いです。そのためにも壊れてしまった人々の関係をもう一度つなぎあわせるため、もやい直しというキーワードを活用し、地域が新しく動き始めていることがわかりました。

現在、水俣市が水俣病を教訓に環境にこだわったまちづくりを行っているように、同じ水俣病の発生した新潟も、もっと環境に力を入れてもよい気がしました。また、水俣病歴史考証館に行って強く感じたのは、やはり新潟水俣病を終わらせてはいけないということです。そのために新潟で暮らす私たちにできることは、新潟水俣病について積極的に学び、考え続けていくことだと思いました。

以上で私の発表を終わりたいと思います。ご静聴、ありがとうございました。

司会 渡邊さんからは、「記憶」における水俣市の取り組みを紹介していただきました。では、続きまして河田翔太郎さんから、水俣市の対岸にある天草市の御所浦町、水俣市の対岸にある島への旅をとおして考えることになった「経験」について発表していただきます。

対岸の水俣病—御所浦の経験を学び直す

河田 まず私が水俣病に関心を持ったきっかけをお話しさせていただきます。私は昨年に行いました、東日本大震災とそれに伴う原発事故が話題になったことで、環境や社会と科学技術との関係に興味を持ち、原発の問題と比べて語られることが多い水俣病にも興味を持つようになりました。そのような経緯で、今後さらに水俣病について詳しく学びたいと思い、今回の水俣病現地調査に参加させていただきました。

私は、「対岸の水俣病—御所浦の経験を学び直す」というテーマで、不知火海に浮かぶ御所浦という小さな島においてどのように水俣病が拡大したのか。またその経験を活かしていくにはどうすべきか、という観点から調査いたしましたので、その結果を発表したいと思います。

御所浦という島は、水俣市の対岸に位置しており、多くの方々が水俣病の被害に遭いました。しかし、事件発覚から15年もの間、この被害について語られることがなく、その間被害は拡大し続けました。その経験を改めて見直すことで水俣病を学び直していきたいと思います。

ここでまず御所浦という島の位置を簡単に説明していきたいと思います。この左上の地図ですが（パワーポイントで示す）、赤い丸で囲ってあるところが御所浦という島です。御所浦は不知火海を挟んで水俣市の15km北西に位置する、御所浦群島の本島です。現在は天草市の一部となっています。昔から島の経済を支えてきたのは漁業で、この地域では米がほとんど取れないため、その代わりに魚を主食とするような生活が行われてきました。

次に、御所浦の現在の様子を紹介したいと思います。初めに町の様子です。御所浦では急な斜面に家々が立ち並び、その間を縫うように狭い路地が張り巡らされています。現在は閉館していますが、町民による手作りの小さな映画館もありました。次の写真がその映画館です。



手づくりの映画館（写真は筆者撮影、以下同じ）

御所浦では、現在オリーブの栽培に力を入れています。御所浦では九州電力の工事の下請けの仕事が経済的に大きな支えでしたが、その工事がほとんど終わってしまったため、新たな事業として九州電力によってこの栽培があっせんされました。しかし、オリーブの栽培は難しく、100年単位の長期的な計画で行われております。また、以前は多く見られたものの現在は衰退してしまった段々畑の跡地に公園を建設するための整備が進められており、オリーブ

などを植樹して公園にする計画があります。

次に、水俣市と御所浦の関係を見てみます。御所浦には「御所浦町水道20周年記念感謝の碑」というものが建てられています。御所浦で盛んな甘夏みかんの栽培に使われる農薬によって、井戸の水が汚染され、そのことが原因で御所浦の人々は長い間喝水問題に悩まされていました。しかし、水俣市から海底の水道管を引くことによって、その問題は解決にいたりしました。

また、次の写真ですが、これは、水俣湾公害防止事業における水俣湾の埋め立ての際に、ヘドロを詰めたドラム缶の上からかぶせる土に御所浦の土が使われて、そのときの傷跡が今でも残っているという写真です。ここに薄く線が引いてあるんですが、この下側が全て削り取られた跡になっています。



削られた山肌（線は筆者がほどこした）

では、御所浦における具体的な水俣病の被害を見ていきます。まず水俣病被害が見られた主な地域の認定患者数を見ていただきたいと思います。水俣市で1,012人、津奈木町で353人、芦北町で346人、鹿児島県の出水市で397人の患者が認定されています。御所浦においては現在までに、2,000人近くの方が申請しましたが、そのうち認定されたのは54人となっています。これは、水俣病対策が遅れたために多くの人が、認定基準が厳しくなってから申請をしたことが原因で認定率が低くなっています。

次に御所浦における水俣病被害の始まりです。御所浦においては、昭和25年には既に一部の猫の狂い死にが確認されています。その後、昭和32年に猫やカラスなどの集団発狂が見られました。その後の昭和34年には、御所浦の沖合で海面に太刀魚などの魚

が大量に浮上しました。これらの魚の中にはまだ生きていたものも多く、水銀が含まれているとは知らない漁師たちはこの魚も食べていたそうです。このようなことから、御所浦においては早くから水俣病の症状を示す人々がいたと考えられますが、昭和46年に熊本大学医学部の第2研究班によって正式に水俣病患者が確認されるまで、御所浦には水俣病患者はいないというふうに伝えられていました。

では、なぜ御所浦で水俣病被害が拡大したのかということを見ていきます。その原因は大きく3つに分けることができます。1点目は、食生活の中心が魚介類であり、とにかく大量の魚を食べていたということです。朝、昼、晩の3食、どんぶりに山盛りの魚を食べていました。そのような生活の中でたとえ低濃度であっても、徐々に水銀が蓄積していきました。また、貧しい漁師たちは汚染された魚介類に危機感を抱きつつも、生きるためには魚を食べるしかない、という状況にありました。2点目は、離島であるがゆえに、テレビや新聞などのメディアが普及しておらず、水俣病に関する情報は噂としてしか伝わらなかったということです。3点目は、役場や漁業組合が水俣病を隠そうとしていたことです。御所浦の経済は漁業で支えられていたため、風評によって魚が売れなくなることを恐れた役場や漁業組合が、御所浦には水俣病患者はいないということにしていました。役場がようやく申請を手伝うようになったのは1990年代の終わりに近づいてからです。

御所浦における水俣病被害の特徴は、低濃度の汚染魚を大量に摂り入れることで長い時間をかけて水俣病の症状が現れるということでした。御所浦に住んでいた2人の女性の異常に高い毛髪水銀値がそのことを示しています。熊本県衛生研究所が昭和35年から37年の間に実施した、「水俣病に関する毛髪中の水銀量の調査」によりますと、御所浦の嵐口という地域に住んでいた大原シヅさんは600ppm、牧ノ島の樫ノ木に住んでいた松崎ナスさんは世界一の高濃度920ppmで、これは平均値なんです。先端では1,850ppmも記録したそうです。この毛髪水銀濃度の見方ですが、右下の表にあるように（パワーポイントで示す）、男性の平均レベルが5.2ppm、女性の平均レベルが1.6ppmで、安全レベルの目安が5となっていますので、これと比べると920ppmと600ppmというのが、いかに高いかというのがわかりいただけると思います。この調査は、潜在患者

発見の手がかりになるはずでしたが、行政も医師も本人に結果さえ知らせずに黙殺しました。そのため、ほぼ間違いなく水俣病であったと考えられるナスさんも、死亡届の死因は「老衰」となっており、どの医師が診たかの記載もありませんでした。

次に御所浦における救済運動です。1974年に水俣病患者の間で「水俣病認定申請患者協議会」というものが結成されました。これは現在の「水俣病患者連合」です。しかし、その御所浦支部ができたのは、4年後の1978年です。その後も、これまでに見てきたように御所浦では早くから水俣病患者の発生の兆候が見られていたにも関わらず、水俣市で水俣病が公式確認されて話題になってから15年近く表沙汰にはなりません。御所浦では水俣病に関する情報が噂としてしか伝わってこなかったもので、正しく理解されず、水俣病患者に対する偏見が根強く残っていました。そして、それが水俣病であると言い出せない空気を作り出していました。また熊本大学の医師や学生は、申請を求める手紙を送ったり、実施検診のために御所浦を訪れたりしましたが、役場の対応は前述した通りの冷ややかなものであり、患者も水俣病だと配偶者が見つからないといった理由から申請に積極的ではありませんでした。

さらに被害者間にも派閥やグループがあり、異なる集団の集会には参加してはいけないという状況が存在していました。このようにして、主に差別、偏見などが原因で、御所浦における救済運動、住民同士の連携はなかなかつくれませんでした。

最後にこれまで見てきた御所浦の経験を活かすために、私が重要だと考えた2つの課題を挙げ、この発表のまとめとしたいと思います。

1点目は、「どのようにして遠隔地に適切な情報を伝えるか」ということです。御所浦の役場や漁業組合では、風評によって魚が売れなくなることを懸念した結果、水俣病患者を隠すという判断をしましたが、そのようにして住民に適切な情報が伝えられなかったことが被害の拡大という結果につながりました。いかにして風評から生活を守りながら、被害の拡大を防ぐのか。その二つが両立できるのか、というのが難しい課題だと思います。2点目は「コミュニティ内での連携はどうあるべきか」という点です。御所浦のような狭いコミュニティの中で利害の対立による分裂を防ぎ、人々の連携を深めるためにはどうするべきか。この点を考えてみる必要があ

ると思います。

今回の発表のために、これらの文献を参考にしました（パワーポイントで示す）。また、御所浦の島民の荒木さんという方に御所浦町誌、町だよりなどの資料を見せていただき、詳しくお話も聞かせていただきました。



御所浦町誌・町だより

現在の御所浦の環境は改善されて猫がくつろいでいる様子が多く見受けられました。以上で私の発表を終わります。ありがとうございました。

＜第2部＞ 新潟水俣病の患者さんのお話を聞いて

司会 ではこれより第2部といたしまして、本学教員で中国文学をご専門にしておられます後藤岩奈教授よりご講演いただきます。後藤先生は長崎でお生まれになり、そのあと福岡へ移住なされました。そして1969～1978年までの9年間、5～14歳までの間、熊本で暮らしております。その時より不知火海で発生した水俣病に関心を抱き、本学の前身校である県立新潟女子短期大学に教員として赴任された1997年以降は、新潟水俣病への関心を深めてこられました。今回は、水俣病に関わる個人的な体験等を交えながら、水俣病の患者さん、そして患者さんを支えた人々の活動について、お考えになってきたことを「新潟水俣病の患者さんのお話を聞いて」という題目でご講演いただきます。では、後藤先生、よろしく願いいたします。

後藤 只今ご紹介にあずかりました新潟県立大学の教員、後藤岩奈と申します。ご紹介にもありました

とおり、私の専門は中国関係で、中国語の教育と中国の近現代文学を専門としております。なので、新潟水俣病の問題とは直接関係ないことを専門分野にしております。「水俣病の専門家でもない者が、なんで新潟水俣病の話をするのか」と言われてしまいそうですけども。今回の公開講座でお手伝いさせていただくことになり、司会をされている小谷先生の方から「話をしてはどうか」ということになりました次第です。今回の講座でお話をするにあたって、まず、どうして専門家でもない私が、新潟水俣病に関わろうと思ったのか、自己紹介ではありませんが、自分自身の経歴と併せて述べさせていただきます。

なぜ新潟水俣病の問題を知ってゆこうと思ったのか

私は1963（昭和38）年九州の長崎で生まれました。その直後、国家公務員をしていた父の仕事の関係で福岡に移り、69年、5歳のとき熊本に引っ越ししました。父親が九州各地の農業試験場に転勤したためです。熊本には69～77年までの9年間、5～14歳まで、幼稚園から中学2年までいました。熊本市の北部に隣接する菊池郡西合志町というところで、現在は合志市になっています。熊本南部の海沿いの町水俣には行ったことはなく、当時水俣には直接関わりはありませんでした。しかし70年代初め、水俣病の患者さんの裁判が行われており、テレビのニュースでよく報道されていました。またNHK熊本放送局製作の水俣病関係のドキュメンタリー番組がテレビで放送されていました。中学生のとき、学校の文化祭で土本典昭監督の記録映画「水俣病—その20年」の上映会がありました。これは先生方が企画したもので、体育館で見ましたが、内容はよく覚えていません。

水俣病とは直接関係ないですが、私の自宅から割と近いところに、ハンセン病（以前はライ病と言っていました）の療養施設「恵楓園」がありました。小中学生のころ、よくケーフエン、ケーフエンとか言って、広い敷地内に入ったりしていました。奥の入口にはマイクが内装された小さな棒のようなものが立っていて、オルゴールのような悲しげな音楽を流していました。目の見えない方を誘導する施設のポールだったようです。

また西日本は、いわゆる被差別部落（その中で特

に行政が認定した地区を「同和地区」と言います)が多いですが、私のいた熊本の小学校中学校でも、いわゆる「同和教育」が行われていました。「封建時代」をフウケンではなくてホウケンと読むんだということを知ったぐらいでしたけれども。当時は全く意識していなかったのですが、今にして考えると、小中学時代に人権問題のようなものに触れることが多い環境であったのかもしれません。

これはあまり思い出したくない思い出なんです。が、中学生の頃、友達1人が「あん人たち、こがんだろ? (あの人たち、こうだろう?)」と言って、ふざけて水俣病の劇症型(激しく痙攣する)の患者さんの真似をしてみせました。私は内心「それはいけないことだ」と思いましたが、その場に合せて笑ってしまいました。あるいは、いけないと言われていることを平気でやるところを笑ったのかもしれませんが。そうしたら、それを見ていた別の友人が、「そういうことをしてはいけないよ」とはっきりと言いました。私も内心「いけないことだ」と思っていたのに、笑ってしまった。この頃の水俣病の記憶を辿ると、いつもこのことが思い出されて、今も心に引っかかっています。

中学3年になると埼玉に引っ越し、高校時代は埼玉で過ごしました。その後1年浪人して大学は再び九州に戻りまして、公立の北九州大学(現在の北九州市立大学)に入学して中国語を専攻しました。大学の授業やサークルで中国語や中国の近現代史、あるいは社会事情を学んで、同時代の中国社会、同時代の人々の生活とか生き方を知りたいと思っていました。私は数学が苦手な社会科学はダメでしたので、文学作品を通して見てゆきたいと考えました。そして中国の近現代における欧米や日本との関係、国内の政治状況の厳しさ、社会状況の厳しさなどを知り、その中でのさまざまな社会問題、人々の生活ぶりや生き様を見ていきたいと考え、3年次のゼミ選択、および大学院進学では、中国近現代文学をやることにしました。

北九州市内には、西日本最大の同和地区があります。学生自治会も「差別について考えよう」を政策の一つに掲げて、行事をいろいろと企画していました。また教員免許取得を希望すると、教職関係の授業では「同和问题論」「同和教育論」が必修でした。ちなみにその講義を担当されたのは林力先生^{はやしちから}という方だったんですけども、今から10年前ぐらいです

が、新潟に講演に来られたこともあります。

さらに北九州という土地柄、近所にも在日韓国、朝鮮の人もしました。またクラスには愛知県出身の在日3世の学生がいました。学生時代もっとも親しかった友人の1人です。彼が自治会にかかわっていたこともあり、よく一緒に酒を飲んで、いろんな問題について話をしたりしていました。

また学内には成田空港反対闘争をやっている学生運動の活動家たちがいて、彼らの勧誘を受けることもありました。「学生は、支配する側に立ってはいけない。学生は、抑圧される側に立たなければならない」とか言われました。まあ、複雑な構造の社会では、どれが支配する側で、どれが抑圧される側なのか、簡単には言えないし、そのように言っていた活動家たちがどれだけ抑圧される側に立てていたかどうかは分かりませんが、そのような言葉が印象に残っています。

思えば、国家公務員の家庭で、特に不自由とか苦勞を経験せず20年余りを過ごしてきて、生きてゆく上で、何か本気になるとか、必死になる、一生懸命になることに欠けたところがあった自分ですが、それでサークルの運営や人間関係がうまくいかなることもありました。自分自身が一生懸命生きていないと、必死に生きている人の気持ち、あるいはそれが不当に妨げられたときの怒りが分かりにくくなるのかもしれません。学生時代には、自分に欠けていたものに気づかされることもありました。

大学生の当時は意識していなかったけれど、今にして思えば、小中学校の頃と同様に、人権問題と言えるかどうか分かりませんが、いろいろ考えさせる機会があったのかもしれません。大学時代のこのような経験から、ちょっと古い表現(30年ほど前の表現)を使うならば、「被抑圧民衆の解放を求める運動に連帯する」とでも言いましょうか、今風な言い方をすれば、「社会的に弱い立場の人たちが一生懸命になって生きている、その姿を知って、それに触れて、そこからいろいろなことを学んでいけたら」というような考えを持つようになり、できるだけいろいろな場に参加して、いろいろな人に触れて、共有するものを持てたらよいな、と考えておりました。

その後、平成の時代になり、1990~93年まで、3年間中国に留学し、1993年の秋から97年の春までの3年半、福岡、山口の大学で中国語の非常勤講師を

していました。ちょうどその頃、母校の大学の中国研究サークルの部室に顔を出すと、後輩となる部員に水俣高校出身の女子学生がいました。「(水俣は)今はなんともないんでしょう?」と聞くと、彼女は一瞬真顔になって、「はい」と答えたのを覚えています。

1997年4月に県立新潟女子短期大学に赴任しました。ある日、図書館で「新潟日報」を読んでいたら、安田町の中学生が新潟水俣病について調査して、学校の文化祭で発表展示を行ったという記事を読みました。新潟に来てから水俣病のことは全く意識していませんでしたが、中学生のときに地理の授業で習った四大公害の一つがここ新潟で、阿賀野川だったのだと初めて意識しました。そしてそれが先ほど述べたような、これまで考えてきたことと結びついて、「新潟水俣病共闘会議」主催の現地調査に参加しようと思い、1999年、2000年、2009年、2010年の現地調査に参加してみました。さらに、県内で開かれる水俣病関係の催し物には極力出るようにして、できるだけ患者さんに触れてお話を伺うようにするようになっています。

短大時代に、教え子の学生、ゼミ生なんですけども、「おばあちゃんが水俣病の患者です」という学生が2人いました。その1人の学生は、「おばあちゃんがインタビューを受けて、本になった」と言っていました。その「おばあちゃん」は名前を公表されていますが、新潟水俣病第1次訴訟のときの原告団をやられていた方の御家族ということです。

新潟水俣病の患者さんのお話

これまで講演会、現地調査等でお話をうかがった患者さんより、5名の方を取り上げて、お話の内容と印象に残ったことなどをお話しします。実名を公表されている方は実名を挙げさせていただきますが、それ以外の方は匿名とさせていただきます。

お1人目は権瓶晴雄さん。

権瓶さんは「新潟県立環境と人間のふれ合い館」の語り部をされており、今日のお話は2008年2月16日の講演の内容です。この講演ではコーディネーターとして「安田患者の会」事務局の旗野秀人さんが対談されておりました。

権瓶さんは、1930(昭和5)年のお生まれ。現在の阿賀野市、旧安田町の小松という所の御出身で

す。実家のすぐ前が阿賀野川で、子どものころから水遊びをしていた。お父様が国鉄の職員をされていたそうで、退職して漁業権を取得して、船を買って魚取りをしていた。権瓶さんにとって川といえば川魚で、アユ、サケとか釣れるものを食べ、小さいころから川魚に馴染んでいた。小松には海の魚は登って来なかったそうで、海の魚は阿賀野川河口の松浜の女の人が自転車で行商していたそうです。自分たちは魚というと川魚しか食べられなかった。ハユ、イゴイ、アユ、サケなどをハエナワ、トウカケで取っていた。

権瓶さんは終戦の年(1945年)、尋常小学校を卒業し、そのあと山と川に関係のある仕事をしていました。畑仕事や養蚕を手伝ったり、山から護岸用の粗朶(そだ)を担いで川まで運んだり、冬には草鞋を作ったり、仕事があれば護岸工事をしていました。1955年にダムができ、下流で魚釣りができなくなったとのこと。

1959(昭和34)年、阿賀野川の水面が白く濁り、多くの魚が腹を見せて浮き上がるということがあった。これは昭和電工のちょっと上の山のカーバイドを積んでいた所が、大雨が降って崩れて、阿賀野川に流れ込んだのが原因だということです。権瓶さんたちもみんなで魚を取り食べたそうです。1964年ごろ、権瓶さんの家では、川魚を食べさせた飼猫が狂ったように走って死にます。権瓶さん自身は、1962年頃から物を落としたり、めまい、手足のしびれ、物が二重に見える、耳鳴りがする、夏でも足が暖まらなくなる、などがしばしば起こるようになります。しかしそれが水俣病とは分からなかったそうです。

新潟水俣病は1965(昭和40)年に公式発表されますが、それは横越の横雲橋から下流の話だと思っていて、患者は上流にはいないと思っていた。それが上流からも患者が出ることになります。

権瓶さんの症状が一番悪くなるのが1973年で、頭痛、物忘れ、蟬の声のような耳鳴りがして、匂いも臭覚もほとんどなくなります。この頃、旗野秀人さんと知り合い、検査を受けたほうがよいということになり、沼垂診療所の齋藤恒先生に診ていただいたところ、水俣病の症状があると言われます。当時は、兄弟でも「水俣病の検査に行ってきた」という話はできなかったそうです。検査に行ったことは家族には話をしたそうですが、その当時は「水俣病はうつるから嫁や婿はもらうな、くれるな」などとい

うデマが広がっていたそうです。権瓶さんは4人の子どもがいたので、ずいぶん悩んだそうです。

翌74年、水俣病認定申請の書類を町の役場に出して、認定申請をし、県より通知が来て、新潟大学病院に検査に行きます。大学病院に着くと、水俣病患者は退院口から入れということでした。また受付で手続きをすると、カルテは一番下にされて、他の患者さんより後回しにされたそうです。大学病院では目の検査のとき、「見えるのに見えないふりをしているのか」、耳の検査のときも「聞こえても聞こえないふりをしているのか」と、まるで悪いことをやったように怒られたそうです。体が悪いから検査に来たのに、水俣病というだけでまるで悪人扱いだったそうで、「そんなに水俣病になりたいか」「お金が欲しいのか」とか言われ、まるで犯人扱いだったそうです。

大学の検査が済むと、県より認定棄却の通知が来たそうです。認定されなかったわけですね。権瓶さんの奥様のアキさんは41歳で発病し、権瓶さんとはほとんど同じ症状でしたが、一度も検査を受けなかったそうです。1977年の暮れに認定申請を勧められたそうですが、その次の朝、亡くなります。自死されたということで、42歳だったそうです。

権瓶さんは、若い頃は青年団の活動をされ、隣町の弁論大会まで参加しに行くなど、まじめな方で、活発に活動されていたそうです。奥様が亡くなったあと、子ども4人を抱えて、また自分の病気も抱えて、再婚しないで、自分1人で頑張ってきたということです。また1970年代の後半には、安田町で潜在患者の発掘調査などもされています。

水俣病の症状があると言われた人が認定の検査に行くと、審査では、1から4までのランクがあり、1から3までのランクの人は認定されたそうですが、権瓶さんたちは4ランクで、ダメだとされた。未認定の人はほとんどが4ランクだそうですけども、ほんのちょっとの違いだったそうです。

この認定審査で棄却される人が出ることにについて、旗野さんは、「そもそも中毒なんだから、100人いれば100様の症状がある。人によっては検査のとき緊張して普段できないことができたりすることがある。それで健康な人と見なされたり、ニセ患者と見られるかもしれない。水俣病と認定された人と同じように魚を食べて、同じような症状があるんだから、たとえ見たところ普通の人にはしか見えなくて

も、患者であることは間違いない。感覚障害とかしびれは目に見えない」とおっしゃっています。

先ほどの発表にもありましたが、熊本水俣病は劇症型の患者さんが多いので、見てははっきりと分かりますが、新潟水俣病では、劇症型の方は初期に亡くなられたあとは、一見すると健康な人とあまり見分けがつかない方が多数だということです。

水俣病であることを認めて欲しいと、認定を棄却された人たちが集まり、1982年に昭和電工と国を相手に、第2次訴訟の裁判を起こします。第1陣から第8陣まで、234名が参加します。権瓶さんは子どももいるということで、参加するかどうか悩んだそうですが、このままでは納得できないということで、裁判に参加します。

裁判と並行して権瓶さんたちは全国の人々に理解と支援をお願いしようと、いろいろな行動を行います。東京に出掛け、昭和電工との交渉や会社前での座り込み、国会議員に早期解決のお願いに回ったりします。また県内の全ての自治体にも協力要請で回ったりします。裁判が始まってから13年半後の1995年12月、内容的には十分とは言えませんが、一応の決着を見ることになります。

この認定申請について旗野さんは、「水俣病を認めるシステムは、認定審査会というところで、新潟県知事や新潟市長が判子を押すんですけども、県知事や市長は“自分は専門家ではない”と言って審査会に任せている。審査会が水俣病と認めなければ、水俣病でなくなる。しかしそれは行政側の都合であり、水俣病の人と同じものを食べて、同じような症状がある権瓶さんはどうしても被害者であり患者なんです」とのこと。

裁判の上では和解が成立して、決着の内容としては決して十分とは言えないけれども、1995年の12月から翌1996年の2月に一応のけりがつき、国、昭和電工との裁判を終えます。旗野さんによると、「十数年の裁判の間に、一緒に闘った仲間が高齢でどんどん死んでいく。もっと頑張って運動しろとか、とても言えなかった。苦渋の選択だった」とのことです。

裁判が終わって和解したあと、同じ部落の中で、裁判をやらなかった同じ症状を持つ35名の人も救済された。そういう人の中には、「お前のおかげじゃねえ。俺は国から、県から一時金や医療手帳をもらったんだ」という人もいます。さらに新潟

水俣病関係でテレビや新聞に出ると、同じ部落の人が「ええ顔しよって、新聞出てテレビに出て」「ほら、野郎、かっこつけやがって」とか言われるそうです。別に顔を売るためじゃなくて、みんなのためにやっているのだけれども、なかなか理解してもらえない。旗野さんは「そういうことを言っている人もみんな被害者で、みんな基本的には被害者なんだけど、立場が違うもんだから被害者同士がぶつかってしまふ」と述べています。

裁判が和解して「未認定」から「未」の字を取った。裁判闘争はつらく長い闘いだっただけども、「つまり我々は水俣病患者なんだ、これからは余生を楽しもう」ということで、楽しい運動をしようということになり、患者さんで初めて温泉旅行に行き、会津の कोरोリ三観音巡り、毎年の花見の会などを行っているそうです。

その後権瓶さんは「安田患者の会」の副会長になり、亡くなった人の供養のためのお地蔵さんを作る石を探しに、旗野さんと一緒に水俣に行ってきたそうです。そして「今では二度と悲惨な公害を繰り返さないように語り部をやっています」ということでした。権瓶さんは昨年2011年2月、81歳でお亡くなりになったそうです。

次のお2人はお元気で、現役の語り部として活動されていますので、直接ご本人の話を聞かれるのが一番良いかと思しますので、内容を端折^{はしよ}りながらお話しします。

小武節子さん。

この内容は2008年の講演によります。1936年（昭和11年）、現在の新潟市江口の御出身。堤防のそばに住んでいたのも、小さいころから川で遊び、魚を捕まえたりしていた。お父様は釣り好きだったが、9歳のときに戦争で亡くなった。お母様は、小武さんが中学校を卒業するのを待たれていて、小武さんも早く中学校を出てお母さんを助けたいと思っていた。小さいころからお金を工面するお母さんの姿を見ていたために、家計を助けるために川の護岸工事や農作業などに従事されていた。こういう苦勞もしたので「人より我慢強い人間になったかもしれない」ということです。

1957（昭和32）年に22歳で津島屋に嫁ぎます。ご主人のお母様の実家は網元で、ご主人の身内は全員第1次訴訟の認定患者でした。小武さんも同じ魚を食べていたそうです。ご主人のいところからも「おめ

えらも俺のくれた魚を食べたから、同じ症状があるはずだ」と言われたそうです。68年ごろから頭が痛くなり、得意であった田植えの作業が思うようにできなくなり、体が動かなくなります。しかしご主人は認定申請をするのに反対します。水俣病に認定されたら、村ではいろんな噂が飛んだそうです。「うつる」とか、「水俣御殿がまた建った」「あそこの家は毎日ごちそうを食べている。毎日、寿司屋が寿司を運んでる」と言われたそうです。

なので、いくら症状を持っていたとしても、具合が悪くて医者に行きたくても、表立って行かれない。いわゆる当時の「水俣隠し」と呼ばれるものです。同じ症状、同じ魚を食べても、医者に行くにも隠れて、なかなか言い出せなかった。そのような差別偏見がすごかった。

ご主人は小脳をやられていたので、運動神経がダメになった。さらに2006年には難病になった。小武さん自身は、自分の体を労わりながらご主人の介護しているので、夜もろくに眠れない。寒くなると膝がすごく痛くなり、夜になると足を冷やすとよくないので、ズボン3枚、下にももひき、靴下も3枚履いてコタツに入る。ご主人はトイレに行くのにも歩行器につかまらなければならない。ここ何十年も、夜何時に寝ても1時半か2時には必ず目が覚め、そうすると今度は眠れなくなり、あんまり薬を飲みたくなないので、我慢してラジオを聞いて、3時か4時くらいにまで聞いて一夜を過ごす、そういう日が続くそうです。

ご主人はいくら説得しても、頑として「水俣病にはなりたくない、水俣病を名乗りたくない。会社もクビになってしまう」と言っていた。ある時、ご主人が何かの集まりに出ていたとき、水俣病に認定されていたいところが一緒にお茶を飲みに来たところ、周りの人が「水俣が来たがな、ミナが来た、ミナが」とバカにしていたのを聞いて、「あんなこと絶対に言われたくない」と言っていたそうです。

しかし、そのご主人も会社を休みがちになり、以前は飲まなかったお酒を毎晩飲むようになり、依存症のようになって、転んでケガをしたり、階段から落ちたりすることも何十回とあり、こちらの話相手にもならないような月日が流れたそうです。離婚も考えたそうですが、子どもが3人いるので、お父さんのいない子どもにしたくないと思って、自分さえ我慢すれば、と考えるようにしてきた。ただ、時に

はあまりの切なさで、思わず阿賀野川の端に立って、「生きるために魚を食べてきたのに、なんでこんな目に遭わなければならないんだ。」と悔しさと情けなさで、何度も川に飛び込もうかと思ったそうですけども、子どもの顔を見るととてもそういうことはできなかったそうです。

小武さんは認定申請をしますが、認められません。悩んだ末、1982年2次訴訟に参加します。初めは他人の目が気になって運動には消極的で、誰かが水俣病の苦しみを理解してくれて、誰かがやってくれると思っていたそうですが、1988年盛岡で開かれた全国母親大会に参加して、自分の思いを発表したことが契機になり、「ほっかむりして生きてはいけない」と考えるようになったそうです。

小武さんは若いころから歌や踊りとか芸事が好きで、津島屋に嫁いでからも、民謡や踊りを習ったり、盆踊り大会などに出ていたそうです。体のリハビリになると思ってやっていたが、最近年のせいか覚えも悪くなり、また手先がしびれて感覚がなくなり、踊りの発表会の大事なときに扇子を落とすことが続き、自信がなくなってきたそうです。

今でも自分がテレビに映ったりすると、「あんただろう、こないだテレビに出たのは？」とか「あなたが出ると金になるだろう」とか言われるそうです。一方で、「あなたたちが一生懸命運動してくれのおかげで、私たちの医療費もちゃんと出るし、運動してくれて、私たちも恩恵受けているよ。ありがとう」と言ってくれる人もいます。

現在、「環境と人間のふれあい館」の語り部をされていますが、初めはあまり乗り気ではなかったが、館長さんに「あんたたちが資料館を建てろ、建てろと言ったのに、何寝ほけてんだね」と言われて、「なるほどそうだ」と思って、語り部をやるようになったそうです。今、語り部として一生懸命やれるのは、子どもたちの深い理解、愛情のおかげだとおっしゃっています。この間、語り部に行ったら、子どもたちが小武さんの顔写真を入れた新聞を作ってくれて、お礼の手紙、励ましの手紙が来るのが心の支えだとのこと。握手してくれと言ってくれる子たちもいて、そういうことがあると、「ここに来られる限り来なくちゃ」と思うそうです。

また保健手帳（医療手帳）が、新潟でもかなり多くの方が取得するようになりましたが、今まで名乗り出る勇気がなかった人も名乗り出るようになった

ということは、自分たちの運動が実を結んだのではないかとのことです。ただ、小武さんには娘さんが2人いますが、そのうちの1人が仕事に手が震える、頭がボーっとするなどの症状を訴えて、自分と同じようなので、水俣病ではないかなとちょっと心配しているそうです。

あるとき新聞に載っていたそうですが、新潟市長宛てに、「ニセ患者のために大事な市民の税金を使うな」という投書があったとのこと。小武さんはそれを読んで「本当に情けなく思った。これが申請差別ではないか。誰が何ともない体で、13年も裁判を打つバカがいるか」と思ったそうです。泉田県知事も言っていました、「裁判にかかる費用のほうが、貰えるお金よりも多くかかる」とのことです。

小武さんは、講演を聞かれています方々に水俣病を理解して、説明できるようになっていただいて、応援していただくと、薬を飲むよりも勇気を与えてくれる、勇気が湧いてくる、とおっしゃっていました。
近四喜男さん。

近さんの内容は、2011年11月15日、新潟県立大学に講演に来ていただいた時の内容です。近さんは1930（昭和5）年生まれで、新潟市一日市のお生まれ。すぐ隣ですね。8人兄弟の6番目で、小学校を卒業して、一時期「新潟鉄工所」に勤めますが、川船に乗る仕事をされたそうです。1960年にお父様が新潟水俣病を発病された。第1次訴訟の原告団団長だった近喜代一さんは兄弟の一番上のお兄さんだそうです。74年に認定申請をしますが、翌年棄却されます。現在「新潟水俣病被害者の会」の副会長、「ふれあい館」の語り部をされています。語り部になったのは、親子9人のうち4人が亡くなり、残った5人も「生涯治らない」と言われながら苦しんで生活をしているので、「こんな経験をしながら、後世の人たちに、子どもや孫に伝えなくていいのか、という責務のようなものを感じた」が、「なかなか語り部になるチャンスが遠かった」。第2次訴訟では1995年に和解が成立して、その裁判の経過を見て、「年老いた人たちが原告になって、痛みをこらえて、腰を伸ばして闘っているのに、ずっと苦しみを訴えているのに、13年間も法廷に縛り付けられていたんだ」と思った。「後世の人のために、こんなあつてはならない病気をみんなで乗り越えるために、語り継ごうと決心した」とのことです。

近さんのふるさと一日市も川沿いの村で、みんな

川の水に足を浸すようにして生活されていたということです。当時の子どもたちも川遊びをしていて、小学1年生くらいになると自分で泳ぎを覚えていた。こうやって自然の中で育ち、自然の優しさも自然の厳しさも教えられたそうです。川で獲って売れる魚は、海から産卵のため川を上るサケ、マス、ヤツメウナギ、イトヨ、ボラ、モクズガニで、売れない魚は、在来魚のイゴイ、ウグイ、コイなどで、一般の家庭の食卓で食べられるのはこの在来魚だった。近さんの家は子どもが8人で、親御さんからすれば「子どもたちに動物性タンパクをどう与えるかというのが頭にあったんだろう」ということです。

時間がだいぶなくなってきたので、近さんはここで切り上げさせていただきまして、4番目の渡辺参治さんと5番目の方にいきたいと思います。

9年前、2003年に女子短大時代の教え子が結婚すると言って、結婚式に呼ばれました。お相手は新潟で映画関係の仕事をしている青年で、映画「阿賀に生きる」の製作のボランティアをしていたそうです。式の中盤に差し掛かり、何か怪しげな2人の男性が登場しました。1人は中年男性で、ニコニコというかニタニタ笑っているおじさんで、もう1人は頭はツルツルで背の小さなおじいさんで、歌を歌うと言い出します。「ちょっと準備をします」というから、何をするかと思ったら、「養命酒」の空箱をガムテープで机に貼り付けて、太鼓のバチを取り出して、そのバチで「養命酒」の空箱をパカパカ叩きながら、えらく大きな、とても通る声で、「ドンドンパンパンパンパンパン〜」と「ドンパン節」を歌い始めました。何なんだ？と思って聞いていましたが、あとになって知ったことですが、このツルツル坊主の小さなおじいさんが、水俣病未認定患者で「安田の唄の参ちゃん」こと渡辺参治さん、もう1人の男性は、「安田患者の会」の旗野秀人さんだということです。

渡辺さんは1916年、大正生まれで、小さいころから歌が好きで盆踊りなどでよく歌っていたそうです。小学校を出て、瓦屋に弟子入りして瓦職人となります。昭和17年、阿賀野川の近くの昭和電工の住宅の屋根に屋根ふきの仕事に行き、阿賀野川から魚をたくさん取ってきて、毎日食べていた。参治さんは、第1次訴訟には参加せず、第2次訴訟に参加しますが、瓦職人をしていたので、川と直接の関係がない生活をしていた上に、歩いたり走ったり

できるし歌も歌えるので、一見健康そうに見えたので、ニセ患者と言われることも多かったそうです。それでも、大好きな歌を歌い続けているそうです。ご両親が歌う歌を聞いて覚えたということです。92年の第2次訴訟の和解でも参治さんは未認定患者のままで、その後、旗野さんと2人で新潟水俣病の語り部として全国を回って、大好きな歌を披露して、語って回っているということです。

5番目に第3次訴訟原告の女性。

今年（2012年）の5月、新潟地裁で新潟水俣病の第3次訴訟の公判が行われたので、傍聴に行きました。第3次訴訟は2007年4月に提訴されたもので、第1、第2次訴訟の患者さんとは別の団体による訴訟です。このときの口頭弁論で、原告の50代の女性が意見陳述をしました。新潟水俣病の患者さんといったら70歳以上の高齢の方が多かったのですが、50代という年齢に驚きましたが、この女性は陳述で、子どものころから川魚を食べていたこと、子どものころ経験した水俣病の検査、子どものころからの目まいと耳鳴り、結婚して妊娠したときの不安などを話されました。小学校のとき、水俣病にかかっていることがまわりに知られ、つらい思いをしたそうです。彼女は陳述しながら声を上げて泣き出しました。2010年から始まった「水俣病特別措置法」による救済申請が今年の7月末で締め切られましたが、この50代の大人の女性が声を上げて泣く姿を見て、私は自分の姉と同じくらいの年の若い患者さんがいることに驚いたと同時に、患者さんが水俣病であることを他人に知られることの恐怖は、水俣病でない者の想像をはるかに超えるものがあるのだなと思いました。そして7月末に救済申請が締め切られても、人に知られるのを恐れて申請できなかった人たちはかなりの数に上るのではないかと思います。

以上、患者さんについてでした。

患者さんを支える人たち

まず金田利子さん。静岡大学名誉教授の方で、私はこの方にお会いしたことも、お話ししたこともないんですけど、新潟水俣病関係の書物『阿賀よ伝えて』に文章を寄せられていて、どうしてもこの人には触れないわけにはいかないと思います。といいますのも、金田さんは新潟県立大学の前身である県立新潟女子短大の幼児教育科に1966～69年までの4年

間おられて、児童心理学を担当されていた方です。金田さんは、短大近くに住む新潟水俣病の唯一の胎児性患者（お母さんのお腹の中にいるときに中毒になった方）古山知恵子さんを訪ねて診断し、短大の学生と一緒に知恵子さんの成長発展を理解してその発展保障をしようと取り組まれた方です。週に一度学生と一緒に知恵子さんを訪ねて診断し、一緒に遊ぶという方法でリハビリに努めて、いろいろな困難を乗り越えて児童療養センターへの入園に至ります。当時短大には附属幼稚園がなく、附属幼稚園が欲しいという学生の希望と、友達と一緒に遊びたいという知恵子さんの希望を合わせて附属幼稚園作り運動に取り組まれたそうです。結局、附属幼稚園は金田さんが短大から名古屋の大学に移ってからできたそうで、知恵子さんも入園の対象外になっていたそうですけども、知恵子さんはその後、県立養護学校に入学し、高等学校教育まで受けて、手足不自由で車いす生活で、声を発するのができないとのことですが、作業所で仲間と水俣病運動と障害者の発達保障に取り組まれているということです。

大熊孝さん。NPO「新潟水辺の会」の代表、新潟大学の名誉教授でもあられ、今回のこの講座に来られる方です。2000年の7月に開催された「阿賀野川の過去、現在、未来」という講演で大熊さんのお話を聞かせていただきました。お話の具体的な内容は忘れてしまいましたが、お話を聞いたあと、川というものについて考えさせられました。思うに、川は一つの地域において、人間の体における血管みたいなものではないかと。血管は体に必要なものを運び、不要なものも運んで排出します。川も地域にとって必要なものを運び、不要になったものを運びます。血液の流れが異常をきたすとその人の体も異常をきたし、川の流れが正常でなくなると、その地域も正常でなくなり災害などを引き起こす。血液の流れの状態を見ることでその人の体の健康状態が分かりますけれど、川の流れの状態を見ることでその地域の状態が分かるのではないかと、そんなことを考えました。それ以降、車や電車に乗って川を渡るとき、必ず川を見る癖がついてしまいました。旅行に行ったとき、必ず川の写真を撮るようになってしまいました。

原田正純さん。水俣病研究の第一人者で、熊本大学医学部の研究班で、胎児性水俣病の原因をつきとめ、一貫して患者さんの立場に立って研究治療を行

い、裁判でも証言をされた方です。1999年に熊本学園大学に移られています。国とチッソの対極に立たれたためか、熊本大学ではとうとう教授になれなかったようです。今年の6月11日にお亡くなりになりました。

原田さんのお話で印象に残っているのは、原田さんは「初めから水俣病をやろうと思っていたのではない」そうで、水俣病への取り組みは、最初は指導教官から水俣に行くように言われたからだそうです。しかし現地では、患者さんたちに拒絶されてしまいます。当時若かった原田さんは、「大学病院からわざわざ来て、患者を診てやる」というような「生意気な考え方」をもっていたそうです。患者さんたちは「新聞記者も来っとだろ？ 熊大の先生も来るな！」と言って、隠れて、雨戸を閉めて、原田さんは追い返されてしまった、というエピソードを語られています。私たち大学関係者、研究者と言われる者にとって、とても重い意味を持つエピソードだと思いました。

さらに、患者さんがよく「先生、昭和35年に水俣病が終わったという根拠は何ですか？」と言うので、原田さんが「35年以降患者が出ておらんでしょう。」と言うと、「先生たちは調べもせずに、どうしてそんなことを言えますか？ 魚は海の真ん中におるじゃないですか。それをこっちから来て、こう取って、こっちに持って帰ったら毒になって、こっちから来て、こう取って、こっちに持って帰ったら毒にならなくて、どういうことですか？ どうしてこっち側では患者がおらんのですか？」というふうに患者さんから言われた。要するに海には境界線は無く、魚は西にも東にも泳ぎ回るわけです。これは先ほど河田君が発表した御所浦のことを言っていて、みんな水俣とか出水とか東側の海岸のほうばかりを重要視していて、対岸を注意して調査していなかった。患者さんにこのように言われて原田さんはハッと意思つき、魚は自由に泳ぎ回るから、対岸にも行っても当然じゃないかということで調べたところ、やはり患者さんが見られた。先ほどの発表で御所浦の患者さんの発見が遅れたというのには、こういうことがあった。みんな東の水俣とか鹿児島寄りのことしか考えてなかった。こういったことから原田さんは、現場に行ってみることの重要性、現場に立ってみないと解決方法が分からないと。当事者に当たり、当事者の視点に基づくということを非常

に重視されていたようです。今年6月に亡くなりました。

旗野秀人さん。もう何回もお名前が出てきましたが、20代のころから40年近くずっと患者さんに寄り添って一緒に歩いて来られた方で、映画「阿賀に生きる」にも登場されています。毎年5月に安田で「阿賀に生きる」上映会を行っておられますけども、ある年、私も参加しましたが、結婚式に呼んでくれた例の教え子が子どもを連れて来てまして、物販コーナーにあるビデオテープを指して、「これ私のおばあちゃんのビデオだよ」って言います。見てみると、そのテープは「冥土のみやげ企画」制作、「企画、監督、旗野秀人」になってまして、患者さんの日常生活を記録して撮影したものです。彼女のおばあさんも患者さんだったわけですね。17分ぐらいの映像です。旗野さんはこの「冥土のみやげ企画」について、「20年、30年と家族のように付き合ってくれた高齢の患者さんが、次々と亡くなるものだから、残されたわずかな時間は皆さんが望むように今までの分とも楽しい思い出話をたくさんつくってあげたいと『冥土のみやげ企画』などと名乗っては仕掛けるようになったのである」と書かれています。

わくしまかつみ
涌嶋克己さん、通称WAKKUN。神戸御出身のイラストレーターで、絵本『阿賀のお地藏さん』を出されています。これが主人公の少年ですけど、今流行りのテレビや映画のアニメの登場人物とはちょっと違う、独特の雰囲気のある絵です。かわいいと言えるかどうかは分かりませんが、独特な絵ですね。2005年「ふれあい館」での新潟水俣病公式発表40周年記念行事では、渡辺参治さんの歌に合わせてイラストを描くというパフォーマンスをやられていました。今年の7月にも豊栄で画展を開かれたようです。

東アジア、中国、韓国

最後になりますが、私は一応中国関係のことをやっていますので、中国との関わりにも触れたいと思います。原田正純さんのご指摘によりますと、中国では1970年代後半から吉林省の第二松花江という川の流域で水俣病と同様の水銀中毒の症状の病気が見られたということです。しかし症状が日本の水俣病ほど重症ではなかったそうです。現在中国は急速な経済発展の中で環境汚染が深刻化しています。

2006年、中国の西安で中国と日本、韓国のNGOによる第3回「東アジア環境市民会議」が開催され、旗野さんも参加されたそうで、公害被害者の人々と交流して新潟水俣病の経験を語られたそうです。その2年後の2008年10月、第4回の同会議「阿賀から東アジアへ」が新潟市で開催されています。私自身は参加していませんが、記録集が発行されています。新潟水俣病経験の報告、中国安徽省を流れる淮河の汚染と、民間グループ「淮河衛仕」の汚染除去への参加、政府の汚染処理政策への提言、医療活動などが報告されています。このように新潟水俣病の患者さんと中国、韓国など、東アジアで公害問題関係者の交流が始まっており、水俣病の経験がアジアに向けて発信されつつあるようです。中国に関わる者として、何かお手伝いできたら、と考えています。

語り部さんの話に戻りますが、こういう言い方は不謹慎だと言われるかもしれませんが、語り部さんの語りは、アーティストのライブとか古典の落語みたいに、確かに一度聞いた内容なんですけども、また聞いてみたくなるような、そんなものを持っているように感じます。また結構冗談を交えて話をされます。手足がしびれて食事の仕度のとき包丁がうまく使えなくて、爪の先、指の先をしょっちゅう切ってしまう。ある日カレーを作ったけれど、お孫さんが、「ばあちゃん、今日のごはんは何ね?」と言うんで、「今日は、ばあちゃんのお肉入りカレーだよ」って言うのと、お孫さんが「食べたねー（食いたくねえ）」と言った話とか、そういうギャグなんかも織り込んでお話をしていただけます。

こういう患者さんが少しでも楽に、楽しく生きられたらという旗野さんの考え方にも共鳴しますし、今後も務めてそういう集まりに出たり、学生を誘ってみたいと思います。

ちょっと時間が超過しましたが、「ドンパン節」を少しだけ聞いていただきます。

[渡辺参治さんの「ドンパン節」の録音テープの音声]

私の話はここまでさせていただきます。

第3回公開講座

阿賀野川流域と『阿賀に生きる』を語る

日時：平成24年12月1日（土）

会場：新潟県立大学 新学生ホール2階

鼎談：大熊 孝（新潟大学名誉教授・NPO法人新潟水辺の会代表）

旗野秀人（安田水俣病患者の会事務局）

遠藤麻理（FM PORT「モーニングゲート」ナビゲーター）

司会：山中知彦（新潟県立大学地域連携センター長）

司会 これから新潟県立大学公開講座、第3回目を開催させていただきたいと思います。本日は、新潟大学名誉教授の大熊孝先生、「安田水俣病患者の会」事務局の旗野秀人さん、そしてFM放送「モーニングゲート」のナビゲーター、遠藤麻理さんにお越しいただきまして、鼎談という形で、阿賀野川流域とその将来について、自由に語っていただければと思います。それでは、ナビゲートのプロの遠藤さんにバトンタッチしますので、よろしくお願いいたします。

遠藤 まず、自己紹介をしようと思います。FM放送で、主にモーニングゲートという朝6時50分から10時までの生放送を担当しております。聞いたことがあるという方、どのくらい…あ、少ないですね、ハハハ。ぜひ覚えてください。私、6年前の2006年に、未認定患者の渡辺参治さんを主人公にしたラジオドキュメンタリー番組を制作したのが新潟水俣病と関わるきっかけとなりました。それまで私自身は、水俣病というものは怖いし、触ってはいけないもの、もう終わったものだと思っていたんですね。でも、見た目は元気で、とても朗らかな参治さんという方に会って、ああ、参治さんのことみんなに伝えたいなという思いから、番組を制作することになったんですけども、そのときに、患者さんをご紹介いただいたり、水俣病についていろいろ教えてくださいましたのが、今、一緒にいる大熊先生や旗野さんで、それからずっと、ありがたいことに声をかけていただいています。

（拍手）

旗野 旗野といいます。安田の患者の会の使い走りをやっていますが、家を建てるのが本業です。新潟水俣病とは40年ほど前から関わって、地元の患者さんたちとおつきあいさせていただいています。ほんとにありがたいことでした。皆さんは水俣病といったと

きにどんなイメージを持たれますか。私はすごく重症な患者さんのイメージで、付き合わせてもらったんですけど、現実的には、普通のおじいさんとかおばあさんにしか見えなかったんですね。最初は運動の切り口で関わったんだけど、それだけだとほんとにこの人たちの、一番いいところはなかなか伝わってこない。運動は文化運動にならねばならないんじゃないかということに気が始めて、たまたま『阿賀に生きる』っていう映画の制作にかかわって、水俣病事件そのものを伝えることも大事だけど、やっぱりそこには人がいる。その人たちをどう伝えればいいのかということに大事にしてきました。気が付いたら映画ができて20年、患者さんと友達になって40年、そんなふうに還暦2年過ぎた旗野です。今日はよろしくお願いします。

（拍手）

大熊 大熊といいます。1987年、今から25年前に、「新潟の水辺を考える会」を発足させたとき、「柳川堀割物語」という映画を上映しました。これは、福岡の柳川という町が堀を全部埋めちゃおうっていうことで、それを埋めずに残して、今、年間400万人から500万人の観光客が来ている所なんですけども、そのドキュメンタリー映画です。新潟は堀を埋めてしまったので、「新潟の人よ反省しなさい」というつもりでその映画の上映会をやりました。私が、旗野さんと知り合ったのは、80何年でしたかね？ この『阿賀に生きる』という映画を作ろうって話になって、監督の佐藤真さんは、まだ監督でもなんでもないころなんですけども、この映画『柳川堀割物語』を挟んだシンポジウムの席にいらっしゃって、手挙げて、これから阿賀野川の新潟水俣病の患者さんを中心にした映画を撮りたいんだけど、協力してくれないかみたいな発言をされました。それから、いよいよ映画を本格的に作ろうっていうこと

で、あれは89年でしたかね、その正月に佐藤監督と小林茂カメラマンと旗野さんとで、私をしこたま飲ませまして、泥酔しているところで、制作委員会代表をやれってことで、なんか「うん」と言ってしまったらしいですね。その毘にはまってしまって、『阿賀に生きる』の制作委員会ということで、月1回集まりをやっていたんですけども、どうやってお金を集めるかということで四苦八苦しました。結局、3,000万円は寄付、それで1,000万円借金して、『阿賀に生きる』という映画が完成しました。

その当時、私は新潟大学の教授になってたかな、土木工学という分野で河川工学だとか土質力学だとか、土木の歴史だとか、水理学だとか、そんなようなことを教えてました。いわばバリバリの土木屋で、自然を破壊する側の人間でありました。まあ、ずっと最後までちゃんと教授として勤めまして、5年前に定年退職しました。2008年ですね。で、その私の定年退職の最終講義の記念パーティーには、遠藤さんと知り合っていましたから、司会をやっていただきました。定年退職してから、ますます自由になって、言いたい放題を言っているところです。

旗野 今年『阿賀に生きる』完成から20年たって、ニュープリント作りました。主役になってるのは水俣病の未認定患者の3家族なんですけども、その暮らしぶりをそのまんま撮ろうよ、水俣病っていう言葉を使わないで。出来上がって、出演してくれた患者さんからもみんな喜んで見てもらったんですが、翌年の93年の4月に、加藤作二さん、餅屋のおじいさんね、1人で1日に28臼ついたんですよ、80過ぎて。そのおじいさんが、1年後に亡くなり、あとを追うように6月におばあさんが亡くなりました。その仕掛け人の責任として、追悼集会を5月の連休に、とにかくお礼の意味を込めて、無料で16ミリフィルム上映を続けてまいりました。当然ながら、結構傷ついてですね、生ものでございますので。まさか20年も毎年やれるとは思わなかったですし、撮影の小林茂さんは手入れの行き届いたフィルム管理してくださってるから、多分、日本で一番きれいなフィルムを、われわれは観せてもらってたはずですよ。それにしても、すごく傷だらけだったんですね。で、ひょっとするとこれからまだ続くんじゃないか、20年も続いた幸運も含めて、ニュープリント、新しいフィルムに作り直そうとの声が上がりました。フィルムそのものがもう製造中止のニュースも

あって、その焼き付けする技術者、職人がいないという話まで聞こえてきました。ラストチャンスだと。この節目にあえて、全てデジタルな世の中で、もう一度フィルムにしようと呼びかけましたら、5月4日の追悼集会でもカンパが集まり、その後全国から約300人余り賛同いただきまして、ニュープリントができました。9月にシネ・ウインド、地元でまずやらせてもらったんですけども、それを聞きつけて、佐藤真監督のいとこの東京で映画配給会社をやっている小林三四郎さんが、新潟だけなんて、もったいないから、東京でもやりましょうと。できたら全国上映やろうと。ドキュメンタリーで、20年ぶりにリバイバルの劇場公開なんてありえないんだそうですね。すごく張り切ってくれて、大変な事業であるけども、とにかく節目になるからやろう！実は、11月24日が渋谷のユーロスペースの初日でした。私も、行かしてもらったけれど、ほんとに満席。小さい映画館ですが、若い人も結構来てくださいました。なんと2時間の『阿賀に生きる』の予告編を、佐藤さんの編集を担当してくれた秦さんっていう、とっても有能な方がおられまして2分でまとめちゃったんですね。これがまたものすごく評判です。これをまず、皆さんにぜひ見ていただきますが、2時間を2分でやっちゃったんですよ。本編よりもかえっていいっていううわさもあるんですけども、それをじゃあ、準備はOKでしょうかね。



『阿賀に生きる』タイトル画面

(映像の音声)

Aー どっこいしょと。お前さんたちも、ご大儀だ。おかしいようでもあれば、気の毒のようでもあれば、ひでえわ。

Bー 記念写真だよ、記念写真。

Cー 今年は頑張りましょう！

一同 頑張ろーう！ 頑張ろーう！

Dー フィルムがなくなりましたので。

(一同笑い)

Eー まあたそぎゃ、手、突っ込むわ。

Fー 最終弁論を…

Eー ゆかたこうふにカネあらば、電信柱に花が咲く、焼いた魚も泳ぎだす、こら、絵に描いただるまさんも歩きだす。とろっこ、ぱったんだと。

Fー ずーっとさ、孫子の代までも、阿賀野川のあのかき、どーしてもお前さんのちもずを残してえ。日本一の舟じゃねえかね、おどど。

旗野 こういうことで。

遠藤 いい映画ですね、ほんとに。予告編でもほんとにいいんですけどね。

大熊 あのう、今出てきた映像の中でも、裁判所に皆さんが行くシーンがありましたが、普通のテレビ局の人たちは、裁判所に入るのを前から撮っている。それを、小林カメラマンは後ろから撮ってるんですね。あの映像はいいなと思っていたら、ちゃんと予告編にピックアップしてくれて、なかなかいいなと思いました。

遠藤 そうですね。

大熊 次に、私が河川工学の専門家だったんで、川については詳しいんで、阿賀野川について、エッセンスをちょっとしゃべらせてください。



阿賀野川・本尊岩付近の美しい阿賀野川

これね、どこだと思う？ 阿賀野川です。本尊岩という岩があるんですけども、そこが撮られています。ローレライの岩よりも、よっぽどこっちのほうがきれいだと思うんですけども、「ライン川のような」と明治の初めにやってきたイザベラ・バードが言っ

ています。この景色はほんとに素晴らしいですね。ええと、阿賀野川は荒海山を源流として、流域面積が7,708平方キロメートルで、日本の川の中では第8位の大きさということですね。年間総流量が126億立方メートルということです。一番多いのが信濃川で約160億立方メートル、2番目が石狩川で、時々、阿賀野川のほうが大きくなるときもありますけど、平均するとちょっと石狩川のほうが大きくて、第3番目に阿賀野川です。だから第1位の流量の信濃川と、第3位の流量の阿賀野川が、新潟県を流れているんです。それからここで重要なのは、小瀬ヶ沢洞窟っていう所に縄文土器が出ます。実は阿賀野川っていうのは、信濃川に合流していました。日本一の水と第3位の水が合流しますから、新潟港は、冬の間、季節風で砂が吹き寄せられて水深が浅くなるんですけども、それを全部フラッシュしてくれて、水深の深い良い港だったんですね。流域面積も両方合わせると2万平方キロメートルになります。昔は船で物資が全部港に集まってきましたから、言ってみれば日本最大の経済圏、2万平方キロの経済圏を持っている港ということで、日本最大の川港として栄えていました。

ただ、出口が北のほうの荒川と信濃川の二つしかありませんから、水はけが悪くて、越後平野というのは水浸しで、いっぱい潟があったんです。それで、これをどうしたかっていうと、放水路をたくさん造って排水をして、乾田地帯にしたんですね。その放水路の始まりが、今の阿賀野川ですけども松ヶ崎掘割と書いてあります。そこに掘割を作ったんですけども、それが翌年の雪解けの洪水で突き抜けて今の阿賀野川になったんです。その結果、新潟港のほうには水が行かなくなって、港は水深が浅くなってしまいます。それで大きな船が入れなくなっちゃうんですね。そういうことで、この放水路の始まりは、松ヶ崎掘割です。もう一つ、越後平野の中でやっぱり一番大事なのは、大河津分水ですね。これが決定的に越後平野を穀倉地帯に変えていきます。

その話をしていると長くなるんで、これでやめておきますけども、およそ300年前の阿賀野川下流には、蛇行しているところがいっぱいあったんですね。図の中で、黒い線で描かれているのが今の阿賀野川ということで、こんなにあっち行ったり、こっち行ったりしてたのが、まあ、整備されてきて、水害に遭わなくなったということですね。昔の阿賀野川は



およそ300年前の阿賀野川下流部の状況「阿賀野川下流域図」(国土交通省・北陸整備局作成)より

やっぱり水量が多くて、豊かで、ああいう帆船が走ってたんですね。うまく風が吹いてくれば、帆で上れたんですけども、基本的に綱で引っ張って上るということで、津川のほうまで引いて行ったんですね。それからサケの地引き網をやったりとか、いかがが流しをしてたとかいうふうなことです。

これは今の予告編でも出てきましたけれども、サケの捕り方で釣流しというものです。あの釣を竿の先に付けて、さおを流しながらサケが来たなと思うとピュッと引っかけて捕るという漁法なんです。だからこれは上手でないと捕れないんですね。いまだにそういう漁法をやっている人がいるんですね。これは釣流しで獲ったサケですが、約12キロある。こういう大きなサケが、阿賀野川では今でも捕れるんですね。これは、加藤準一さんっていう人が平成17年に釣流しで捕ったものです。ここに穴が開いてますね。これ、その釣流しで引っかけて捕った証拠です。こういう漁法っていうのは上手でないと捕れないし、残りのサケはほとんど自然産卵したり、あるいは熊の餌になったりということで、ほんとに自然と共生する技術だと思います。さっきの一網打尽の地引き網もありますけれども、こういう漁法というのは、ほんとに自然と共生していくための技術なのかなと思います。ともかく、こういうサケが昔はたくさん捕れたということなんです。これが只見川上流の銀山平まで上ってたっていうんですね。

それでさっき小瀬ヶ沢洞窟っていう話をしました

けども、阿賀野川支川の常滑川中流にあるのですが、1万2,000年前の土器が出ます。土器が出るっていうことは定住が始まったっていうことを意味します。定住が始まるまでは、家族が子ども連れて年寄り連れて移動してるんですけども、大体年寄りは途中で脱落していくわけですね。移動中に死んでいくっていうか、捨てられていくんですけども。定住が始まると年寄りがそこにいて、子どもを面倒見るという中で、文化が継承されていきます。やっぱり定住が始まるっていうのが、人類の発達の中で非常に重要なことなんです。この土器が出るっていうのが、世界でも圧倒的に古いんですけども、僕が新潟に来たときに、その小瀬ヶ沢洞窟の土器が一番古いといわれてたんです。しかし、つい最近、1万6,500年前の土器が青森で出てきたり、1万3,000年前の土偶が天津で出てきたりしてるんですけど、新潟の人はかつて日本で一番古い土器が出る、日本で一番古いということは、世界で一番古いことなんです。それが出ることを学校等で教わってないです。遠藤さん、新潟出身ですね？

遠藤 はい。

大熊 教わりましたか？

遠藤 教わりません。

大熊 僕はなんでこんな重要なことを教えないのかと疑問に思っているのですが…、とにかく1万2,000年前から阿賀野川には人が住んで、ずっとそれがつなげてきてるということです。私が子どものころ

は、あの縄文時代の人と今の人間とは血がつながってないっていうふうにいわれてたんですが、ともかく1万数千年前から人が住んでいて、縄文人の血が一番濃く残ってるのは北海道と沖縄だそうです。本土の人間は大体、大陸から来た弥生人との混血でできている。だからわれわれのDNAは半分、大陸だということらしいです。これはもう今、DNA鑑定で明確に分かるということで、縄文人の血がずっとわれわれに今も続いているということですね。そういう意味では1万2,000年前から阿賀野川流域には人が住んでいて、そこで無事な暮らしをずうっとつないで、つい最近まで来たわけです。

ともかく、そういう阿賀野川なんですけれども、その阿賀野川をこれだけダムがある川にしてしまったんですよ。河口から只見川筋に17個、連続してダムがあります。昔はここにいっぱい鮭が上っていたのに、これだけ造ってしまって、私から見ると発電のためだけの川にしてしまった。それまでは、縄文人がいたり、みんなそこで魚を捕って食べてたわけなんですけれども、こういう川にしてしまった。ここで

やっぱり言っときたいことが、これだけダムがあって電気をたくさん作ってるのに、羽越本線も只見線も電化されてない。私が新潟に来たときは、新潟の人はお人よしだと思いました。今の時代になると、電線がないほうが景観もいいし、SLも走らせるし、ディーゼルエンジンも今は非常に発達してきて、ハイブリッド・ディーゼルエンジンなんてのがあって、排気ガスもあんまり出さなくてスピードも出るし、まあ、電化されてなくてよかったねっていう時代になりつつあります。まあ、何周遅れかのトップランナーになったのかもしれませんが。

このダム群の中で最初に造られたのが、この鹿瀬ダムです。この鹿瀬ダムの電気でアセトアルデヒドを作って、その排水で新潟水俣病が発生したんですね。やっぱり川をなんとも思わない、地域の人のためじゃなくて、中央の東京やなんかが栄えるようにして地域を無視して、そういう形で発電形態を作り上げたということですね。それでも、この鹿瀬ダムに魚道があるんですよ。こう折れ曲がった魚道が



阿賀野川流域概念図

あって、なんとか魚が上ってくるんですけども、只見川筋のダムには魚道はありません。只見川筋のダムは、戦後、有名な白洲次郎という人、テレビドラマにもなったり、白洲正子の夫なのですが、その有名な人が東北電力の会長の時代に、このダム群を造ってるんですけども、魚道が1個もありません。戦前の鹿瀬ダムには魚道があるんですよ。まあ、その辺の問題はあるんですけども、とにかく川をそんなふうに傷めつけて、発電のためだけの川にしまって、川には汚いものを流してもいいっていう、近代精神っていうのはそういうものなんですね。その結果、水俣病を起こしてしまった。今、魚道は上の新郷ダム、それから山郷ダム、それから上野尻ダム、豊実ダムとずっと続いてるんです。上野尻ダムは数年前までは土砂で埋まって、魚が上れませんでした。だけど平成14年にその土砂をどけて水が流れるようにしました。それから山郷ダムも、ここに魚道があります。これは土砂で埋まって、今は機能していません。だからこれを全部、魚道を直せば、会津まで少なくとも鮭が上っていけるようになるんですよ。早めにこの魚道を東北電力が直してくれたらなあと思います。只見川はちょっと無理ですね、今のところはね。

ということで、私の川の定義ですけども、この『阿賀に生きる』という映画を作るころまで次の定義で学生に教えてました。「河川とは、地表面に落下した雨や雪などの天水が集まり、海や湖などに注ぐ流れの筋（水路）などと、その流水とを含めた総称である」。味も素っ気も無い取ってつけたような定義ですけども、まあ、水が循環してるってことだけしか定義しておりませんので、この定義から、それじゃ具体的に川にどんな工事をするかっていったようなことになると、コンクリートで固めたりダム造っても、あんまり良心がとがめることがない。そういう定義だというふうに私は思います。それでこの『阿賀に生きる』に関わっていて、やっぱりこの定義じゃ駄目だということ、次の定義にしました。「地球における物質循環の重要な担い手であるとともに、人間にとって身近な自然で、恵みと災害という矛盾の中に、ゆっくりと時間をかけて人の“からだ”と“こころ”をつくり、地域文化を育んできた存在である」。ただしですね、5年前の私の最終講義のときは「“からだ”と“こころ”をつくり」っていうのは入れてませんでした。最終講義だ

からね、踏ん張って自慢話大会です。自分では川の定義はこうだよって、しゃべったんです。そのとき「“からだ”と“こころ”をつくり」は入れてないんですよ。「“からだ”と“こころ”をつくり」っていうのは、『阿賀に生きる』ですずっと学んできたことだったんですがね。さっき話したように、加藤のおじいさんは28日についても平然としてる。それでいて新潟水俣病にかかっているんですよ。末端神経がいかれてるんですよ。そういう人が、いざとなると28日を、それも重たい杵なんです。それについて平気なんです。筋肉がそれだけでできてるんですね、80歳になっても。それは、自然の中で労働して、自分の肉体が鍛えられていたってことだと思うんです。自然の中、あるいは川で遊んだり労働してきた人たちは体が非常に強靱に作られている。ついでに、脳みそもみんな80歳でもボケてなかったんですね。それはやっぱり脳みそも鍛えられているということです。なおかつ、自然と付き合ってるから心が優しい。

ともかく、そういうこと知ってたんですけども、言葉としてきちっと表現できずに、フレーズを入れたのはつい最近だということです。この定義にすると、やっぱりダムっていうのは川にとっては、基本的に敵対物なんですよ。そういう認識でも、東京があれだけ繁栄するためには、あるいは日本が明治以降ここまで来るためには、水力発電がどうしても必要でした。それから飲み水も必要でした。工業用水も必要でした。都市用水も必要です。それで必要なダムはあります。けども造り方がですね、川にお願いして造らせてもらうっていうんじゃなくて、川を壊すような形で、ダムができそうだと思う場所に全部ダムを造ってきました。日本には今、ダムのない川ってほとんどありません。だからもうここに至ると、私はダムのない川はレッドリストに載せて保全すべきだというふうに、ちょうど今から20年ぐらい前から、『阿賀に生きる』の映画を作る中で、そういう確信が出てきましたから、もうこれからダムは造っちゃいけないっていうことを言い出したんですね。表面で反対してるんじゃないんです。経済的なことで賛成・反対してるんじゃないんですよ。川にとってはやっぱり敵対物で、もう必要ないと。必要ないという理由も、ご質問があれば答えることにして、取りあえずこれで、阿賀野川に関して共通認識を持っていたいただけたらなと思っています。一番

言いたかったことは、1万2,000年前からずっと人間の暮らしがありました。そしてちょっと頑張れば、阿賀野川は、今でもこんなでかいサケが戻ってくるわけですから、自然を回復することも不可能でないだろうと思います。今、九州でダム撤去が始まっていますけども、撤去できれば、もっと違った具合になるかもしれませんっていうことです。

遠藤 はい。ということで、阿賀野川、ほんとに知らないこと、いっぱいでした。ねー、身近なことほど、ほんとに知らないんだっていうことを、私、水俣病もそうでしたし、うーん、思いますね。

さて、阿賀野川といえば、新潟水俣病ということが起こった場所でもあるわけですけども、その中でこの『阿賀に生きる』という映画ができて、お二人は『阿賀に生きる』という映画で、まさに出会われて親交を深めてこられた。私もドキュメンタリー番組を作るときに初めに見たのが、この『阿賀に生きる』という映画だったんです。はい、じゃ、旗野さんお話ししますか？ やはりこの『阿賀に生きる』という映画のおかげで1,000万円の借金をされて…。

旗野 あ、すぐ返せましたし。

遠藤 すぐ返せました？ よかったです。で、ほんとにこの、スタッフの名前のところに、旗野さんもそろそろ名前が出てもいいんじゃないですか、仕掛け人という形で？ ねえ。ほんとに謙虚でいらっしゃるからと思うんですけども。

大熊 ハクチョウが飛んだ映像が予告編の中にあっただと思いますけど、これ作るの大変だったよね。そのときの説明して、僕、現場にいなかったから。

旗野 正直言うと、この現場は私もいないんです。

大熊 11月15日が狩猟解禁日なんです。鉄砲がボンと一発鳴ると、阿賀野川にいたハクチョウが全部いなくなっちゃうんですね。そのときの映像です。

旗野 これは、映画の途中の写真だと思うんですが、先ほどの餅屋の加藤作二さんと非常に親しくさせてもらって、私が30のときにおじいさんが、「旗野さん、いくつになったの」。そんで、「30なった」。結局もう10年ぐらいのお付き合いをしてたわけですけど。「30にもなってまだ独りもんじゃ、かたわじゃないか。こんな水俣の運動なんかやめて、すぐまず嫁さん連れて、大工仕事ちゃんとやれ。そんでねば、もう寄せねえ」って言われました。21歳ぐらいから「患者さんのため」みたいに、それなりに一生懸命やったつもりなんですけども、とてもかっこ

いいおじいさんだと憧れていたから、もう即、「はい、分かりました、嫁さん探してきます」って言って、すぐ嫁探ししました。たまたま、餅屋のおじいさんたちは、金婚式だったんですね。50年で。映画見てもらえば分かるんだけど、もう死ぬまで夫婦げんかしてるんですけど、ちゃんと思いついてるっていうか。で、新婚旅行ついていきたいと言われて。だから新婚旅行と金婚旅行も一緒に行ったり、もちろん結婚式と金婚式も一緒です。子ども生まれたら、すごく喜んでくれて。うちの子どもたちは、自分の家がほんとにどこだか分からないくらい通わせていただきました。家族で記念写真撮るときに、みんなでピースサインしたら「こんな手踊りしながら写真撮るなんて初めてだー」と言ったおばあさんが次の日から寝たきりになっちゃうんですね。映画ができた次の年におじいさんとおばあさん、死に別れて。神様、仏様、いるんだかどうか分かりませんが、なんか目に見えない大きな力で支えられてるような気がしますし、私にとって、多くの患者さんと付き合わせてもらったけども、特にこの餅屋のおじいさん、おばあさんは、私の人生そのものを変えさせてくれた、とても大事な人です。

大熊 みんな一緒に3年間、寝泊まりしながら映画を作っていました。だから登場人物とも、ほんとに心が通っている中で、もう登場人物も、カメラを意識しなくてしゃべれるような、そういう中でこの映画ができたんですよね。

遠藤 集まったスタッフの皆さん、何年かけて、どこに住んで、どんなふうな関係を築きながら、患者さんの近い位置で撮っていったんですか？

旗野 1984年に、佐藤監督が「無辜（むこ）なる海」という、水俣の患者さんのドキュメンタリーフィルムを持って、東北を回るということで「新潟へ行ったら、旗野のところを訪ねれば、ただで酒飲めるし泊めてもらえる、と言われてきました」って訪ねてくれたんですね。それが私と佐藤さんの出会いでした。水俣に関わって、10年ほどたっていて、水俣病として認められなかった未認定の患者さんが相手でした。それがほんとに理不尽で、早くに申請して、行政認定された人は1,000万とか1,500万もらう。でもいろんなことで、嫁に行けなくなるとか、うわさがあったりして、なかなか申請できない人がいたり、思い切って申請しても、症状の組み合わせとか蓋然性とかで、向こう側の都合で、おんなじように食べ

て、おんなじように暮らしたはずなのに、とても患者さんにとっては理不尽。それに不服がある人は、行政不服申請請求しなさいっていうから、82年から2次訴訟っていうことで、棄却された人たちの裁判が始まったりするんですけども、それにもずっと関わってはきたんですが、おかしいなと思ったのは、患者さんたちの思いがなかなか酌み取ってもらえない。一方では、お医者さんとか行政の長けてる人たちが「高度の学識と豊かな経験を基にして、あなたは水俣病でないと判断します」みたいな言い方をする。患者さんはそれに対して、自分が好きだった川魚の名前を震えるカタカナの字を書いた。それは何、どういう意味なのかさえも分からない、理解してもらえない。自分の一生をとつとつと語る場面もあるわけですね。「生まれてからずうーっと川筋に暮らして、18なって、川向かいに嫁に行けって言われて、船に乗って行きました」とかですね。映画に出てくるような人たちの人生を語るわけなんですけども、ちゃんと取り上げられるっていうことがないんですよ。で、片や熊本のほうでは、石牟礼道子さんっていう偉大な文学者がいたり、土本さんというドキュメンタリー監督がいたり、ユージン・スミスさんが写真撮ったりと、そういうふうな人が大勢いるのに、新潟にはいない。ただ運動体としては、四大公害裁判の先駆的な闘いであつたっていう評価はされてるけど、なんで新潟はいないんだろうっていうふうなことを考えたわけです。このまま裁判とか、随分長くかかるんであろうに、どうしたらいいんだろうかなという思いを持ったときに、佐藤さんと出会いました。

先ほど予告では、なかなか伝えきれませんでしたけど、とてもとても魅力的な暮らしをしてたわけですよ。私は患者さんのためと思って付き合ってたのが、いつの間にかその暮らしぶりの魅力っていうか、どんどん、引きずられていくわけですね。それを自慢したい。新潟だって、こんな人たちがいるんだよ。こんないい所なんだよって酒の勢いで語るわけなんですけども、佐藤さんは次は自分が監督だつて思われたのかもしれませんが、とにかく私にとっては、飛んで火に入る夏の虫で、もう、うれしくて、うれしくてですね、毎晩飲んでました。佐藤さんもよく通ってくれて、でも、まだ大工でいえば弟子なわけですね。「旗野さん、これから東京で修行してくるわ」って言って何年か、監督の名前忘

れましたけども、修行してられました。

89年に、高齢の患者さんが「老夫婦2人暮らしでは、とてもこの雪深い所に暮らせないから、安田の孫と一緒に暮らすことになったんで、よかったら映画作りで、この家使ってもいいよ」って言うたんですね。佐藤さんは、映画は3人いればできる。監督とカメラマンと録音。で、カメラマン、誰にするっていったときに、これも偶然なんですけども、小林茂さんはスチールでは本なんかも出してましたけども、ムービーは1回も撮ってなかったんですね。けども、びわこ学園、重度の障害者の人たちが琵琶湖を一周する、写真と詩と一緒にした本が『ばんぱかばん』っていうタイトルなんですけど、私も見てたし、佐藤監督も見てた。それが、写真なんだけどムービーのような写真なんです。すごく印象深かった。2人ともほとんど同時に名前が出たんですね。スタッフの中で唯一結婚して、子どもさんもいて、この先どうしようかなって思ってもおられたらしいですね。京都で暮らしていました。

大熊 出身は長岡です。

旗野 で、そういうことがきっかけで、実家っていうか地元に戻ることになるわけね。

遠藤 皆さんが平均年齢、何歳のときですか？

旗野 20代で、コバさんと私だけが30代だったと思いますね。最終的には7人になるんですけども。小林さんはカメラマン。録音の鈴木彰二さんは、なんと鍼灸師なんですよ。

遠藤 えー。

旗野 鈴木さんも、ほんと水俣の患者さんのためにみたいなことで新潟に戻ってきた人。結局、やはり一度もやれることなく、録音を担当してくれて。スチールの村井さんも、たまたま全国行脚かなんかしてた、あそこ、そういう人が多かったらしいですけども、立ち寄った新潟で、面白そうなことをやってるってことで関わったのがきっかけ。

遠藤 へええ。

旗野 石田さんも、三条の鋸屋さんの後継ぎ社長。撮影助手の山崎さんは、三幸製菓のひび割れせんべいは僕が開発しましたって言うてましたけど、東北大学のタニシの研究をしてた彼が、なぜか関わりました。熊倉さんは、当時18歳だったんですが、いかだ作りかなんかやってるうちに、たまたま見学に来て、それから転がり込んで、7人が3年間、ここで



撮影基地 阿賀の家

仕掛人
旗野秀人（本職・大工）
（1950年生れ）



7人のスタッフ（監督・佐藤真さんは2007年9月逝去された。）

監督	撮影	録音・ナレーション	スチール
佐藤真 （1957年生れ）	小林茂 （1954年生れ）	鈴木彰二 （1959年生れ）	村井勇 （1961年生れ）
助監督	録音助手	撮影助手	
熊倉克久 （1971年生れ）	石田芳英 （1962年生れ）	山崎修 （1964年生れ）	

一緒に暮らして、ついに完成したということです。
大熊 熊倉君は18歳なのに、私は大学教授なのに、酒を飲ませたなと思って、今、反省して…思い出しました。

遠藤 ハハハハハ。

旗野 もう終わったことです。

大熊 いやまだ当時はですね、あの、弁明しておきます。大学で1年生入ってくるときに、一気飲みさせるのを僕ら横で見てて、容認してたんですよ。それが途中から、絶対そんなことしちゃいかんっていうことになって、1年生の歓迎会では飲ませなくなっただけです。でも。当時はまだ熊倉君も定時制の高校生だったね。彼を古町へ連れて行って、ガンガン飲ませたりなんかして、悪いことしたなと思っています、ハハハハハ。

遠藤 とにかく、集まるべくして集まった人たち、これほとんど奇跡ですよ、うん。このみんなが集まって、3年間住み込んで、家族みたいに生活していった。最初は田舎の人なんてほんとに、カメラなんて緊張するでしょう？ 普通のカメラでも嫌なのに、ビデオカメラを構えられるわけですから。でも、映ってる皆さんたちっていうのは、ほんとに、もう、そのままっていいですか、日常そのものっていうところで、彼らがいかにこう、おじいちゃん、おばあちゃんの心の中に入っていったんだって

うのが、すごく分かるシーンがいくつもあって。奇跡的なシーンっていうのが、詰まってるんですもんね。その辺のエピソードで、他にありますか？

旗野 映画の前に、結構、カメラマンとか、一人芝居とかで、いろんな人を紹介したりしてたんですね。だから、佐藤さんのところに連れてくと、「旗野さん、今度は何だね、何もんだね」みたいなね、また変わりもん連れてきたかみたいなことはありました。それと、遠藤さんもほんとになかなか、3人の中では扱いづらいというか、まさに職人魂で、怖い人だったんです。でも、やっぱり訪ねてったほうがいいよって言われて、ある日訪ねましたらね、ほんと酒は好きじゃないんだけど、私が大好きだってこと分かるから、昼からもう、ストーブの上で焼き燻して待っててくれるんですよ。で、乾杯。もうすごく喜んでくれて、あのおっかない顔じゃない人になっちゃうんですね。だから、3家族とも遊び心っていうのが、面白おかしくって、どっかで余裕があったんじゃないかと思う。だけど一方では、皆さん水俣病の患者であって、原告の1人だったりするわけですよ。どっちも間違いなくご本人ですけども、ひょっとすると矛盾するような場面もあるんですが、でも人間ってそういうことじゃないかと。加藤作二さん夫婦、あの2人を見てると、なんでこんな毎日けんかしてるのに50年も一緒だったんだろう

みたいなのが、とてもいい。だから多分、この人たちが特別じゃなくて、たまたまカメラを向けられた3家族ではあったけども、若い人たちっていうか、われわれもみんな、一生懸命さ加減は通じたんじゃないかなと思うし、この3家族の人たちも、なんか面白がってくれた。水俣病の苦しい話してくださっているということじゃなくて、ほとんどそういう話は、インタビューはしてないんですよ。

大熊 それで、あの、ちょっと言いたいのは、スタッフは若くて、エネルギーが余ってたんですね。フィルムはものすごく高くて、4,000万円のうち2,000万円ぐらいフィルムでお金が飛んでくんですよ。彼らには、コバさんが10万円で、監督が2万円というようなお金しか渡してなかったんですよ。まあ、エネルギー余ってるもんだから、それじゃあ、こういう本を作ろうって、雑誌ですけども、「阿賀草紙」を次々と発刊するんですね。第4号は水俣病特集を作りました。表紙は田島征三さんの陶器を使っています。それから、こういう「焼いたサカナも泳ぎだす」という記録集を出して、ここに映画の細かいシナリオに相当するものが入っています。それから映画のパンフレットなんですけども、映画ができたあと1年たって作るんですね。普通パンフレットは、映画作ると同時に出るんですけども、1年遅れて作るというようなことをしました。

それから1,000万円借金したって言いましたけども、それは、サンダンス・フィルム・フェスティバル IN TOKYOで、1,000万円もらいました。で、それで返せると思ったら、200万円だったかね、所得税を取られてしまって、まだ200万円残ってたんですけども、92年の文部省の芸術祭選奨と、文化庁の優秀映画賞というので、これで100万円ずつもらって、それで借金は返せて、ああよかった。いざとなったらね、退職金、使わなきゃいけないかと思ったりもしたんですけども、大丈夫でした、ハハハ。

ここで非常に残念だったことがあります。92年4月に完成して、11月に新潟日報文化賞というのがありますよね。この映画で日報文化賞欲しいと思って、シネ・ウインドの齋藤さんをお願いして推薦状を書いてもらって、日報文化賞に応募したんですよ。けども、くれませんでした。当時の日報文化賞審査委員会の委員長は、新潟大学の学長の武藤先生でした。私も新潟大学の中で、『阿賀に生きる』製作資金をみんなにカンパで回っていたりしたんで

すけども、なんとなく居心地が悪いですね。まだあの当時は、水俣病はやっぱりタブー視されていたんだと思います。そのあとすぐに第24回ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭賞、これ12月にもらったんですよ。そのあと、すぐアースビジョン92年をもらいますし、バタバタと12月から賞をもらい始めるんですよ。だから僕は日報さんね、『阿賀に生きる』に日報文化賞くれていたらね、今ごろ、鼻が高かったらと思うんですけどね。さっき話してたのは、20年たってニュープリント作ったから、もう1回応募してみようかって。2008年に定年退職した年に、お前、頑張ってきたから、日報文化賞やるよって、私もらったんですよ。

(一同笑い)

大熊 実は、シネ・ウインドの齋藤さんや、もう1人、遠藤さんという元新潟日報の新聞記者の方が、うまく私の推薦状を書いてくれて、もらえたんですよ。だから、まあ、これで今のところ帳消しかなとは思ってるんですが、それは私の個人的問題ですからね。もう一度、ニュープリント作ったってことで、応募してみようか？僕は審査委員長になれません、ハハ。もらった人は駄目、ハハハ、ということがありました。で、そろそろ遠藤さんに質問したいんですけども。

遠藤 はい。

大熊 毎朝、私、仕事場行くとき、ほんと短い時間だけど、遠藤さんの声を聞きながら行ってるんですけど、よく毎日これだけの時間気を張って、ちゃんと放送できるなと思うんですけど。秘訣は何なんですか？

遠藤 秘訣は…晩酌、フ。私もお二人と一緒に、酒がエネルギーなんですよ、ほんとに。ですから、何があっても、締めくくりますね、うん。

大熊 最近、泉田さんが知事になってから、熊本の水俣まで50周年のとき行ったり、それから、水俣病条例などいろんなことやり始めてから、僕は新潟がだいぶ変わったと思っているんです。しかし、まだそれほどでもないときに、あなたが新潟水俣病について関心を持った理由は何なんですか？

遠藤 そうですね、あの、『阿賀に生きる』っていう映画はもう、この映画にほれた人たちが、いろんな所で上映活動されてきたと聞いてます。で、その中のメンバーの1人に、あるとき、すごく面白いおじいちゃんがいるよ、っていうことで、歌がすごく

うまいんだって、すごく元気で朗らかな、いいおじいちゃんなんだよっていうことを聞いたんですね。私、祖母に育てられたおばあちゃんっ子なんで、おじいちゃん、おばあちゃん、大好きなこともあって、そのおじいちゃんに会いたいなあっていう思いだけで、まず、水俣病のみの字も頭になく、行ってみたんですね。追悼集会だったんです、はい。そのときに出てこられたのが参治さんで、私会ったとき90歳だったんですが、そのおじいちゃんが元気に歌って、私初めて会ったんですけど、「ありがとうございます！」ってね、「はいっ！」っていう、そういうほんとに…。

旗野 声が頭のとっぺんから…。

遠藤 そう、頭のとっぺんから声が出る方で。私とこう、初めましてって握手したときも、こう握手して、ここ触るんです、ここ、手首を。何だろうと思ったら、ここを触ると、いい女かどうか分かるんですって。

(一同笑い)

遠藤 ええ、私あの、認めていただいて、はい。「よし」なんて言われて、で、ますます好きになって。で、そのあとに実はねって、あのおじいちゃんの水俣病の未認定患者さんなんだよって聞くんですね。で、私、えっ？ と思って。水俣病って、みんなこう、震えてるんじゃないの？ 手とかこう、反り返ってるんじゃないの？ そもそも、笑ってこんなして歌を歌えるんだろか？ っていうことで、それまで持ってた水俣病のイメージが、その参治さんっていう人に会ったことで180度、変わってしまったんですね。で、水俣病って、何なんだろう？ 参治さん、今も番組を作るときに伺うんですけども、いろんな症状、水俣病の症状ってのも一つではないんですよね。いろんな、目に見えない症状があることで、偏見や差別があって、苦しいんですけども。その参治さんを苦しめてる水俣病っていうのは、何なんだろうって。私、恥ずかしながらですけども、裁判は決着したし、患者さんは救済されてると思ったんですね。でも全然そんなことなく、まだ始まってもしなかったんです。それを知って、あ、これは、ラジオっていう仕事をしてるんだから、新潟のみんなにも伝えたいと思った。何よりも、参治さんって、人として、ほんとに素晴らしい心を持った方で、明るくて朗らかですてきな方を、みんなに伝えたい。水俣病もそうだけど、参治さんをみ

んなに会わせたいという思いで、番組を作ったのがきっかけでした。うーん。それからずっと参治さんと文通を楽しんでいます、はい。

大熊 今も文通してるの？

遠藤 あ、今日持ってきました。これなんですけども、参治さんと何カ月にか1回なんですけど…。

大熊 これは何日にもらったの？

遠藤 去年ですね。クリスマスくらいのもなんですけど。

大熊 ちょっと読んで…。

遠藤 いっつも、いっつもそうなんですけれど、一面これくらいの、見えますか？ 真っ黒ですよ。真っ黒の、びっしり書いたのが、3枚。毎回このくらい書いてこられてね。で、この中に、時々判読不能なこともあるんですけど、一番いっぱい出てくる言葉って、何だと思いますか？

大熊 ありさ。

遠藤 ありさも出てきますけど、確かに、ハハハハハ。何だと思いますか？ これ、想像つく方、いらっしゃいますか？ 魚、ああ、魚、うん、今、はい、今、寄り添ってこられた旗野さんが…

旗野 感謝の言葉。

遠藤 そうです。「ありがとうございます」という言葉が、一番いっぱい出てくるんです。

遠藤 ぜひ旗野さんが、参治さんを…何年のお付き合いですか、参治さんと？

旗野 今の麻理さんの話の通りで、ちょうど私が結婚するころだから、32年か33年前に出会った人っていうか、分かってはいたんですけど、やっぱりね、正直言うと苦手だったんです。なんでかっていうと、もういわゆる、全く水俣病患者らしくないんですよ。要するに、救済してくださいっていう、ああ、患者さんって大変なんだ、かわいそうなんだっていう趣旨の集会なのに、1人笑ってて、すぐ歌うし、困った患者さんだったんです。

(一同笑い)

旗野 いかにも、偽患者代表みたいな。

(一同笑い)

旗野 だから私にとってもね、受け入れがたいところあったんです。で、頭の中では、いろんな人がいるんだ、実際、百人百様の症状を持ってしかるべきだと思って、理解はしてるんだけど、参治さんの場合はやっぱり困るんですよ。せっかく、そのような雰囲気盛りが上がってるのに、1人だけ笑ってる。

麻理さんの作った番組の中でも、麻理さんがもう、突っ込みが鋭いもんだから、「いつでも24時間、歌ってる」「えっ、トイレ入っても歌ってるんです?」「はい、やりながら歌ってます」ってあるんですけど。もう、寝ても覚めても、とにかく口ずさんでる。歌うことがほんと、あの人の源なんですよ。薬なんです。若いころレコード化の話があったけども、わいせつな歌詞っていうのと発音が悪いってことで、ドタキャンになったらしいんですが、米寿のお祝いのときに仲間を募って、ものすごくカッコいいCDを作ってあげました。すごく喜んでくれて、そのタイトルが、「うたは百薬の長 渡辺参治88歳」。ジャケットもプロの村井さんから撮ってもらったり、もう完璧なカッコいい…経麻朗さんから全面協力していただいて、あの、『阿賀に生きる』のテーマソング作ってくださった方ですけど、もう、ほんとに喜んでくれました。そのときに、こんなに喜んでくれるのであれば、これは冥土の土産のようだ。参治さん、「いつ死んでもいいよ」って、私も突き抜けて、解放されてる参治さん見てたら、ようやく自分自身から解放されたんですね。そしてものすごく気持ちが楽になって、もう参治さんといつも北海道から南は九州、沖縄まで、2人で「冥土のみやげツアー」ということで、楽しませてもらいました。映画の3人もそうなんですけど、特に参治さんは何でも受け入れてくれるんです。拒否しない。いつ死んでもOKと言う割には、この前、11月で96歳なんですけど、「参治さん、あと4年頑張らんかね」って言ったら、「いやいや、俺は120まで生きるんだ」って。あと4年どころじゃないんだと。まだまだ、旅の途中らしい。だから、麻理さんもおっしゃってたように、水俣患者はこうあるべきみたいな、勝手な患者像を押し付けてたような気がするんですよ。あの人、あんな元気に歌ってるのに水俣病患者であるわけがない。ほんとに参治さん、寝ずにしびれたりしてるけど、そんなの見えないから知らないわけですね。切ない思いしながら、歌でごまかしてるから。それは、畑に草取り行く人もあれば、いろんなことで、水俣病を克服しようとするスタイルあるけど、たまたま参治さんの場合は歌であったと。で、麻理さんも、わが意を得たりというか、最初はびっくりされたんだろうけど、付き合いの中で、どんどん、どんどん、引き込まれていくっていうか、患者さんっていうよりも、いいおじ



「うたは百薬の長」ジャケット

いちゃんに恵まれたっていうか、人生のほんとの達人っていうかね、そういういい人との出会いを得たっていうことだと思うんですね。

遠藤 そうなんです。あの、参治さんは、私が番組を作る中で、すごく苦しんで悩んで、水俣病勉強するのも一からですから、何度も通いましたしね、旗野さんの仕事の邪魔しに。で、ほんとに、何度もスタッフともけんかしたりしながら作ったんですけど。それで迷ったりなんかすると、なぜか知らないけど、参治さんから手紙が来たりなんて。何も悩んでるとかは書かない、ただ、参治さん元気ですかって、今、番組、一生懸命作ってますよ、参治さんのいい歌、ちゃんと入れて作りますからねっていうような手紙なんですけども、そこから、恐らく参治さんだからこそだと思うんですけど、なんか、私が悩んでるのかなとか感じ取ってくださったのか、必ず励ましの言葉を添えて送ってきてくれて、そのときに、印象に残ってる三つの言葉っていうのがあって。一つ、「嫌なことを言ってくれる人ほど、大切な人である」ってということと、二つ、「真心を尽くしたことは、他人は知らなくても自分を支える力になっている」ってということと、あと三つ目は、「小さなことに徹する人は、大きなことをなす力に恵まれる」っていう言葉をさりげなく書いて送ってくださって、私それを見て、もう涙を流して、やるぞー！ っていうことで、もうパワーをいただいて作ったっていう。そんな思い出があります。

旗野 それでなんとか賞もらったの？

遠藤 はい。なんとか賞をおかげさまでいただい

て、参治さん、ほんとに大喜びしてくださって。
旗野 あの番組は、普通水俣をテーマで取り上げると、皆さんも承知のような、いかに大変な問題であるかみたいなことに作りたがるんだけど、やっぱり人間、渡辺参治にスポット当てたところが評価されたんじゃないかなっていうふうな気がするんですよね。その魅力。

遠藤 はい。審査員の皆さんの言葉で、この番組はすごく、手法が、技術が下手だと。音のレベルからしてもそうだし、構成にしても未熟であると…私、初めて手掛けたドキュメンタリー番組なのでね…しかし、しかし、渡辺参治さんの魅力で、全てが帳消しにされているって。

大熊 ハハハハ。

遠藤 そう、私の力は全くないんです。参治さんが取った賞なんです、フフ。

大熊 参治さんを選んだってところが、あなたの、男を見る目が…ハハハハ。

遠藤 男を見る目…よかった。

大熊 で、参治さんも、女を見る目がある。それで気に入ったと。

遠藤 ハハハハ。

旗野 『阿賀に生きる』のときは、既に参治さんと仲間だったんだけど、患者の会の一員だったんです。10年ぶりで『阿賀の記憶』っていう、今日はその準備してきませんでした、佐藤真、小林茂、再び阿賀に入ります。そのときの主役が、なんと渡辺参治さんなんです。ただもう、全く『阿賀に生きる』とは別物でありまして、いわゆる佐藤真監督の実験映画的なものであります。渡辺参治さんがどういう人であるか、一切説明もない、ただの歌の好きなおじいさんですね。かねさやのラーメンすすりながら、「女というものは」なんて、わけの分からない映画なんです。佐藤さんに言わせると、われわれは勝手に『阿賀に生きる』の続編じゃないかと期待してしまう。「阿賀に生きる」は加藤さん、遠藤さん、長谷川さんというふうに区別つきますけど、大学なんかで学生諸君に見てもらったりすると、もうわけ分からない。ぐじゃぐじゃなんです。みんな年老いた、水俣病にやられた人たちぐらいのレベルで、ま、そういうもんだと。だからあえて一切説明はしないんだと。ただ、なんか変わったおじいさんがいるもんだなあぐらいが、いわゆる記憶に残るっていうふうな話をちょろっとしてましたけども。ま

あ、そういうことと言うと、麻理さんにとっても、渡辺参治さんの存在、大きかったけれども、私にとっても、水俣病になっても生きててよかったと思っただけのような、その後の関係って、やっぱりとっても大事で、補償金とか医療制度とかも大事なんだけど、みんな高齢であるし、水俣病っていう病を抱えて、それでも生きててよかったみたいなことを、なんか手助けしてやるのも大事な仕事の一つっていうことを、まあ、教えてもらったなあ。

遠藤 参治さんの十八番、なんでしょう？

大熊 どどんぱ。

遠藤 どんぱん節。安田の歌…あのね、安田に昔からある歌ですけどね。

旗野 まあ、民謡だな。

遠藤 ほんとうにお上手です。プロ級ですよ。

大熊 さて、またちょっと映像のほう、見てもらいたと思います。このお地蔵さんをどうしても旗野さんに話してもらいたと思います。その前に、これが水俣にあるお地蔵さんです。これが阿賀野川のそばにあるお地蔵さんです。これが利根川の北岸の雲龍寺っていうところにある、館林にあるお地蔵さんです。作者はみんな漆山昌志さんという方で、安田の石工ですね。ということで、これから何が始まるかという、旗野さんをお願いします。

旗野 私が関わってる安田の患者の会の人たちは、2次訴訟の原告で、水俣病認定を求める裁判でした。1995年の12月、当時の村山政権のときに、いわゆる政治決着という言葉が使われましたけども、要するに和解ですね。苦渋の選択っていうことで、確か260万の一時金っていうか、補償金でもない、見舞金でもない、わけの分からないお金ですけども、みんな高齢になってですね、どんどん亡くなって、百人余りいた患者の会が今、安田は4、5人しか集まらないんですよ。それほどやっぱり長い時間、高齢の人たちが、運動してきたわけですけども。

ほんとに東京まで行ったり、生まれて初めて裁判をやったりした人たちですが、みんな一応運動のけじめついて、節目迎えたんだけど、何やりたい？ って聞いたら、温泉行きたい。湯治が大好きだって。なんで今まで言わなかったの、いつでも行けそうなのに？ って言ったら、あの人たち裁判やってるくせに、カンパで温泉行ってるんじゃないとか、またカラオケ歌ってるとかって言われるんだそうです。だから我慢してきた。じゃあ、温泉に

行こうって言って、初めて会として温泉に行きました。「ほんとに今日は、えかった。これで冥土の土産できたわ。旗野さんありがとね」って、初めてそういう…ずっと裁判とかやってきたんだけど、それとは違う感謝の言葉をもらったんですね。「ほんとによかったよ」って。じゃ次、何したい？ って聞いたら、今度は花見に行きたい。会津のころり三観音巡り行きたいとかですね、全然今までと、運動とは関係ないようなことがどんどん出てくるわけで。でも、一方ではとてもうれしかったですね。仲間が、みんな次々死んでくわけですので、もう限られた時間とこの人たちが生きててよかったという思いを、お返しできるかなっていうふうな気持ちになった。安田の患者の会の、その周辺、家族も含めてですね、おんなじ家族でも、認定になって1,000万とか1,500万、大きなお金もらってる人がいるし、260万の人もあるし、まだ申請もしてない人がいる。その村にとっても、いろんな立場の人がいるんです。でも、全員被害者です。その被害者の都合で、そういうふうになったわけでもなんでもないですよ。いろんな症状の現れ方があって、申請できる人、できない人とか、いろんな立場があるもんだから、一応運動が終わったんですが、その村の中で、あの人なんか野暮こいて260万もらったとか、月曜日の朝、生ごみ出すときに、みんなコソコソと、ほら、あの人なんか元気なのに、ごみなんか二つも持ってるくせに、とか言うんです。運動の成果としては、一定の評価とか得られて語られる部分もあるんだけど、その村の都合から言うと、何一つ解決してないっていう事情があるんですね。運動の拠点になったのは、千唐仁っていう、船頭さんがほとんどを占める、100戸ほどの小さな村なんですけど、そこに昔から虫地藏さん…ツツガムシっていうダニの一種で、刺されると死んじゃうっていう、とても怖がられた、で、亡くなった人もいるんで、供養するので、奉られたんですね。いろんな立場の患者さんがいるんだけど、虫地藏さんだけは、一様に皆さんが手を合わせたり会釈しながら、みんなで大事にしてる、村のマスコットなんですよね。その隣に、水俣のお地藏さんを建てると、ひょっとすると、昔のように、お互いさまで仲良く生きていけるような、きっかけになるんじゃないかっていうふうな話が出てきて、じゃ、どうせ作るなら、水俣の石をみんなで拾いに行って、それで、石工の漆山さん、飲

み仲間の漆山さんに彫ってもらおうじゃないかって、1998年の4月24日、虫地藏祭りに合わせて建立したわけです。写真の右のほうのおばあさん方は、虫地藏さんの念仏講の人たちなんですね。この念仏講の中でもいろんな立場の患者さんがおられます。認定患者さんもおられるし。でも、この念仏唱えるときだけは、みんな仲良く、この日1日はやろうねっていうようなことで集まってたんですね。

で、一ついい話が、実はこのお地藏さんを建てさせてもらう土地の主のおじいさんとおばあさんは未認定患者なんですね。ところが息子さんは、また水俣の運動のために、そんなことをやると、旗野さんまた、観光バスで大勢積んできたりするでしょう。そんなことをやられると困ります、っていうことで断られたんです。もうお地藏さん彫ってもらってるのに。それがほんとに土壇場になって、そのおばあさんが、こんなありがたい話断るなんて、逆に罰当たってっていうことで、ハンガーストライキやったらいいんです。とにかく、おばあさんのおかげで、ほんとに直前になって、建ててもいいっていうことになりました。4月24日、めでたく建て、水俣からお祝いに駆け付けてくれました。

村の集会所があります。その集会所も基本的には村の人たちは、ただなんですけど、水俣の患者の会はよそ者扱いで、いつも300円だか、500円だか、使用料取られてた。でも、その日は、区長さんが「今日は、村のお祝い事だから、いりません」って言われたんです。もう、患者の会の人たちは、皆さん喜んでくださった。裁判で和解を結んで260万もらったっていうことも、運動の成果としてあるんだけど、多分、その千唐仁の100戸の村の、患者さんの立場からすると、ようやく、村でも完全に理解してもらったということではないんだけど、それでも、村のお祝い事だから、一方では建てちゃいけないっていう話もある中で、そういうふうに言ってくれたっていうことは、目に見える成果は何もないようなんだけど、患者さんにとっては、喜ばしい出来事だったと思うんですね。で、それがきっかけで、ただで貸してもらえようになったんです。ですから、たかが300円、されど300円で、やっぱり、お地藏さん建てるとっていうことは、とても大事なことで。後世に伝えるっていう、和解の成果の一環として、環境と人間のふれあい館っていうのもできました。水俣病っていう名称を付けるかどうかってこ



絵と文・WAKKUN

多古 肇

絵本・阿賀のお地蔵さん

とも、いろいろ紆余曲折はありましたが、やっぱり私はある種、お地蔵さんみたいな存在でもあって、後世に語り伝える。100年、200年、このお地蔵さんが、「これはな、死んだじいさんとばあさんが、水俣まで石拾いに行って作ったらしんだわ」とかね、そういう語り草、物語になるんじゃないかと。

新潟水俣病公表40年をきっかけに、このお地蔵さんをテーマに絵本を作ってもらったりするんですが、たまたま…私の話の中ではたまたまばかりですね…神戸の友達の前嶋克己さんっていう人が、神戸の震災にも遭ってるんですが、自分のその体験記と新潟水俣をうまいこと話の筋にしてくれて、とてもすてきな絵本を作ってくれました。なんと、これもあの冥土のみやげ企画の仕事ですけども、去年、おとしでしたか、新潟県が、県の事業の一環として、県内の小中学校に1冊ずつ、全校配布の副読本として取り扱ってくれました。信じられない、考えられなかったですけど。やっぱりそういうふうにお地蔵さんの力っていうのは伝わってくるんだなって気がしました。で、たまたまですね、あのう…

大熊 たまたまが多いなあ。

(一同笑い)

旗野 はい、ほんとにたまたまなんです。マスコミの人とかですね、旗野さん、裁判が終わったから、じゃ、このお地蔵さん、そんなに効き目があるんで

あれば、川筋に今度はお地蔵さん建てる運動やるんですか？ なんていう人もいたんですが、私はこの事情があって、こういう形になったんであって、そういうふうにする人は、それぞれやればいい。そんな運動論的にやったわけではないんで、いや、ちょっとは考えたかもしれませんが、実はその4年前に、熊本に、亡くなられた川本さんの依頼があって、阿賀野川の石で彫って送ったんですね。水俣の原因企業であるチッソの排水口の目の前に、川本さんたちが建立してあります。いわゆるその、兄弟地蔵みたいなことで、一つはこう…

大熊 この水俣のお地蔵さんが最初なんだよね。私も、これを建てたっていうんで、わざわざ水俣まで行って、これ私の写真なんですけどもね、撮ってきたんです。だから、まずこの水俣地蔵があったんだよねえ。このいきさつが、単に川本さんに言われたからって、阿賀野川の石を持ってきて…やっぱりここ、もうちょっと、よくは知らないから教えてよ。

旗野 川本輝夫さんは、お父さんが劇症型で精神病院で狂い死にしちゃうんですね。それを最後までみとって、ご自身も申請するんですが、安田の患者さんと同じで、棄却になります。で、行政不服をしました。それを支援する熊本の水俣病研究会という、若きころの原田正純先生とか、石牟礼道子さんとかいろんな方が、行政を相手にして立ち上げるんです。1971年、環境庁ができる年です。8月に川本さんたち素人が、逆転認定裁決を勝ち取るんです。これはすごく大事な内容なんですけど、症状が一つでもあったら、とにかく被害者なんだから、他の合併症とか、鑑別診断なんてのは二の次だと、すぐに救済しなさいっていう次官通達出したんです。71年の8月以降、急速に認定患者が増える。71年9月の新潟第一次訴訟判決もその影響を受けて、患者側が勝ったというふうな見方を私もしてるんですが。それが、73年のオイルショックあたりから、蓋然性とか組み合わせとか言って、また棄却が増えて、安田の患者さんは全員棄却になるんです。という運動を川本さんが独自に展開して、最終的には市議員とかなって、政治のところでやるんです。1994年、東京・水俣展で久しぶりに会ったら、運動的にもかなり行き詰まった様子で、地蔵さんを建てたいが相談に乗ってくれて突然言われたんです。水俣の事件に関わる88カ所に、地蔵さんを建てたい。については最初にも、諸悪の根源である排水口に建てたい。

どうしたらいいだろうって言われて、じゃあ、せっかくだから漆山昌志って腕のいい石工がいるから、阿賀野川の石で彫ってプレゼントしますよ…。

大熊 と言っちゃったわけ？

旗野 と言っちゃったんです、酔った勢いで。すぐ作って送ったら、すごく喜んでくれて。埋め立て地なもんですから、県有地なんです。川本さんは、過激派って言われてる人で、勝手に建てちゃうんですね。建ててしまったら、県の人、「困るんですよ、移動してください」って毎回言われるんだそうです。「お地蔵さんっていうのは1回魂入れると、ただの石じゃなくなります、移動できるものならどうぞ移動してください」って言うと、さすがの県の人も、手出しができません。穏やかな地蔵さんだけに、とても、存在感というか、怖い存在であるということですね。実はそのときに、いつか新潟でも、このお地蔵さんの力って、大事なんじゃないかなとは思いつつ、それが私にとって、やっぱ和解が一つの節目だったんですね。

そして2007年、佐藤さんが亡くなった年。田中正造、足尾鉍毒事件ですね、100年前の話だけど。実は、草倉銅山、古河鉍業が足尾銅山を始める前の、その足尾の足掛かりにした草倉銅山って所がありました、そこでもう煙害、起こしたりしてるんですね。その利益でもって足尾に移るんですが、草倉の被害民と足尾の田中正造さんとが、交流したような新聞記事も見つかったりして、阿賀野川の、その草倉の被害民の人たちが、田中正造さんと呼ぶことを決議したっていう新聞記事が出てるんですね。ただ、実際来たかどうかっていうのはまだ見つかってないんですけど。そういう縁があったり、新潟が生んだ、『大日本地名辞書』を作った吉田東伍（とうご）さんという方が…

大熊 吉田東伍という人がいます。安田生まれで、旗野家から新津の吉田家に養子に行き、それで東京へ行って大学者になって、早稲田の教授になって、『大日本地名辞書』というのを書きます。そして、地理学者でしたから『利根治水論考』という利根川の歴史の本を書きます。私のドクター論文が、「利根川治水の変遷と水害」というもので、その『利根治水論考』を読んで、吉田東伍を知ります。ついでに、利根川のことを勉強していると、渡良瀬川の鉍毒事件だとか、谷中村問題に行き着かざるを得なくて、田中正造の勉強をしました。その田中正造が

死んだときに、吉田東伍が追悼文を書いてるんですよ。そんな関係があったんですね。で、私は新潟大学に来たときに、今から39年前、工学部がまだ長岡にあったときに助手で来たんですけども、そのときに、すぐに吉田東伍のお墓参りに行きました。ということで、ぐるぐるぐるっとつながって、私自身にもつながっていたということです。で、このお地蔵さんをどうしたんですか？

旗野 古河市の追悼集会に、吉田東伍が駆け付けて追悼演説をやったっていう記録が残ってますが、100年前から新潟とのつながりがあった。でもそれって、なんにも形、残ってないよなっていう話が出たりしてる中で、先ほどの渡辺参治さんと一緒に田中正造大学の講演に行ったりとか、キャッチボールの関係があったんですね。田中正造大学事務局長の坂原さんに、お地蔵さんをプレゼントしたいんだけど、受け取ってくれる？ と。2007年に、向こうもすごく喜んでくれて、先ほども先生がおっしゃったいきさつもあったんですが、正造さんの分骨してる一つの雲龍寺さんに奉らせてもらいました。そのときも参治さんが一緒に行き、歌ってくれて交流しました。

来年、田中正造没後100年になるんだそうです。今年百回忌。2007年の9月4日に佐藤真監督が亡くなってんですが、なんと田中正造さんの命日なんです。そういうこともすごく不思議な縁だなあと思ってます。で、来年没後100年に、足尾の石を漆山さんたちと拾って、安田の工房に運んであるんですが、この冬場の暇なときにお地蔵さんを彫ってもらって、あんまり大きな声でまだ言っちゃいけないのかもしれないけど、草倉銅山の縁のある場所に建立したいと思っています。公害の原点といわれている足尾と草倉、水俣と新潟を、お地蔵さんで結んだら、多分、環境と人間のふれあい館も大事だけど、なんか、お地蔵さんでも、われわれが死んでも、勝手につないでくれるんじゃないかなというふうな気がしてもくろんです。まだほんとは、どうなるか分からないんですが、でも、大体あそこがいいねと今、場所の選定とかしています。

患者さんとうまく付き合うか、患者さんが喜ぶネタは、そんな簡単ではないですけど、例えば今年は、なぜか阿賀のお地蔵さんのお参り客がすごく大勢で、東京からも大きな観光バスで来ました。村の人たち、みんなびっくりするわけですよ。それで、す

ぐハンドマイクで、「ここが有名な…」と始まるんですよ。だから頼むから、それ、やめてくれって。私が立ち会うときには、とにかく、ちょっと待ってよ、あなた方は、環境問題で正しい行動だと思うかもしれないけど、経過を聞いてからにしてよ。やっとここに建てさせてもらったんだから。あなた方の都合で、正しいと思ってるかもしれないけど、村の人はまだ半分以上が迷惑だと思ってるんだから。その中でも、いろんな差別があるわけでしょ。その唯一の絆をこのお地蔵さんに託してるんだから、そんなことは…「ほら、旗野さんが言った通りだ。また水俣の運動のネタにしてる地蔵さんだけでも、日曜日なのに朝から大きなバスで来て、スピーカーでなんか言って」なんて言われてるんですね。で、強引に土手へマイクロバス突っ込んで、壊したりとかね、それはほんとに気を付けなきゃなんない。なんで看板がないのか、高速道路から案内板出せとかですね、どんどん、そんなふうになっちゃって。お地蔵さん、やっぱり村の隅っこにこっそりあるべきだし、尋ねて行けばいいじゃないですかね、分からなかったら、というふうな気がしてます。

大熊 うん、だけど、お地蔵さんに水掛けたいって人がいてね。この敷地の家に水もらいに行ったりして、これも迷惑なんですよ、その家にとったらね。その、水掛けたいっていう気持ちの人は、それをいいことだと思っているから、なかなか難しいんですね。だから今度は、横に井戸を掘らないといけな。ハハハハ。まあ、お地蔵さん一つ作っても、こういう問題がある。けども、これでやっぱり僕は少なくとも500年は、この話をつなげられたなと思うんですよ。どうせ風化してきて、ポロポロになってくるだろうけども、この石しっかりしてるから、4~500年は、もつだろうというふうに私は思ってますけども。そうやって、この物語をきちんと伝えていくってことがやっぱり大事なのかなと思います。ただ、環境と人間のふれあい館は500年もたないな、ちょっと。ごめんね。

遠藤 またこの、お地蔵さんが向き合ってるっていうエピソードがいいですね。

旗野 これもたまたまですけども、建ててから気付いたんですが、水俣に送った、百間の排水口の前、埋め立て地のところに建てたお地蔵さんは、その、排水口に向けて建てたんですね。そしたらそれは東のほう向いて、そのまんまたどると新潟のほう向い

てるんですね。それで、阿賀のお地蔵さんは、川に向けた。それは西のほうで、ずうっとたどると水俣のほう向いてる。これって、お互いに見詰め合ってる兄弟地蔵って言えるんじゃない。なるほど、これでまた物語ができる。予測しないいい話が、ポロポロ出てくる。なんかこれって、やっぱりお地蔵さんのご利益っていうか、力なのかなあって。

大熊 そろそろあと15分なんで、会場から何かご質問なり、こんなこと言いたいっていうのがあったらいただきます。

遠藤 学生さんはどうでしょうか？ そちら、どうですか？ 旗野さんから、若い人からの声が聞きたいという…

学生 あの、今日、渡辺参治さんの話を聞いて、私もぜひ会ってみたいと思うんですけども、どのような機会に会えますか？

旗野 クリスマス近いから、クリスマスプレゼント代わりに、私、連れてってあげましょうか？

学生 ほんとですか？ お願いします。

旗野 多分、参治さん喜ぶと思う。

大熊 だから、なんか企画したら？ 参治さんの話を聞く会とかなんか。

学生 あ、じゃあ企画します、フフフフ。

旗野 正直な話を聞かせてほしいんだけど、この前、東京で『阿賀に生きる』を授業に使ってくれた大学があって、みんなしっかり感想文書いてくれるんだけど、その何人かがこれはやらせで、もっと普通に撮れば、水俣病らしい患者さんがいるはずなのに、演出でこういうふうにしてるんじゃないか。普通は水俣病ってのは、もっと悲惨で大変な患者さんがいるはずなのに、自分らで編集してこういうふうに、作ったんじゃないかとありました。小学校のときから四大公害裁判とか勉強してきたって。で、ずうっと自分らが勉強してきたのと、あまりにも違いすぎるって。それは映画がねじ曲げてるんじゃないかっていうふうな言い方。なんでテレビのニュースみたいに、普通にまとめることできないんだろうみたいな批判とか書いてあったんですよ。びっくり仰天で、でも、そういう見方もできるんだなと思って、目からうろこ。だからぜひ会って話してみたいなあと考えてたんですよ。私だって最初はそう思ってたけども、現実の患者さんから『阿賀に生きる』の世界を気づき始めたのに、だからちょっと怖かったし、びっくりしたし、そのままにしてちゃい

けないなど。もっとちゃんと案内して、話したいなあと思いました。つい最近の話なんですよ。わざわざ東京からね、新潟まで来てくれたのに。

遠藤 ありがとうございます。このぐらいで、じゃあ、皆さんほんとにありがとうございました。最後に一言ずつ、皆さんへのメッセージも込めて、先生方、お願いします。

旗野 じゃあ最後に、とにかく『阿賀に生きる』っていうのは新潟の宝物だと思ってます。水俣病をどうしたいのかっていうことから始まったんですけども、やっぱり、患者さんたちの生きざまそのものを見てほしい。もう、水俣の問題を越えてると思います。その具体的な話を一つだけ。

遠藤武さんは、舟大工で、もう舟作りやめてたんですけども、映画の中で奇跡的に作り方を体現してくださるんです。遠藤さんの家はアルミサッシなんか使っていない木造の昔ながらの窓ガラスなんです。で、隅が割れていたので一応大工の端くれだから、「遠藤さん、これ、吹雪入るから、入れ替えてやろうか？」って言ったら、「余計なことすんな」と。「これはちゃんと、朝顔咲くころになると、この窓からあいさつして、家の中で一輪咲いてくれるんだ。余計なことするな」って怒られたんです。え？そんな、嘘みたいなほんとの話と思ったんですが、実は本編のほうにも、ちゃんとカメラマンの小林茂さんが撮ってくれてます。ああやって舟作って、動けるようだけでも、四肢感覚障害だから、骨が出るほどやけどしても、気付かないんです。救急車で運ばれて、危篤になる。そんな人が、1年1回の朝顔咲くのをめどするような気持ち、まさに今良寛さんみたいな人なんだなあっていうことを、あの映画はたまたま撮らせてもらえたことから言ってもすごく、宝物の映画じゃないかなっていうことを私の最後の話ということで。ありがとうございます。

大熊 遠藤さん、最後、あなたが…

遠藤 はい。さっき旗野さんが、水俣病の人たちのほんとの姿を映すべきじゃないかって、学生たちが『阿賀に生きる』の感想に書いてきたっていう話を、私は笑うことができなかったです。それは、私も、番組を作ろうと思って水俣病患者の皆さんの中に入っていくまで、そういう気持ちは少なからずあったと思いますし、だからこそ、知らないっていうのは、ほんとに恥ずかしいことだし、怖いことだっていうのを実感しました。だから、私ほんとに、あ

の番組を作ろうと思わなかったら、どんな人間になってたろうと、うん。それまでの私っていうのは、今も、ろくなもんじゃないんですけど、もっとひどくて、人を肩書で見るといけませんけども、例えば大学教授で、こんなに柔らかい人がいるとは思わなかったです。大学教授っていうのは、「わたし」みたいな、そういう、踏ん返り返ってるような人ばかりが大学教授だと思ってましたし、でも、人と相對することっていうのは、肩書とか、そういうことじゃなくて、水俣病の患者さんもそうです、水俣病の患者さんとして見るんじゃなくて、その人そのものから、入っていきなさいいけないし、私もまた、1人の遠藤麻理っていう人間として入っていかないと、決して受け入れられることっていうのはなかったと思うんですね、うん。そういう意味で、すごくいろんなことを教えて…

大熊 遠藤さんが今の私はなかったって言ったけど、私もそうです。『阿賀に生きる』に関わって、私自身が随分改造されました。それは、亭主関白のひどい夫だったんですよ。やっぱ『阿賀に生きる』をやるようになって、今は洗濯もするし、お茶わんも洗うし、何でもするっていう、ハハハ。

(一同笑い)

大熊 『阿賀に生きる』に関わって、人間改造ができました。土木屋としても、ダムを平然と反対できるようになったし。ほんとにそういう意味では成長させてもらいました。ほんとに『阿賀に生きる』、ありがとうございます。

遠藤 はい。ですから、今日は参治さんに会いたいって、そういう声が出たっていうのは、すごくうれしいことだったし、あのう、旗野さんも、忙しそうに見えて暇ですので…

(一同笑い)

遠藤 ぜひ、積極的に遊びに行つて話を聞くと、何でも優しく教えてくれて、お酒も飲ませてくれますし、うん、大熊先生も一緒です。私も、もっと暇ですので、いつでも一緒に皆さんとお話をしたりしたいと思いますので、よろしくお願いします。本日は皆さん、お忙しい中、寒い中、どうもありがとうございました。

大熊 どうもありがとうございました。

(拍手)

第4回公開講座

阿賀野川流域から発信する

日時：平成24年12月15日（土）

会場：新潟県立大学 新学生ホール2階

ゲスト：朴恵淑（三重大学副学長）

山崎陽（あがのがわ環境学舎）

コメント：李佳（新潟県立大学国際地域学部助教）

司会：田口一博（新潟県立大学国際地域学部准教授）

司会 バスツアーから始まる公開講座の第4回、最終回となりました。バスツアーの成果が県立大学の学生によってパネルになって展示してございます。ぜひご覧いただきたいと思います。それから今回の企画に関する写真も展示しました。

今日のゲストは先日、環境大臣表彰をお受けになられたばかりの三重大学の朴副学長。四日市学を提唱されている先生でございます。われわれが考えています、新潟学、あるいは阿賀野川学というときに、四日市学ということを提唱されて、そしてチームワークで、これが重要だと思うんですけど、横に結んだチームワークで実践をされているのが朴先生でございます。

2番目はあがのがわ環境学舎からお越しいただきました、山崎さんです。

3人目は県立大学の研究の成果からのコメントを、開発経済学をご専攻の国際地域学部の李先生にお願いいたしました。

◆四日市学について

朴 私、朴恵淑と申しまして、韓国生まれ、育ちで、1983年、目指せ留学生10万人計画のとき日本にやっ



てまいりました。筑波大学でドクターを終え、アメリカのヒューストン大学に客員教員として環境地理学＝地球科学で、大気汚染とか、温暖化とかのシミュレーションばかり4年やっておりました。数値ばかり見ていると人間おかしくなりそうな気がして、環境地理学という学問をつくって、人文社会的なものなども含めて、政策と環境教育に力を入れております。

私の専門は大気環境なので、四日市公害がどうなっているのかを見て国に帰ろうと、95年、三重大学に勤め始めたんです。3年ぐらいあれば、四日市ぜんそくから始まる公害問題は見えてくるんだろうという気持ちでしたが、今、17年になるんですが、いまだにまだ分かっていません。

四日市学はいい仲間がいて成り立ったことです。総合大学でありますので、うちは人文社会的なところ、私があえて人文社会的なところをやっていきいたいと思ってチャレンジし、法律、経済、それからいろんな地理学の仲間がいたということ。法学部で、まちづくりが研究できる人と、それと生物資源学部では物質の輸送シミュレーションをやってくれる人がいる。医学部に、公衆衛生学で公害から人がどう健康被害を受けるのかをやる先生がいた。そういう人たちと30人ぐらいのグループを作って、2001年、四日市学をつくりました。

こちらにも縁の深い方だと思いますが、原田正純医師という水俣学の先生と知り合って10回ほど行きましたね。それで、水俣学をつくる意義だとか、何を指すのかをそっくり勉強することができまして…ああ、誰が何を言おうとつくりなよと、くじけるなよという先生の教えるを四日市学の基にしています。

四日市学は11年目になるんですが、本が6冊、科学研究費補助金も取れるし、文科省の環境教育GP

もUNEP（国連環境計画）も取れるんですが、これはあくまでも見かけ上なんです。

大学ではいまだに、私を理事にさせた学長さえ、「四日市学はあまり言うなよ」ということを言っています。それだけ公害問題というものは奥深いものでありまして簡単にはできない。つまり、原田先生のような人じゃなければ難しいっていうんですね。決して偉い学者とかそういう意味だけじゃなくて、腹が据わっていなければできないことなんです。

四日市学ということをおんまり言うなというのが、行政も、商工会議所の人たちも、それから、仲間は心配しているのと、学長も、「四日市環境学とか、四日市何とか何とかとか、そういうのならまだいいけど、四日市学というようなものはあまりにもインパクトが強いんじゃないか」ということを言っているんですね。私の答えはいつも同じで、三重に外国人が来て、訳の分からないことをやって死んでしまう。私はもうその覚悟になっているので、「ただ、死ぬのは1人では死なないよ、みんなで一緒に死ぬよ」ということを言っている。ちょっと脅かしているんですね。皆さんから認知してもらえように頑張らなければならないというところで、最近一ついい方法が見つかりました。大学の学生に教えることは、大学の使命として誰も文句がない。そういったときに、偏ったことはやらない。それぞれの、あの当時の国はどういう動きだったのか、それから地方自治体がどうだったのか。それと「公害反対」と言いながらも、四日市コンビナートで仕事をもらって生活をつなげていくような地域住民に悪い判断ができなかったんだらうと、四日市学は非常に冷たい学なんです。

つまり、誰にも味方しない。非常に客観的なことを言って、学生たちがそれを学んだ上で、自分たちが社会に出て、あるいは大学在学中に何かが見つかったとき、そこをきちっと伝えるような考え方やプレゼンテーション能力や、人を説得する能力をアップしていくような手段として使っているのです。

四日市学は共通教養なんですけれども、10個の主題別に人文社会的、自然科学とか分かれている中で、持続発展教育（ESD）をつくり31科目を入れています。だから、何学部に入ってきた学生でも、特に1、2年生のときには、ここで、31科目だから、36単位が取れるわけなんです。その中12単位取った人に学長が自ら、修了証書をあげる。ただお勉強だ

けじゃ駄目。インセンティブと、それは国内と国際、どちらでもいいと。それから、PBL（Problem-Based Learning）セミナーで4単位なんですけど、自分でものを探して解決し、プレゼンまでしていくようなことを、1週間に4時間もある、そういうことをクリアしなければ、12単位の中のパッケージにはならない。

三重大学は学部生6,300人で、大学院プラス200人、留学生を入れると300人おります。学部生のうち4,500人がチャレンジしています。その中で、学長から修了証書をもらうのが約20人です。ハードルが結構高いですが、見事に1年生でもクリアする学生もいます。こういう形で教育課程に食い込んだ以上、四日市学に関して、外が何を言おうと、教育カリキュラムとしては問題がない形にしております。

もう一つが外圧の活用です。平和と人権と多文化となんでもありますので、ユネスコスクールに登録しちゃったんですね。ユネスコの動きをいち早くキャッチできて、うちの動きもユネスコに発信をしていく。発信が大事なんですね。そうなってくると、国連から三重大学は、ユネスコスクールの環境教育として四日市学をやっていると守られることになる。私は韓国人なので、韓国環境省と文科省のファンドを取っています。だから、韓国が支援している私を下手に触ったら国際問題になると、自分の身も守りながら微妙なバランスの中でやっているんです。

恐らく、皆さんがこれからつくろうとしていらっしゃる新潟学、阿賀野川学はすんなりいく場合もあるんなハードルがある場合もあるんじゃないかなと思っています。そういったときに、どういうことを自分の味方にしながらやっていくのか。水俣学だって、原田先生がこの前亡くなった跡を若い方々がたくさん引き継いでやっているんですけれども、果たして原田先生がやっているときのようなインパクトのある動きができるかはこれからなんだと思っています。

◆四日市と阿賀野川を結んで

不幸な過去のことを今に生かして未来に伝えるということは、生易しい話ではないということははっきりしているんだと思いますが、道はたくさんあるということも併せて、四日市学がどういうものか、

紹介します。

四日市公害の裁判が1967年から5年かけて72年に決着つきました。原告として裁判をした9人の患者さんで生存している語り部野田之一さん（80歳）や工場員の澤井余志郎さん（84歳）が高齢化し、跡を誰が継ぐのかは大きな課題です。大学の若い人たちにも託したいと6月の環境月間に写真展を開催し、2人が出てきて学生たちに語りました。このときに約300人、押すな押すなの形で語ってもらいました。学長は非常に複雑な気持ちでこれを認めるべきか厳しい選択だったんですが、いろんなメディアからも来ておりましたが、押すな押すなを見てくると、まあ、あいさつもせざる得ないです。

四日市公害というものは、第1コンビナートの六つの企業が生まれました。そのうち三つが三菱化学系列で、中部電力、昭和シェルと石原産業。そういう物々しい大企業を相手にして、地域住民と三重県立大学公衆衛生学研究室の吉田克己先生が味方になって、四日市裁判はうまくいっているわけなんです。

米本清裁判長は裁判が終わった後、すぐ亡くなりました。左陪席の方も亡くなって、右陪席が四日市公害の判決文を直接書いた後藤一男さんで生存者だったんです。何回も何回もコメントをもらいたいとラブコールしてもなかなかうんと言わなかったんですが、2004年6月に約半日ぐらい聞かせていただいて、その中で一番印象的なことが、なんでこういう、ある意味では、裁判官には不利かもしれない、原告側勝訴判決をしたのかを聞いたときに、「自分には子どもがいたと。その子どもたちにこのまま残すわけにはいかなかった。」もう一つが非常に感銘を受けたんですが「四日市公害裁判は、一審で終わらないだろうと、最高裁まで行くだらうと。そうなってくると、ほかの人だったら、まあ、ちょっと適当にやったかもしれないけど、だからこそしっかりと確実にやりたい。汚染物質が風に乗って運ばれるようなところまで勉強して判決文を書きました。」ということを書いてくれました。

原田先生に四日市学が地域に根差して、その遺産を世界に発信する貴重な、重要な核になるぞというインタビューをしたのが2005年でして、その後も、年に1回ぐらいは何回も、四日市学という講義には来ていただいていた。

約6億円で、2012年3月に環境・情報科学館、英語ではMEIPL (Mie Environmental & Informational

Platform) を作りました。私は怖いイメージのものじゃなくメープルシロップ作るかわいらしい木の名前にして、深刻なことを考えるというような形にして。ここを拠点にしているんです。学生がいつでもやっていけるオープンな場、四日市公害を世間に出すプラットフォーム。それから、国際協力関係は、ここに来いよというような形でやっていたら、県が作った四日市にあるICETT（公益財団法人 国際環境技術移転センター）の仕事を奪っているんじゃないかっていう話なんです、一緒にやりましょうと話をつけました。ここが大事なですね、どこかを傷つけることじゃない。互いにウィン＝ウィンになるような三位一体のもので、困ったら来てくださいと。だけど、この主役は誰かっていうと、学生が主役になります。ISO学生委員会というところに、約200人おられます。それと、ユネスコスクールのところで50人とか、常に、100人、200人の学生は、常にここを拠点としていろんな活動している場です。

◆四日市公害

1960年代に日本列島は公害列島といわれるほど、あらゆる環境問題が起きました。水俣病、今私たちがいる新潟水俣病と、富山のイタイイタイ病の三つは水にかかわるものが、有害物質を流して、それで魚とか食べた人たちが病気になっているということだったんです。四大公害のうち、唯一、四日市公害は空気が汚れて、ぜんそくになったことでした。

実験室の中ではなく、実際にこれだけ大きな問題が起きてやっているのは日本だけのことでありまして、ここに、四日市の場合には、ただで私たちが吸っていると思っていた空気でさえ、汚れたら終わりなんだよっていうことを世界で初めて患者さんが出て、あまりにも苦しいので、自殺する人まで出てきているということは、大変大きな衝撃でありました。

今、水蒸気がほとんどで、大気汚染物質はほとんど出してないんですけども、一昔前は全部黒い煙だった。最悪なことは、四日市コンビナートが埋立地であって、そのすぐ裏、目と鼻の先には人が住んでいました。そこで、もろに硫黄酸化物、窒素酸化物を吸った人たちが、ぜんそくになっている。ここで病気が起きないということはありません。でも誰もそれに気が付かなかったし、認めたくはなかったというところに、四日市公害の悲劇が起きるわけな

んですね。年寄りとちっちゃい子どもが免疫力が小さいので、ぜんそくになりました。海だって油と硫酸が浮いていて、魚も住めないような海だった。

今はどの国に行っても、コンビナートと人が住んでいる間に緑を増えたり、ある程度距離を置くんですね。距離を置いても、汚染物質って軽いもんですから、遠くには、2,000キロも風に乗って運ばれるので、1キロ2キロ離れているところではなんの意味もないかもしれないけれど、コンビナートと一般に市民が住んでいるおうちとが隣り合ったまままちづくりが進んでいるということは、いかに大変な問題を含んでいたのかということが分かります。

四日市コンビナートの周りには、1カ月に1キロ×1キロの単位面積当たり15トン、つまり4トントラックで4台近くの汚染物質が落ちて、正常に暮らす人がおかしいというようなバックグラウンドを持っていました。ぜんそくだとか気管支炎だとか、肺気腫という、呼吸器系の病気になっている人の割合を見るだけでも、10キロ、20キロ離れているだけで四日市ぜんそくを防ぐことは可能だったかもしれない。汚染物質を取り除くのか、逃げるか、どちらかしか方法がなかったということになります。

あの当時、四日市港に1億円以上に水揚げがあったんですけれども、魚も異臭魚といって、「魚を油のしょう油に付けて食べるようなにおいだった、味だった」って言ってまして、一切それが駄目になっちゃって、行き場がなくなった方々がどこで働いたかという、コンビナートで働いた。そういう形なので、逃げようがなかったということになるんですね。

環境問題の怖いところは、弱い人にしわ寄せられることなんです。これはものすごく大きい問題で、例えば、三菱の社長も、四日市のああい漁師の町に住んだかというところじゃない。東京に住んでいます。だから、結局、四日市は、お金がたくさん入ってくるんだって喜んでいただけれども、そのお金、ほとんど本社があるところに行っちゃって、法人税ちょっとしか落ちなくて、残ったのは汚染というイメージと、人の病気と、まだいまだに自然が戻っていないということ。野田之一さんは四日市は結局損したという一言で表現しているんですね。

1970年、いよいよ公害防止法が動き出すんですけどコンビナートは汚染物質を減らすか、営業停止するかどちらかというものすごく強い規制が入ってき

ます。

当時使った燃料の使用量と汚染物質の濃度を見ると、やればできるということなんです。燃料の使用量はそんなに変わってないのに、大気汚染濃度は急激に下がっている。日本は経済が優先だったから、環境は、お金もかかるし、厄介なことだから、やりたくないんだって判断をしたからであって、環境と経済はばらばらではなく、共に生きる運命共同体だというふうに思っていたならば、公害は起きなかったんだってわかります。防止はやればできるんだってということも四日市公害から学んだことであります。

最近、環境基準値をはるかに下回るような形で、きれいな空、きれいな海は戻りました。ただ、自然はまだ戻っていません。自然が破壊されるには数年しかかからないけれど、元に戻るのには100年かかるか200年かかるか分かりません。四日市公害は、大気汚染だけじゃありません。大気汚染物質が風で運ばれて、水で落ちてきたら再び地下水とか通じて汚染されたものが戻るんじゃないか。私はモデルを考えてみたんですが調べてみたら30年、40年で戻るんです。地下水の流れは結構早くて、ちょうど今、再び戻ってくるんですね。かつては大気汚染だけなんとかなれば良かったかなって、みんな思ったんですが、自然って不思議につながっていて、今回は、水で汚れが出てきて、もう既にハマグリとか二枚貝は採れなくなっています。その理由は、あの、汽水域のところで、海水と地下水がうまく代わっていくところに二枚貝が生きるわけなんですけれども、地下水が汚染されているのが流れていくと、貝は生きていられない。今、シジミ、それからノリ、それともう一つハマグリというのはほとんど採れなくなりました。なかなか科学的には言えないんですけれども、既に大気汚染から水汚染につながってきたんだということなので、四日市公害が解決されました、ばんざいというには、まだまだ分からない。当面、何十年か100年かは分からないけどかかります。だから、研究は継続してやっていく必要があるんだろうと思っているんです。

◆四日市学の目標と三重大学の取り組み

四日市学は、法制度、政策、技術、ビジネス、企業の社会的責任なんです。一番肝心なのは「賢い

人を育てよう」です。ものが言える人。税金は払うけど、口は挟まないというようなことじゃなく、きちんとやっていけるような人が欲しい。

四日市公害もよく考えてみると、環境と経済は仲良い兄弟みたいなものであって、それをどういうふうに変えていくのかという格好のいい材料なんですね。だから、阿賀野川で起きた新潟水俣病に関しても、同じような考察が論理的に組み立てられるんだろうなと思っております。

そういう話をしたら、原田先生は、水俣学を超えたねと言って笑っておりましたが、まだ考え方がこうなんだってことです。それで、私たちはあらゆるところを全部仲間になっているんですね。社会を構成するようなファクターは、多分こういうものだと思います。どこの地域も多分見ているでしょう。三重大学ではMEIPL館オープンしたからおいでと。だから、新潟県立大学もこの場になっていて、これで認識共同体（運命共同体はちょっと濃すぎるんですね。共倒れしては困るんで）という形になってくる。国際関係論でよく使われる言葉なんですけれども。普段は自分の専門的なこと、例えば、生活するのも専門、教えるのも専門、学ぶのも専門。この専門という言葉にあまりこだわらないでいただきたい。自分がやっているところ、きちっとやっている人たちが一緒に集まって、自分が役割分担をしていく。ただ、1+1+1+じゃない。1+1+1+1+1が100ぐらい集まったら、このパワーというものが、1万とか1億とかそれ以上にパワーアップしていくので、ここをみんな、ウィンウィンウィンウィンにさせるようなことを考える手段があるとすれば、認識共同体が地域を巻き込んで回っていく、そういうことが一つの四日市学の基本的な考え方としてあります。

日本には政策立案をやっていく、アドボカシー的なNPOが少ない。外交音痴な日本にとって、環境を基軸とした外交としたようなものはアジアに通用するよという形で、人を育てて人を当てにして、お金はある程度突っ込めば、いろんな国の環境も良くなっていくと、結局、日本との強いきずなで結ばれるわけでしょうから、日本にもそのメリットが戻ってくる。相手を倒して、自分が生きる時代は終わったので、相手を生かして、自分も生きるという、ウィンウィンウィンウィンというような発想で考えるのが、一つ、四日市学ができたのかなというふうな気

がします。

三重大学は世界一の環境推進大学にということをして、2年前学長に言わせました。そのときに、学長は「日本一になってないのに、どうやって世界一なんだ」って言いました。2年前に、エコ大学ランキングというのがありまして1位になりました。それで学長も何も文句がない。そのあと、あらゆる賞を全部取っちゃうという形で、四日市学を生かすためには、外からの外圧を活用するしかないの、それは賞を取ることにしかない。あるいは国連のところとか、国際的なものを利用することになるんですが。まあ、あらゆる賞。もう、全部取りました。

で、そういうような形であって、これと少しずつ、みんなから変わっていくと。そこで、学生が主役といっても、学生は気まぐれで、昨日まで、できるって言ったのに、今日できないというふうに、平気で言ってくれるんですね。

それはなぜかという、学生が悪いのではなくて、先生が悪いからなんです。見せないからなんです。見える化をしないからなんです。口でいくら言っても分からないので、ここは基準を作ったんですね。ISO14001ってものづくりのものなんです、大学人づくりですから、ものづくりを人づくりに切り替えれば簡単なんです。

で、やることは簡単。PDCAサイクルを回せばいいんです。計画立てて、実行して、評価をして、それで見直しをする。これはわれわれいつもやることなんです。新しいもの、一つもありません。ここの評価のところに学生を入れるんですね。

三重大学生協は月間20万枚レジ袋を買って配って、年間70万円のお金がかかりました。それをうちにくれという形にして、180円のエコバッグを新入



生に配っているんです。だから、レジ袋は買わなくても済む。その分は新生入生などに回してあげると。自転車を4年間使ったら捨てていくものを全部持ってきて、直すものは直して、新生入生にただで100台近いものを配っているし、家電製品もみんな、家電リサイクル法で、お金を払って処分したくないからいろいろ捨てて帰ります。自治会の会長、毎年怒ってくるんですね。そうならば、みんな持ってこい、うちが全部受け取るっていう形にして、大体200近いものが毎年来ます。それを、新学期、町の電気屋さん、ボランティアで点検をしてもらって、直すものは大学から少し出してもらってみんなリユースさせているんですね。

三重大学は年間240トンの紙をお金払ってごみとして出していたものを、トイレットペーパー作っている会社と交渉して、大学だけでは足りないからいろんな会社や県と話して年間約600から700トン出すと大体30%以上の、年間使っているトイレットペーパーがただで戻ってきます。年間450万円以上のトイレットペーパー購入費が、3分の1、150万ぐらい浮いたので学生の活動基金として還元しています。システムが回り始めたら、面白いほど回っていくんですね。

三重大学の問題は、英語ができないんです。で、英語ができないんで、どうやって海外に出るんだっていうと、29カ国81大学と連携組んでいるんで、その大学を経由して中小企業や大企業のところで、1カ月ぐらいインターンシップをして帰ってくると2単位。日本語で十分ですね。相手の企業は、日本語ができる人が来たならば、日本語の社員教育ができるわけでしょうから。国連のCOP10という生物多様性の会議には、アジアの200人近い若者を連れてきて1週間合宿させて、それで本会議アピールしていくような形です。

何か環境にいいことをやったら自分は学籍番号を携帯で出し、サーバーでエコポイントとして貯め1グラム二酸化炭素を減らしたら1円っていう形にする。半年頑張れば、4,000～5,000円ぐらいがたまります。生協から80万円を出してもらって、ご飯を食べてもいいし、ものを買うときに、ポイントで換算していくと。80万出したけれど、結局元に戻って、1年後に回収できるので、生協も損する話ではない。で、これを私たちは、いろんな地域にも普及していきたいなというふうに思っております。

す。

意識を変えるだけで、電気代で夏場、冬場、3カ月ずつで11.6%、4,400万円が浮きました。その1,000万近いものをもらいたいと思うんですが、大学はそれはくれません。

三重大学が、四日市学というものを、ただ単に公害をなんとかするということの、過去をほじくするような学問じゃなくて、未来に向けて発信をしていく、しかも主役は学生という形で、あらゆる手法を使っていく。みんなで頑張る三重ポイントで、10%とか減らしたら、元が取れると。3Rでゴミ問題が解決すると。それと、四日市公害という、自然を汚したものは誰だ、関係したのは誰だということで、四日市学が全部その根底にあります。

2014年にユネスコ会議が、名古屋で開催されます。持続可能な教育(ESD)のための10年間という総括で、ここに向けて、四日市学が一つの柱として、今世界の12カ国300人も集めていこうと思っています。四日市学が世界に向けて、また大きく発信できるようなチャンスが来るので、環境教育で学生が主役になるんだよということで準備しているところです。学生は大体、今のところ、200人ぐらいが入れ代わり立ち代わりで準備を始めています。

以上、四日市学が世界に向け発信をするということのノウハウというか、私たちの戦略というものを話をさせていただきました。ありがとうございます。司会：ありがとうございました。

では、続いてあがのがわ環境学舎の山崎さんからご報告をお願いします。

◆あがのがわ環境学舎の活動

山崎 あがのがわ環境学舎の山崎です。朴先生の話聞いて、われわれがやっていることといろいろ共通点があると聞いていました。われわれは阿賀野川流域で、地域再生という非常に変わった仕事をやらせていただいております。

一番最初に始まった地域再生の取り組みが「阿賀野川え～とこだプロジェクト」という事業、正式名称が、「阿賀野川流域地域フィールドミュージアム(FM)事業」と言います。新潟県が始めた事業なんです。何を参考にしたかという、「もやい直し」という20年以上前に、水俣市で始まった地域再生の取り組みなんですね。

水俣市は非常に深刻な状況に置かれていて地域再生をやらざるを得ないという状況に追い込まれてスタートしました。「もやい」は、船と岸をつなぐ綱のことです。公害で壊れた人と人のきずなとか、あるいは人と自然の関係をもう1回紡ぎ直しましょうという取り組みです。新潟県はそれから20年以上たった新潟水俣病の40周年の平成17年、新潟県知事のもやい直しを図りながら、水俣病の教訓を伝えていって、ふるさとの自然を二度と汚さない「ふるさとの環境づくり宣言」がきっかけです。2年後の平成19年から新潟版のもやい直しとして、「え〜とこだプロジェクト」がスタートしています。

具体的な取り組みは環境学習、イベント、情報発信の三つが基本的な事業です。環境学習は、公害関連プログラムを作っています。イベントは、パネルを1年に1回作って、地域でパネル巡回展や地域再発見講座を行っています。情報発信では「阿賀野川え〜とこだより」を年に数回発行しています。

そうした表面上の事業よりも地域再生で重要なのが、作品づくりと「ロバダン」です。ロバダンとは炉辺談義の略なんですけども、炉辺を囲めるぐらいの少人数で、本音を語り合う寄り合いです。水俣市のまねしたわけじゃないんですけども、似たような取り組みを行っているんですね。で、地域再生を行う作業は大体みんなこういう似たような取り組みを行っているんですけども、こういうふうな少人数で集まって、流域のさまざまな方々の本音とか意見を聞く会をこれまで100回近く行っているんです。自治会とか、地場産業とか農業、環境団体の方々とか、地域づくり団体の方々、ほんとにさまざまな立場の方々から、地域の人々の本音を聞き出す。自由にいろんなことをお話してくださいという形でやろうと思っています。その中で、当然新潟水俣病に関するさまざまな本音がいろいろ出てくる。そういったものも、環境学習とかイベントのいろんな事業に生かしています。

ロバダンをやっていると、地域の人たちと仲良くなって、昔の貴重な写真とか資料をいただけるんです。それらを使って紙芝居、パネルですとか、映像作品づくりをしています。そして作品を事業に生かし、ロバダンの場で見せていくことで、いい循環をつくり出しているのが、地域再生事業の全容です。

ただ、これは、新潟県さんが始めた委託事業で、われわれはそれは受けているんだと思うんですが、

そのお金はいつかなくなっていくわけです。これを経済的に自立して継続させていきたいとFM事業の民間の関係者が集まってつくったのが一般社団法人あがのがわ環境学舎です。

あがのがわ環境学舎では環境学習を運営して、全国からいろんな人々を迎え入れることによって経済的自立の道を探ってずっと継続していこうと考えています。

◆地域との接点づくり＝エコミュージアム構想

5年ぐらいこれで事業を進めてきたんですけど、実はどうしても足りない部分が出てきました。どういうことかという、地域に賛同してくれる人はいっぱいいるんですが、一緒に仕事をするのができないんです。公害に向き合うってという事業なので、地域の人にとって共通点がないわけです。何とか地域の人々と一緒にやれる共通の事業をつくろうと「公害の経験を乗り越える『阿賀野川エコミュージアム構想』流域再生プロジェクト」事業を立ち上げました。全国からいろんな人々が流域を訪れたときに、公害を経験したからこそ、今現在、阿賀野川流域では、いったいどんな取り組みをやっているのか、あるいはどんな新しい地域づくりを始めているのかが問われるんじゃないですかね。その際に、こういうふうな取り組みを地域の人々はやってますよ、新しい取り組みをやっていますよっていうふうなものを、地域の人たちと一緒につくり上げていくのが、この阿賀野川エコミュージアムです。

ここから、今まで水俣病の問題にかかわってくれたことがなかったような地場産業の方々とか、旅館の温泉組合の方々が、積極的に一緒に事業をしてくれるようになっていきます。会場内で準備が進んでいる蒸しかまどの小田製陶所さんも、このエコミュージアムという事業で、一緒に仕事をしている仲間の1人です。

われわれはFM事業とエコミュージアムを車輪の両輪のようにして、最終的には阿賀野川流域全体を、エコミュージアムの舞台にしていきたいなというふうに考えているのが目的です。

司会：ありがとうございました。

李先生、お二人のお話を受けて、コメントをお願いします。

◆開発経済学からのコメント

李：私は開発経済学を専門にしているんですけども、実は4、5年前に、郵便貯金の資金支援をいただいて、中国の乾燥地域でNPO活動として農地開発問題と地下水の水位低下問題について取り組んでまいりました。そのプロジェクトで、環境問題の深刻さを非常に認識するようになりまして、最近では乾燥地域の水資源問題、特に水管理政策についても研究をしています。

開発経済学というのは、経済学の中で、とりわけ途上国の経済を研究する学問です。今日は、その視点から話をさせていただきます。

朴先生のお話の中では、原田先生の言葉も出ておりました、四日市学が、負の遺産を世界に発信する重要な学となるという話、さらに、教育を通して世界発信すると伺いました。私は、その話の延長線として、何を発信するのかという話をさせていただきます。

日本で環境問題という言葉を使ったら、恐らく、地球温暖化とか気候変動とか生物多様性の減少とか、そういう非常にグローバルな話が出てきますね。確かにそういうような問題も大切で多国間の国際協力や、あるいは政府の対話を通して解決しなければならない。しかし、私のふるさとでもそうなんですけれども、途上国に行ってみると、環境問題と云ったら、家の近くの川にみんなごみを捨ててます。悪臭が来て困っています。上流にある、例えば化学肥料を作る工場、あるいは製紙工場がきちんと処理していない汚染した水を垂れ流していて、生活が困っています。その水を使って農業をやっていたら、畑の作物が枯れてしまった、そういう話をよく耳にします。つまり、環境問題というのは、多分、地域によって、経済の発展の段階によっては、考え方も違ってきます。途上国、特に中国あるいはASEAN諸国とか、経済が早く成長している新興国にとっては、環境問題は、実は産業公害問題というような認識は一般的です。では私たちの暮らすアジアでは環境ガバナンスはどうなっているのか。

環境関連の政府機関や法律がいつ策定されたのかという指標を使って見てみたら、日本は大体、1960年代末期とか、1970年代の初頭には環境ガバナンスが認識され、確立されているように見えます。けれどもほかのアジアの国々を見てみると、も

う少し遅れています。もちろん完全に経済発展の段階的に順番的になっていないんですけれども、大体、高所得国になると環境ガバナンスを意識するようになっていきます。比較的所得の低い国だとやっぱり少し遅れます。現状では、日本はアジア諸国の中で最も早く環境ガバナンスに取り組んできた国と思います。

じゃあ、途上国、例えば、私の出身国の中国で考えれば、産業公害問題、非常に厳しい状況なんです。経済学で、この産業公害問題の対策を論じるときに、一般的には二つのアプローチがあると考えています。

一つの方法は直接規制といって、例えば汚染している企業に罰金を課したり、行政処罰をしたりとか、そういうような、まあ、法律的に定められた基準を施行するというアプローチなんです。

もう一つのやり方は、市場経済のメカニズムを活用するっていう手法。つまり、汚染する工場には税金を課したり、環境に優しい生産工程を導入している企業に減税したりとか、そういう経済インセンティブを出して、企業をより環境に優しい生産過程に誘導するっていうようなアプローチなんです。

環境経済学とか経済の教科書にはこういう話は載っているんですけども、途上国の現実を見てみると、うまくいかないんです。なぜかという、政府は既にいろんな政策目標を持っていますよね。環境保全も政策目標の一つであって、貧困削減も経済成長も政策目標です。途上国だと、政府は結局、所得向上とか、経済成長を優先してしまいます。それを優先してしまった結果、環境問題が発生してそれに取り組むようになります。

日本は、どういう経験を持っていて発信できるかというと、朴先生の話の中でも出ていました日本の



高度成長期に経験した、四大公害問題の産業公害問題を克服した経験を途上国向けに発信する必要性があります。でも、そのときにどういうふうに発信するのか、あるいは何を経験として提供するのか。

国際支援とか国際援助とか国際協力って考えると、最貧国、例えばアフリカ諸国に開発資金援助という話がすぐ出てきます。産業公害問題を克服するためには、資金の提供も大切です。でも、例えば中国とかほかのアジアの新興国の状況を見てみると、それほどお金に困っていません。お金に困っていないけれども、その割に、技術、環境保全技術が不足しています。

例えば四日市ぜんそくの原因となった硫黄酸化物の対処技術とか、水質汚濁、あるいは重金属汚染への対処の技術提供が非常に重要です。

そして最後に、もう一つ日本の経験というのとは何かというと、地方自治体に蓄積されたノウハウ。どういうふうに問題解決に向けて、地方自治体は取り組んできたのか、そういうようなことが非常に大切。ソフト面なので無視され、忘れられたりしてるんですけども、ソフト面の知識の移転が非常に大切ではないかと思います。人材育成のほかにも、こういう視点から日本の経験をぜひ途上国向けに発信できたらうれしいと思います。

司会：小田さん、準備いいですか。ここで休憩します。ご飯が炊き上がっておりますので、阿賀野川の恵みについて官能検査と調査をよろしくお願いしたいと思います。



蒸しかまどと炭で炊いた阿賀町上川産「東蒲幻米」を試食

◆流域とのコラボ

司会：それでは再開します。今、ご飯炊きをやってくださいました小田製陶所の小田さんから一言お願いいたします。

小田：皆さま初めまして。阿賀野市で陶管製造業、焼き物の窯元をやっております小田製陶所の小田と申します。

弊社は現在は主に新潟県のは場、田んぼの排水を良くするための素焼きの陶管を製造、販売をしています。明治6年創業当初は水がめ、かめ作りを始めたんです。なんで阿賀野の安田でやったのかなと調べてみますと、まず良質な粘土があった。阿賀野川の水が流れていて、北前船貿易の拠点にもなった。川舟があって、行ったり来たりでき場所も良かった。職人は愛知県の常滑から来たが、浜から風が吹いてくる。われわれのふるさとダシの風の特に強い地域なんですね。焼き物をする上で、乾燥するのによほど空気ではなかなか乾かないですね。常に風も流れて、乾燥に効果的です。

1代目は川舟から北前船に乗って、福井、富山までを中心に販売しておりました、その当時にとって、この蒸しかまどは、画期的なものだったんです。蒸しかまどは、かめ作りの技術がなければ、製造できないものだったんですね。蒸しかまどを私が初めて見たのは、小学校ぐらいかな。工場の脇に、なんとも不思議なつぼがある、なんのためのつぼなんだろうと思ってました。祖母が94歳で現役なんですけれども、信州の紡績工場に奉公に行っていて、家族にご飯を炊いていたのが、この蒸しかまど。うちにあったものが、どのように使うのかというのが、実は私のおやじでも知らなかったんです。造って販売はしてますけど、自分のうちで使ってなかったんです。というのは奉公先の旦那さまとか富裕層の方が使っていたものです。一般では土釜に羽釜載せて、ご飯を炊くようなものが一般的だったんです。

70年前に造った商品なんですけど二つ残ってました。1個は、長岡の新潟県立歴史博物館に寄贈しましたが、もう1個、これを炊いてみましょうということで、おやじも知らずにいたものですから、「ばあちゃん、これ、炊いたことあるかもしれんけど、1回教えてくれないかね」ということで、「いや、こうやって、こうやって」というふうに、私によく説明していただきまして。炊いたら、非常にお



いしいご飯が炊けたんですね。これはなんかイベントのときに、われわれの会社のアピールとしていいんじゃないかなと、この阿賀野川が流れて、今までやってきた歴史の説明にいいんじゃないかということで、まあそれでちょっといろいろとやっているうちに、あの、やっぱりお客さまのほうから、「ぜひ、あれ、復刻させてくれないか」と、「これ、自分も欲しいんだけどやってくんねえかな」という声がありましてですね、あがのがわ環境学舎さんといろいろ取り組んでいるうちに、そういうお客さまも大勢現れまして。で、この春に復刻させることになりました。

で、われわれがですね、今後こういったものを使ってする前に、炭で炊けるんですけども、環境にもいいものをこれからも取り組んでいって、昔の人のほうがおいしいのを食べていたという事実もね、皆さんに知ってもらいながらアピールしていきたいと思います。どうもありがとうございました。

田口：お米の名誉のために申し上げますが、炊く前の処理がちょっと悪かったですね。渡邊先生、コメントを。

渡邊：地域連携運営センターの運営委員の1人の渡邊と申します。私の所属は、人間生活学の健康栄養学科のほうにありまして、専門は栄養科学です。お米のたんぱく質の機能につきまして、十数年前から、新潟大学農学部・医学部の先生と共同研究をしています。

昨日、田口先生から、お米をとぎたいんだけど、ざるとボールが欲しいと。で、おいしいご飯の炊き方を知っていらっしゃるのかなと思ったんですけども、お任せをしておいたんですけども。昨日から研いでつけておいたということで、せっかくのお米が残念な…もう少しおいしい研ぎ方を、

ちょっとお教えすればよかったかなと今ちょっと思っているところで。まあこのぐらいでやめておきましょう。

田口：ほんとはですね、もっとおいしいお米で、例えば、こうやってですね、食べ終わった後に、この強い粘りで、お茶わんにちゃんとくっつくかどうか。せっかく小田さんに、うまく炊いていただいたのにこういうことで申し訳ありませんでした。

◆四日市学から阿賀野川への示唆

司会：後半は朴先生からコメントをいただきたいんですが、今朝こちらにお着きになってからすぐ、環境と人間のふれあい館にお出掛けになって、中の所蔵資料ですとか、周りの風景を少しご覧いただきました。そこでお感じになったこと、われわれへの示唆を含めてお話を賜ればと存じます。

朴：環境と人間のふれあい館には、恐らく8年前お邪魔した覚えがあります。そのときに感じたのは、これは決して悪い意味じゃなく、新潟水俣病の資料館という名前がなんでないんだろう。正直にそういうふうに思いました。

環境と人間のふれあい館というのを、よそ者が、タイトルというか、この館の名前を聞くだけで、新潟水俣病の資料館と思うのかなという思いがありました。で、今もその気持ちは変わってはいません。もうちょっと深くお勉強してみると、恐らく、環境と人間のふれあいという名前を付けた由来やいろんな狙いやいろんなことも分かるんだと思っておりますけれども、四日市はまだ資料館もないからなんとも言えないんですが、今の、環境と人間のふれあい館というのは、新潟じゃなくても、どこにでも付けようと思えば付けそうな名称かなという気持ちには変わりはありません。

それをどういうふうに思うのかなということに、恐らく、新潟水俣病の原点が見えるのかなという気がします。新潟水俣病の教訓を生かして、次の世代につなげ、世界に発信をしていくのかというのをよく考える必要があるかなというのが一点。今日お話を伺ったときも、まだもやもやっていう言葉は失礼な言葉なんですけれども、ちょっと分からないところがあるなというのが一点あります。

阿賀野川は、川の大きさと水量とか見ると日本一大きい立派な川だと私も初めて聞きました。私は支

流かなと思っていたんですが、大きな川であるということ分かりました。この川で何が起きたのかということ、どういうふうに伝えるのかということは、やっぱり考える時期かな。新潟県立大学にいろんな先生方がいらっしゃるんで、私たちがつくった四日市学のような、何々学ということをつけて、見える化していくんだらう。新潟学、阿賀野川学、それからそのほかにまた何々学ということ、川を見ながらすごく考えさせられました。

地元学というのが、一時期ブームでありまして、東北学、何々学、やたらいろんな学が多いんですが、特にこの地域で、何々学を付けてやって、県立大学が中心となって、いろんな政府機関と一緒にやっていくんだとすれば、なんで何々学なのかということ。決して、世の中の流れが、何々学がはやりだからということじゃなく、ほかの地域には、逆立ちしても得ることができない、マイナスだけでも、負の遺産を未来の正の資産に変えるためには、何々学でやるぞということ、いつ、どういうタイミングで、どういう位置付けでやるのかを、この、阿賀野川を見ながら、ずっと自分のことじゃないのに、ちょっと考え込んだことがありますよね。ぜひとも、この2点について考えていただくということはどうかなと感じました。

司会 センター長、一言ございませんか。

山中 学に何を込めるかっていうところの決断ってというのがすごく難しいと思うんですね。仮に阿賀野川学とした場合に、もちろん新潟水俣病の問題もあるんだけど、さらにその、歴史を振り返ると、蝦夷と、大和朝廷の関係で、阿賀という地域がどう採り上げられたとかっていうところまでも含んでいく。いろいろ考えるよすがになって、判断によってどのぐらい射程も変わってくるんだらうなと思います。



した。

司会 公開講座では新潟のことに考える、今年は阿賀野川流域をつないで考えるってやってきましたけど、ここで1個手を伸ばして、三重とはつながりました。こうやって横につないでいて、これからほかの輪をつないだ後に、中国ともきつとつながるんでしょうし、韓国ともまたつながるし、世界に伸びていくかなって感じがしております。

◆地域資源から人へ

司会 山崎さん、今までの環境学舎の活動から県立大学にこういうことをやってもらいたいって注文ですとかですね。感想でも結構です。お願いしていいでしょうか。

山崎 環境学舎でどういうふうに進んでいきたいかっていうふうなイメージといいますか、というものがあまして、阿賀野川環境学習ツアーというものです。公害だけじゃなくて、先ほどの小田製陶所さんが、あるいは安田瓦の地場産業もあると。あるいは、中流域の咲花温泉とか、上流域の麒麟山温泉や、最近は下流域の松浜のまちづくりをされている方々とか、漁協組合の方々と一緒に仕事ができるという状況になってきたんです。その中で、公害関連の環境学習プログラムと、その反対に、公害関連以外の流域の産業とか自然を体験していただく環境学習プログラム。そこに環境学舎と関係を築いてきた地元の方々がガイドとしてかわることになってくるわけです。プラス、先ほど食べていただいた蒸しかまどのご飯といった、流域から失われつつある郷土料理、この三つを組み合わせた、あの、旅行商品っていいですかね、環境学習、楽しむシステムを今作っています。で、これを今後、阿賀野川流域の中で運営できていければいいなというふうなのが、最終的なイメージなんです。

今日よく出てる、地域資源。面白いものがいっぱいあるよって言い方をされるんだけど、ほんとに大事なのは、その地域資源の向こう側に必ず人がいるんですね。地域資源を動かしている人がいて、その人とつながらないと意味がないんです。重要なのは、地域資源の後ろにいる人と、ほかの地域資源の後ろにいる人をどうやってつなげていくか。で、そこで意味のある仕組みを作っていないと、地域資源はあるだけでは機能していかないんです。

だから、県立大学がもし何々学ということで、今後、阿賀野川流域を進めていかれるとしたら、そういうところに少し目を配るといいますか、意義のある仕組みがどうやったらできるだろうっていう観点、人を重視する観点でちょっと進めていっていかれたらいいという方向性があるかなと感じました。

司会 人づくりの1番は子どもたちです。植木先生は福島の実地、南相馬を訪ねて子ども達を支援されているのですが、阿賀野川流域でも、人づくりっていうことになってまいりました。一言、子どもたちにどうやって伝えていくのか、コメントいただけるでしょうか。

植木 子ども学科の植木でございます。南相馬の子ども支援プログラムをずっとしておりますけれど、やりながら少し思ったことはですね、子どもたちが、例えば外になかなか出てこないとか、外で遊ばないとか、集団が組めないとかっていうふうに、よく批判の矛先にされる場合がありますけれど、私から見ると、子どもたちが外に出てきても、少子化の影響で、なかなか自然発生的に集団が組めないとか、あるいは、そこで地域とのつながりがなかなか持てない。つまり、子どもの責任ではなくて、環境条件の責任だというふうに思っています。

そういった意味において、私たち大人と子どもたちをつなぐというのは、意図的に環境づくりをして大人が意識的に子どもたちにかかわっていく視点が必要かと思います。そんな意味では、私たち大人の側から、いろいろなプログラムやプロジェクトを立案して、そして子どもたちとつながっていくことが重要かなと感じました。

司会 いろいろな先生がいて面白いですが、この大学は。

話がつながってきました。もう一度、李先生からコメントをお願いしたいと思います。

◆仮想水：水の豊かな日本の水の輸入

李 日本に来て10年なんですけれども、いつも感じていることなんですけど、非常に水が豊かでおいしいお米が作れていて、緑がいっぱいなんですよね。

一方、私はこの5年間、中国の西北部や、カザフスタンや、モンゴルの乾燥地域に研究に行った報告をする際に、「いや、それは乾燥地域の水管理の問題である。われわれ日本は水豊かだから、あんまり

関係ないんですね。」みたいなコメントをいただきます。

そういっても日本の生活は、乾燥地域の農業生産とも、非常に緊密に連携していると思います。

水文学という研究領域があり、基本的にはモデルづくりです。最近では、水文学のモデルに、経済モデルも組み込んで経済水文モデルとか、水文経済モデルっていう開発も盛んに行われるようになって、注目されている分野は、バーチャルウォーター（仮想水）っていう研究なんです。どういう水かという、その、私たちの生活は、輸出、輸入、国際貿易で成り立っている部分が大いだけれども、そういうものの流れに含まれている、間接的な水の流れです。

日本国内の年間の水資源使用量890億トンに対して、実は私たちは、輸入で間接的に輸入しているほかの国々の水は、1,035億トンなんです。つまり、輸入している間接的な水の流れは、私たち日本で直接使っている水よりも多いのです。

乾燥地域って、砂漠のイメージがあるんですけれども、実はそうではなくて、世界の陸地のうち、砂漠の面積は大体7.5%ぐらいしかないんですけれども、それに対し、39%は砂漠ではない乾燥地域です。つまり非常に水が少なく、もっと乾燥したらすぐ砂漠になってしまうというような乾燥地域が39%、つまり4割弱は、砂漠になりやすい地域なんです。

そういう地域は、実は気候条件とか、日射条件が非常に良くて、水さえあれば、非常に良質な作物、農作物が作れます。現在世界では乾燥地域の農地は面積で世界全体の20%を占めていますけれども農業生産量の30%を占めています。私たちの生活は乾燥地域で作られた作物に支えられているっていう一面もあります。確かに日本は水が豊かなんですけれども、その豊かさは、実は、外国の水を使っているから豊かに見えているっていうことです。最後にはグローバルな視点で、一緒に水問題という環境問題をぜひ考えていただきたいと思います。

司会 水の豊かなのは見かけだけ、実は乾燥地域からも輸入している。そうすると、阿賀野川は日本でも有数の流量があり、恵みっていうものに、われわれ今までいったどうやって向き合ってきたのか。

阿賀野川って、川ガキいます？

山崎 川ガキ？ 子どもですか。

うーんと、いないです。

司会 これ、川ガキっていうのはですね、子どもを川に連れて行って遊ばせようと、大人が一生懸命やるんです。阿賀野川って、これ、川ガキがどんどんいたほうが面白いんじゃないかなと思うんですよ。津川には、カッターの試合場もありますけれども、ああいうところでプロがやるだけじゃなくて、川にジャブジャブ飛び込んで遊んでいるという、子どものときからそういう経験をしておくと、やっぱり大人になってですね、銀行の地下でお金を数えるような仕事でも、普段から川との関係を考える。

◆阿賀野川ブランドの可能性

司会 デコポンっていう、上のへたのところがびよこんって出っ張ったこんなみかんがありますよね。水俣が主産地です。でも、水俣とは書いてない、「不知火」って書いてある。阿賀野川流域で名物がかなりの量あります。サトイモ、五泉の名物なんですけれども、「五泉」とは書いてあるんですけど、「阿賀」とか「阿賀野川」って書いてないんですよ。

山崎 阿賀野川が肥沃な土壌を運んできていいサトイモができるんですね。阿賀野川の恵みがあったから、こんなにいいサトイモができたと生産者はおっしゃっているんだけど。そこに阿賀野川ブランドを付けると、新潟水俣病のことが思い出されるかもしれないということで、まだ今はあまり付けられないっていうことを、生産者の方がおっしゃっている。

司会 鱒の寿司は富山の名物ですが「神通川名産」ってばっちり書いてあります。堂々とやりやいいんですよ。ついでにここは、阿賀野大学にしましょうかね。

いい質のものを出品しにいったって駄目ですけど、いいものもあるんだから、いいとこだよって言うだけじゃなくて、それは堂々とやっていけばいいんじゃないかなって私は感じています。一言ずつお話をいただいて、締めたいと思います。

◆まとめ

山崎 咲花温泉は水害を受けていまして、それにもめげず、これから阿賀野川に向き合って生きていきたいっていうふうな意思から、京都の鴨川にあるような川床を造ったんですね。そこで何を出そうかっ

ていうので、早速小田さんの蒸しかまどを紹介したら、咲花温泉と小田製陶所さんって、川を挟んですぐ目の前なのに知らなかったんです。そういうつながり合わせを私たちはやっております。そういうことを積み重ねていくと咲花温泉はどうやって水害が起こらないようにするかに付随して、わざわざですね、新潟水俣病に向き合い乗り越えていく、阿賀野川エコミュージアムっていうものを進めていきますっていうのを、川まちづくりの一番最初に入れていただいたんですね。

咲花温泉の組合長さんは、以降、いろんなところであいさつするときに、「私たちは、新潟水俣病に向き合い、乗り越えていきます」というあいさつをしていただいて。で、小田製陶所さんは小田製陶所さんで、われわれのこの公害を学習した後に、流域を学びましょうという、そのツアーの際に、環境学習プログラムの舞台として、全国から来た大学生や子どもたちを受け入れてくれるんですね。そういうふうな役割をも担っている。具体的なそういう形で、私たち、進んでいっていますので、もっと流域で、目に見えるというか、意味のあるつながりを作り続けていけたらいいなと思います。

県立大学さんとも一緒にお仕事をさせていただければ、阿賀野川流域が、水俣病を乗り越えて、もっと全国に発信していける。だから、そうすると、名産里芋の帛乙女の生産者も、阿賀野川ブランド使ってみようかっていう気になるかと思うんですね。そういう場所にしていきたいなというふうに考えております。

李 あがのがわ環境学舎さんが考えているツアーのこととかも含めて、発信していくというところが大事なことだと思うので、こうやって興味を持って来てくださっている方じゃない方々にも知ってもらって、どう未来につなげていくか。これから新潟も負の遺産みたいなものを世界に発信していくということで、知らない人っていうのは、関心を示してくれないんで、それをいかに興味を持ってもらって、知ってもらえようかっていうことは、これから大きな問題なのではないかなというふうに、この公開講座を通じて考えました。

朴 私は若い人たちを持っている大学の強みは絶対生かすべきだと思っているんですね。大学の資産といえば、学生全部だと思っているので、いかに元気のいい学生をつくるのかっていうことですが、大学

だけではとってもじゃないけれども、たくましい学生っていうものは、なかなか難しい。

幸い阿賀野川は、環境学習で日本が誇る環境学舎が来ていらっしゃる。環境学舎が自分で全部やるというのは無理だと思います。大学とのコラボをまずしっかり組んで、その主役は学生という形でやっていくデザインがまず必要なんじゃないかなと思います。

名前は大変重要なことなんですが、ほける名前は付けられないのかえっていいんじゃないか。名前が先にあって、ミッションがあるということもいいけど、ミッションが先にあって、名前が後にあるということも、一つの考え方じゃないかなというふうに思っているんです。

水俣がなんで水俣学なのか、それが熊本学になったときにどうなのか。ほけていますよね。で、四日市がなんで四日市学か。これが三重学になったときにほけています。決して間違っているのではないんですけれども、それと同じようなことがもし阿賀野川と、それから新潟とを考えたときに、同じようなことが言えるのかなっていうような、そういう運命的なことも感じるものがあります。

だから名前は、やっていく中で落ち着くと思っておりますが、あまり多岐にわたったもの、欲張って、インテグレートしたものをつくろうとすると失敗につながるので、まず分かりやすいこと、なんで環境と人間のふれあい館がこれだけいい言葉なのに、しっくりこないのかということ、二度と繰り返したくないかなという思いで、県立大学は何を目指してやっていくのかってということもはっきりしていると私は見ました。

まさにこの場が地域連携のプラットフォームにできていて、小田さんという事業者と、山崎さんのNPOと大学の学生がもう既に結び付いて、しかも、ここは市民の方もたくさんいらっしゃる。一緒になっていくってということも、やっぱり新潟学ではないかなという感じがしました。

いずれ新潟学になっていくし、どっかの日本海なるとかになるとは思うんですけれども、取りあえず原点がどこにあるのか、そういうのを絶対風化しちゃいけない。そこをもうちょっと慎重に考えて、若い人たちとのつながりをやっていって、少しずつ、実践の成功事例を作る。

2・6・2の法則がありまして、下の2と言って

は申し訳ないけれど、どうにもならない。そこには目を向けない。まず、頑張ろうとする2を、絶対逃げないようにしておいて、あと、どうしようかな、やりたいけどどうしたらいいかわからないわ、私一人の力ではどうにもならないという6の半分を割る。それで、6の半分の3を、私たちの味方にすれば5ですよ。5になったら、あとは早い。で、残りの2はどうでもいいんで、その次、残りの3をこっちにして、そういうふうな形になっていくと、おのずくとして、この場合、もう大体見えているんじゃないかなって感じがして。

勝手に名前、絶対に付けませんが。そういうことをちょっと考えていただければ、私が今日来た役割を果たしているのかなと思います。

◆県立大学への期待

発言者 資料館の名前の件については、患者会の方にも幾つかの団体がありまして、私たちの仲間は水俣病資料館っていう名称を要請しましたけれども、一つの患者会からは「そっとしておいてくれ」ってということで、妥協の産物としてサブタイトルとして「資料館」という名前が付いた歴史的な経過があります。患者の方々の中にも、いろんな考え方があります。熊本も鹿児島も含めて、水俣病問題というのは非常に深い背景と問題がまだまだあるんだ、ingの問題なんだということを確認する必要があると思います。

イタイイタイ病にしろ患者さんの数は縮小してきている、私も先日、イタイイタイ病資料館を見てきました。でも、熊本水俣病と新潟水俣病は、まだ万単位の患者さんが、50年たってもまだ手を挙げられない患者さんがいるという現実的問題がある、過去のことでは決してない問題なんです。

私が一番言いたかったことは、被害地域に一番近いこの県立大学が、水俣病問題を、あの、間違っていたらごめんなさい、初めてオープンな形で採り上げていただいたってというのは、非常にうれしく思っています。学生を含めて新潟水俣病問題をアプローチしだしたのは非常に大事なことだと思います。県立大学の公開講座は4回中2回しか出ていませんが、残念ながらまだ蓄積はないと思います。いろんな方々を呼んできて発信する程度の段階だと思いますけれども、泉田知事が環境宣言を出したように、

これを出発点に、学生も踏まえて水俣病の現在進行形の問題を学んでほしい。私は水俣学は人間学だと思っていますから、患者さんとの接触を大事にしていきたい。

新潟には、3,000名、4,000名の患者がいます。熊本、鹿児島は、万単位の患者がいます。ぜひ1人でも多くの患者さんと接するような、大学も集団として患者さんと接するような実践的なフィールドを提供していただきたい。私は、阿賀野患者会の事務局長として、全面的に協力させていただきたいと思いますし、患者の皆さんも、特に若い人に話すことについては、もうあと10年、20年しか生きられないという点では、大いに生きがいを持っています。学生の皆さん、今日新潟大学の3年生の卒論の学生を連れてきてますけれども、そのことを大事にしていきたい。で、県立大学として、全体として、そのことをバックアップするような、きちんと学問的に、体系立った、そういうものを位置付けていくような出発点にしていきたい。

新潟大学や医療福祉大学の先生、今日は県の担当者も来ていますが、泉田知事も理解がありますから、ぜひ水俣学、私は、新潟水俣病学だと思いますけれども、原田先生の学問に学びながら、ぜひ新潟で、それを生かしていただきたい。患者団体はいろんな考え方がありますが、多くの患者さんたちは、そのことにもろ手を挙げて賛成しているので、どうぞよろしくお願いします。

朴 一言だけ言わせてください。ほんとにおっしゃる通りだと思っています。四日市公害のところで、教訓が一つあります。なんで四大公害と言っている中で、四日市公害だけは資料館がなかったのか。それはお金がないからだったわけではありません、やる気がないからでもありません。やっぱり、中にはやってほしくないというような力がありました。ただ、起きて60年。裁判になって、判決が出て40年たって、今、一丸となって、資料館必要だねってなりました。

それが40年前に、患者さんの会とかいろんなところでも一丸となっていたら、また変わったかもしれない。これが40年たって、今つくりましょうという形になりました。やっぱり、資料館というものとか、次の世代に残すということの大切さを、四日市の、四日市患者の会とかいろんな会の方々が、

割れて割れて大変でつくらなかったけど、40年、50年たって、今、つくりましょうというふうになったということをどう思うのか。それは大変重要なことを意味していて、まさに県立大学が、これからいろんなことをやっている中で、大きな一つのやる意味というものを教えてくれているのじゃないかなと。

今日の四日市学で、一言言わなかったのはその部分だったんですが、おっしゃってくださったので言えて良かったと思います。

李 今日のはあがのがわ環境学舎のさまざまな取り組みについて勉強させていただきまして、私も昔中国で、NPO活動をやっていたことを思い出しました。実は、中国で環境教育を導入したのは極めて最近のことでありまして、私が学生のころはなかったんです。それで、私たちはNPO活動の一環として小・中・高の先生に対して、環境教育を提供する活動を行いました。

私たちが思っていた環境教育は、当時、私たちも素人なので、外部から専門家を呼んで講演をしていただく活動を行ったんです。親はもう既に町で住んでいるんですけれども、おじいちゃん、おばあちゃんはまだ遊牧民でゲル（テント）暮らしが多かったので、その子どもたちを先生と一緒にゲルに行って、昔の生活様式や、周りの自然環境の変化について聞いてきてくださいというような課題をやりました。

非常に好評でした。どういうふうに好評だったかというと、現地の先生は、今まで私たちは、環境教育という言葉を使っていたら、なんか、ごみを拾うとか、町を掃除するとか、雑草を取ったりとか、それが環境教育、環境保護だと思っていたんですけれども、地元の住民の話聞く、特に老人の話聞く。地元の、どういうふうにここまで来た。今、砂漠化が進行しているんですけれども、どうしてここまで来たのかという歴史を知ること自体が、環境教育、環境保全だと思っていませんでしたということ思い出しました。

私が行っていた内モンゴル地域は、日本や中国の大きなNPO団体も多く活動している地域です。ほとんどのNPOが砂漠に木を植えています。日本でも同じなんですけれども、環境保全っていったら木を植えるってということが頭に浮かんでくるんですけれども、乾燥地域では、実は木を植えてはいけな

んです。その地理条件があって、それで砂漠になっているわけなんです。で、木を植えてたら、その1本1本の木は貴重な貴重な地下水をくみ上げて、葉っぱを通して全部蒸発させてしまっているわけなんです。

で、そういう話、われわれは現地に行って、NPO団体の人々に話をしたら、みんな驚きました。で、こんな話聞いたことがありません。木を植えるのはもう、素晴らしいことだけだと思っていました。つまり、そのとき私が思ったのは、環境問題に関して、実は私たち、非常に勉強不足、認識不足ではないかと。生半可な知識で活動している人々は、実はたくさん存在しています。環境について勉強することは、学者のことでもないし、学生のことでもないし、すべての人々の仕事だと私は思っています。

そういう意味では、先ほど、水俣病は人間学とおっしゃっていましたが、恐らく、水俣病だけじゃなくて、環境学自体は、最終的な人間学であるのではないかと思います。

田口 この公開講座で環境学、あるいはそもそも水俣病に直接向き合うという話を、地域連携センターに関係している教員の間で、もろ手を挙げて賛成という話では実はありませんでした。むしろ、別にわざわざ火の中にあるクリを拾うとういうようなことをやらなくてもいいだろうと。

でもですね、県立大学がなんでここにあるのかなっていうことを考えたときに、あるいは、県立大学の授業は、なんで8時50分から始まるのかなっていうようなことを考えたときに、そこに県立大学の役割が一つあったんじゃないかっていうことで、センター長に合意を取り付けていただいて、この講座が成立した。

そういう点で、皆さんにお願いしたいんですけど、今、ようやくこうやって、卒業論文で新潟水俣病を採り上げようという学生が出てきたときに、温かく迎えていただきたい。分かってないじゃないか、知らないじゃないか、これじゃ駄目だなんてたいたたらですね、二度と入ってきません。研究材料はほかにいくらでもあります。でも、そうやってつないでいくことが、われわれのミッションだなんていう理解がようやくできたところですから、ぜひ温かく受け止めて知らないなと思ったら、教えてあげてください。

行政っていうか、権力とけんかするだけで物事が解決するかっていったら、それは無理なんです。しかし、権力者の好きなようにやらせたって、世の中良くならない。住民にきちんと向き合う。そして、一番弱いところが一番最初に痛めつけられているんだよっていうことを強い立場のものにこそ知らせる。そこが一番大事なんじゃないかなって思っています。

公共政策大学院に勤めていたときに、恐らく中央官僚になる学生に阿賀野川流域をずっと歩かせました。日本の国土の7割か8割はこういうところだぞ。車が1回来たら、3時間、4時間来ないんだよと。本郷三丁目で待っていると丸ノ内線は2、3分おきに来ます。時刻表を見て地下鉄乗るやつはいません。だけど、こういうところが日本の大部分なんだよ。そこに水力発電所が造られて、工場が造られて、そして、水俣病ということを起こしてしまった。それにしっかり向き合うのは、住んでいる人たち以上に、君たちだよっていうようなことを教えてきたつもりです。

新潟に来てから、なぜここで言及されてないかっていうこともよく分かりました。新潟で新潟水俣病を研究するっていうのは大変度胸の要ることのはずです。しかし、おっしゃるように、今の知事がいる間にその骨格が少しでもできて、何よりも大事なのは、県立大学が、地域と一緒にやっているんだっていう、その枠組みさえできれば、ずっとつなげていけるんじゃないかなと思います。だから、地元で、地域の中で、普通に研究ができるっていうような仕組みを皆さんがぜひ温かく支えていただければ、今回のたった4回の講座で、確かに蓄積は大してありません。しかし、先に続くんじゃないかなって、私は考えています。

渡邊 年の瀬のご多用、また雨の中、講師の先生、朴先生、山崎先生、ほんとにありがとうございました。朴先生は三重大で中心になられて成果をご披露していただいたっていうことで、私たちこれから、県立大学として参考にさせていただきたいと思っています。山崎さんはこれからぜひ一緒にお願いしていきたいと思っています。

4回のこのシリーズに参加していただきました市民の皆さま、本当にありがとうございました。ぜひ先生方のお話の中にもありましたように、県立大学と

共に、地域の市民の活動として、ぜひ学生教育にご支援を賜りたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

だいふ時間が押しておりますので、これで閉会にさせていただきますと思います。参加者の皆さま、ありがとうございました。

◆謝辞

第1回「バスツアー 阿賀野川流域を知る」、第4回「阿賀野川流域から発信する」実施にあたり、次の各所から資料提供等のご協力をいただきました。御礼申し上げます。

新潟市 北区役所産業振興課様、江南区役所産業振興課様、
秋葉区役所産業振興課様

五泉市役所 商工観光課様

阿賀野市役所 商工観光課様

阿賀町役場 企画観光課様

国土交通省北陸地方整備局 阿賀野川河川事務所様

水俣市立水俣病資料館様

三重県環境学習情報センター様

公益財団法人国際環境技術移転センター様

四日市市役所総務課様、四日市市環境学習情報センター様

富山県立イタイイタイ病資料館様

新潟県立大学平成24年度公開講座
「阿賀野川流域から世界へ」記録集

第4号・平成25年3月

新潟県立大学地域連携センター

運営委員 センター長 : 山中知彦

国際地域学部: 小谷一明・菅井清美・田口一博

人間生活学部: 植木信一・渡邊令子(副センター長)

事務局 阿部一郎・沼田渉・滝沢豊



新潟県立大学

University of NIIGATA PREFECTURE

〒950-8680 新潟市東区海老ヶ瀬471番地

TEL:025-270-1300 FAX:025-270-5173

<http://www.unii.ac.jp/>